ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 58

富山市豊田大塚・中吉原遺跡
発掘調査報告書

とよたおおつか　なかよしわら

-DSG WORLD 豊田店駐車場棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

2013

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告 58

富山市豊田大塚・中吉原遺跡
発掘調査報告書

-DSG WORLD 豊田店駐車場棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

2013

富山市教育委員会

例　　言

1 本書は、富山市豊田本町3丁目地内に所在する豊田大塚・中吉原遺跡の発掘調査報告書である。
2 調査は、DSG WORLD 豊田店駐車場棟新築工事に伴うもので、西原物産株式会社から委託を受け、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの指導・監理の下で北陸航測株式会社が実施した。
3 調査期間、調査面積、調査担当者は以下のとおりである。
　調査期間　現地調査　平成24年9月21日～平成24年10月31日
　　　　　　出土品整理　平成24年11月1日～平成25年7月31日
　調査面積　1,031 ㎡
　調査担当者　監理担当　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主査学芸員　堀内大介
　　　　　　調査担当　北陸航測株式会社　学芸員　朝田　要　橋　日奈子
4 本書は、第Ⅰ章第1節・第Ⅱ章を堀内が、第Ⅰ章第2節・Ⅲ・Ⅴ章を朝田が執筆した。編集は堀内・朝田が行った。
5 自然科学分析は、株式会社古環境研究所・株式会社吉田生物研究所に委託し、その成果は本書「第Ⅳ章　自然科学分析」に掲載した。また出土木製品の保存処理は、株式会社古環境研究所・株式会社吉田生物研究所に委託し、糖アルコール保存処理法および高級アルコール処理法で行った。
6 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
7 調査にあたり、豊田本町3丁目町内から多くのご協力を賜った。記して謝意を表します。

凡　　例

1 本書で用いた座標は国土座標Ⅶ系に準拠した。方位は真北、水平基準は海抜である。
2 土層及び遺構埋土、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠る。
3 遺構記号は、竪穴建物 :SI、掘立柱建物 :SB、道路 :SF、畠 :SN、溝・沼 :SD、土坑 :SK、柱穴 :SP、性質不明遺構 :SXを用いた。
4 遺構番号は、調査時に付した番号をそのまま使用した。
5 図中のアミカケは、各頁に凡例を示している場合を除き、以下のとおりである。
　スス・炭化物・油煙痕　　赤彩　　地山
6 遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。
　①遺構埋土に切り合い関係がある場合は、遺構一覧表特徴欄に古＜新のように記号で記す。
　②規模・法量の（ ）は現存長である。

目　　次

第Ⅰ章　調査の経過
　第1節　調査にいたる経過 ・・・・・・・・・・ 1
　第2節　発掘調査及び整理作業の経過 ・・・・・・・・・・ 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第1節　地理的環境 ・・・・・・・・・・ 2
　第2節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・ 2
第Ⅲ章　調査の方法と成果
　第1節　調査の方法 ・・・・・・・・・・ 5
　第2節　自然地形と基本層序 ・・・・・・・・・・ 5
　第3節　遺 構 ・・・・・・・・・・ 5
　第4節　遺 物 ・・・・・・・・・・ 15
第Ⅳ章　自然科学分析
　第1節　環境考古学分析 ・・・・・・・・・・ 48
　第2節　放射性炭素年代測定 ・・・・・・・・・・ 58
第Ⅴ章　総 括
　第1節　豊田大塚・中吉原遺跡と周辺遺跡の様相 ・・・・・・・・・・ 63
　第2節　古墳時代初頭～前期土師器の組成及び編年的位置付け ・・・・・・・・・・ 66
　第3節　折衷型土器について ・・・・・・・・・・ 71
写真図版

挿図目次

第1図　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第2図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第3図　調査区割図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第4図　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第5図　古墳時代遺構出土土師器器種分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第6図　遺構全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26・27
第7～17図　遺構実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28～38
第18～26図　遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39～47
第27図　花粉ダイアグラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第28図　主要珪藻ダイアグラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第29図　主要遺構の変遷と周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第30図　古墳時代の周辺遺跡の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第31図　古代の推定道路と集落遺跡・荘園比（擬）定地・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第32図　古代推定道路図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第33図　古墳時代主要遺構出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
第34図　折衷型土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72

表目次

第1表　遺構一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12～14
第2表　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21～25
第3表　花粉分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第4表　珪藻分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54・55
第5表　種実同定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第6表　樹種同定結果（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第7表　樹種同定結果（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第8表　放射性炭素年代測定試料及び処理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
第9表　放射性炭素年代測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
第10表　主要遺構出土古墳時代土師器の出土数量・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
第11表　主要遺構出土古墳時代土師器　器種・組成グラフ・・・・・・・・・・・・・・・ 69

写真図版目次

図版1　航空写真・第1工区全景
図版2　調査区全景
図版3　沼
図版4　沼・溝・土坑
図版5　竪穴建物・土坑
図版6　柱穴・溝
図版7　土坑
図版8　第2工区全景・溝・土坑
図版9　掘立柱建物・土坑・溝・作業風景
図版10～12　SD01 出土土器
図版13　SD01 SD51 SK35 SX157 出土土器
図版14　SK32 SK35 SD01 出土土器
図版15　SD01 SD51　SD55　SD66 SD72 SD98 SI61 SI107 SK32 SK35 出土土器
図版16　SI107 SP8 SP26 SP27 SK32 SK34 SK35 SK36 SK48 SK178・SX157 出土土器
図版17　古代以降遺構出土土器・Ⅱ層出土土器・陶磁器・土製品・石製品
図版18　SD01 SB3-SP15 SB1-SP26・SP27 SB2-SP52・SP53 出土木製品

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査にいたる経過

豊田大塚・中吉原遺跡は、昭和 63 年～平成3年に富山市教育委員会が実施した分布調査で発見した遺跡である。平成5年に「豊田大塚遺跡」(市№201197)、「豊田中吉原遺跡」(市№201198)として、『富山市遺跡地図』に登載し、周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととなった。平成 14 年に遺跡が所在する地名を基に「豊田大塚遺跡」から「豊田大塚・中吉原遺跡」へと改称した。

平成7年、豊田大塚遺跡において店舗建築に先立ち、1,500 ㎡の発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代晩期～弥生時代終末期の沼跡、弥生時代終末期の木道跡・土坑・井戸・さらし場遺構・土器集中廃棄、平安時代の溝を検出した。特筆すべきは、平安時代の溝から出土した律令祭祀具である人面墨書土器・人形・斎串である。本遺跡の北方約 1.1km に位置する米田大覚遺跡は「新川郡衙」と比定しており、祭祀具が出土した溝は新川郡衙の祭祀場と考えた。また、沼には御物石器、石刀、土偶など縄文時代晩期の祭祀遺物の廃棄や弥生時代終末期の土器集中廃棄が見られ、縄文時代や弥生時代に水辺の祭祀が行われていたと推測した（市教委 1998)。

平成 24 年7月 13 日、DSG WORLD 豊田店駐車場棟新築工事について埋蔵文化財所在の照会がなされ、建設予定地全域 3,890.61 ㎡が埋蔵文化財包蔵地「豊田中吉原遺跡」に含まれているため、試掘調査を行うこととした。事業者である西原物産株式会社との事前協議で、現状の青空駐車場の一部はアスファルトを除去せず、そのまま利用することが分かり、その部分 1,946 ㎡は試掘調査から除外した。同年9月4日～5日に市教委による試掘調査を実施し、駐車場棟新築範囲のうち 1,851 ㎡に遺跡の所在を確認した。調査では弥生時代終末期～古墳時代前期の溝・土坑・ピットを検出し、縄文土器、弥生土器、古墳土師器、古代須恵器などが出土した。

この調査結果に基づき、事業者と建設にかかる埋蔵文化財の取り扱いの協議を重ねた結果、基礎杭および地中梁部分、エレベーター部分の掘削工事が遺構面に達することから、その範囲 1,031 ㎡（杭・梁が集中する中央部分・エレベーターを含むエレベーターとの連結部分は全面調査）について記録保存のための発掘調査を実施することとした（第3図)。発掘調査は、西原物産㈱の全面協力を受け、事業者と委託契約した民間発掘会社が行い、市埋蔵文化財センターが監理することとした。民間発掘会社は、北陸航測株式会社が選定された。

この協議結果措置について、平成 24 年9月 19 日付けで、西原物産㈱・市教育委員会・北陸航測㈱の三者による協定を締結し、9月 21 日より発掘調査に着手した。

今回の調査結果に基づき、「豊田中吉原遺跡」が「豊田大塚・中吉原遺跡」と一連の遺跡と考えられたため、平成 25 年3月に2遺跡を統合し、『富山市遺跡地図　改訂版』に新たに「豊田大塚・中吉原遺跡」(市№2010246) として登載した。本報告書は、新たな名称で刊行するものである。　（堀内）

第2節　発掘調査及び整理作業の経過

平成 24 年9月 21 日から重機による砕石除去を行い、砕石除去完了後の翌 25 日から表土機械掘削を開始した。立体駐車場建設に向けて現地発掘調査期間が短期間に限られていたことから、表土掘削と併行して人力による遺物包含層掘削・遺構検出を行った。9月 28 日に調査区北側の第1工区の遺構検出を完了し、翌 29 日に検出状況の写真を撮影した。10 月1日から遺構掘削を行い、10 月 16 日にはラジコンヘリによる第1工区の空中写真測量を行った。

第1工区の遺構掘削と併行して第2工区の表土機械掘削を 10 月 11 日から行った。翌 12 日から人力による包含層掘削・遺構検出を行い、20 日から遺構掘削を開始した。10 月 25 日に遺構掘削を完了し、30 日にラジコンヘリによる第2工区の空中写真測量を行った。以上の作業と併行して、随時写真撮影・トータルステーションによる測量・図面作成作業等を行った。現地調査は 10 月 31 日に完了した。

遺物整理・報告書作成作業は現地作業終了後、11 月1日から北陸航測株式会社で実施した。作業内容は、遺物洗浄・注記、接合・復元・実測・トレースの他、原稿執筆・遺物写真撮影・図版作成である。平成25年7月31日に本書を刊行して業務を完了した。　（朝田）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

本遺跡は、富山市の北部に位置し、豊田本町3丁目地内に所在する。県道八幡田・稲荷線が遺跡中央を縦断する。

本遺跡が位置する豊田本町3丁目は、富山市街地から北北東約 4km にある。北方約 4km には富山湾があり、西方約2 km には神通川が北流し、東方約 3.4km に常願寺川が北流する。この辺りは、神通川と常願寺川により複合扇状地が形成され、その過程で多くの自然堤防が発達した。本遺跡が所在する自然堤防は、南の豊田本町1丁目から北の豊若町1丁目にかけて広がり、北西から南東にゆるやかな傾斜をもつ。標高は8～ 10mを測る。調査地点の現標高は約 8.5m、遺構検出面は約 7.5mである。

この自然堤防の南東には、「フゴ」と呼ばれる常願寺川の伏流水が湧き出す湿地帯が広がり、現在もその名を冠した地名（上冨居、中冨居、下冨居）が残る。「フゴ」から西の自然堤防には、いくつかの谷地形が開析している。本遺跡北側の谷地形はその一つである。最も急峻な谷地形は、本遺跡と南の豊田遺跡との間にあり、元々は地続きだった自然堤防が氾濫により分断されたものと推定している（市教委 1974）。

第２節　歴史的環境

本遺跡の周辺の自然堤防には、縄文時代晩期から遺跡が顕著になり、近世に至るまで継続的に遺跡が営まれている。

縄文時代前期には、この頃に起きた海進により広がった旧放生津潟の湖畔や内陸の丘陵上に集落が営まれ、神通川左岸には小竹貝塚、蜆ヶ森貝塚などが知られる。縄文時代後・晩期には海退が進み、海岸砂丘上に晩期前半の「岩瀬天神式土器」の標識遺跡である岩瀬天神遺跡や浜黒崎野田・平榎遺跡などが営まれる。本遺跡周辺の自然堤防上には、豊田遺跡、豊丘町遺跡がある。

弥生時代前期には、神通川左岸の打出遺跡や右岸の豊田遺跡、宮町遺跡などが知られるが、散発的に確認される程度である。弥生時代中期中葉以降になると遺跡数が増加し、前期から継続する遺跡に加え、岩瀬天神遺跡や浜黒崎悪地遺跡など海岸部にも立地するようになる。豊田遺跡では、緑色凝灰岩、翡翠、管玉など玉作関係遺物が出土した。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては各地で遺跡数が増加する。神通川旧河道流域では、左岸に打出遺跡（法仏式～高畠式）、今市遺跡（月影式）、八町Ⅱ遺跡（高畠式）など、右岸に四方荒屋遺跡（戸水B式～古府クルビ式）、四方背戸割遺跡（戸水B式～法仏式）、永代割遺跡（法仏式～古府クルビ式）などの集落遺跡が所在する。打出遺跡では、県内最多の鉄器が出土し、神通川・常願寺川下流域の拠点的集落であったと評価している（市教委2006）。神通川左岸の河岸段丘上には、百塚遺跡・百塚住吉遺跡があり、当該期の方形周溝墓や前方後方墳、前方後円墳を 28 基発掘し、呉羽山丘陵北端部に「百塚古墳群」が造営されることを確認した（市教委 2009・2012）。

白岩川流域では、新堀西遺跡（法仏式～高畠式）、清水堂南遺跡（法仏式～月影式）、浦田遺跡（古府クルビ式、舟橋村）、利田横枕遺跡（古府クルビ式～高畠式、立山町）などの遺跡が所在する。白岩川や上市川流域では、いくつかの「ムラ」を形成し、それらを統括する「新川のクニ」というべき政治社会が形成されつつあったとされる（久々 2001）。中でも、新堀西遺跡は古墳時代前期まで長期継続する集落遺跡であり、打出遺跡のように交流拠点としての役割を持つ拠点的集落であったとされる（青山2013）。白岩川流域には「白岩川流域古墳群」が形成された（鹿島1999）。弥生時代終末期には、清水堂南遺跡で方形周溝墓や円形周溝墓が作られた。古墳時代前期には、竹内天神堂古墳（前方後方墳、舟橋村）、柿沢古墳群（立山町）が築造された。

本遺跡のある神通川と常願寺川に挟まれた地域では、飯野新屋遺跡、宮町遺跡などが知られており、飯野新屋遺跡では月影式～古府クルビ式の井戸や溝などを検出し、宮町遺跡では溝や井戸などを検

第1図　周辺の遺跡（1:50,000）

1. 豊田大塚・中吉原遺跡　2. ちょうちょう塚　3. 豊田本町1丁目遺跡　4. 奥田神社遺跡　5. 犬島遺跡　6. 豊丘町遺跡　7. 豊田遺跡　8. 下冨居遺跡　9. 豊田中吉原Ⅱ遺跡　10. 米田南遺跡
11. 米田大覚遺跡　12. 瀧町遺跡　13. 千原崎遺跡　14. 草島遺跡　15. 森遺跡　16. 森B遺跡　17. 岩瀬天神遺跡　18. 岩瀬天神Ⅱ遺跡　19. 日方江城跡　20. 宝集寺遺跡
21. 大村遺跡　22. 浜黒崎遺跡　23. 浜黒崎町畑遺跡　24. 浜黒崎飯田遺跡　25. 高来遺跡　26. 浜黒崎野田Ⅱ遺跡　27. 横越遺跡　28. 浜黒崎野田・平榎遺跡　29. 野中新長幅遺跡　30. 平榎亀田遺跡
31. 浜黒崎愚地遺跡　32. 高島島廻遺跡　33. 宮条南遺跡　34. 高島遺跡　35. 水落遺跡　36. 水落南遺跡　37. 飯野新屋遺跡　38. 新屋殿田遺跡　39. 飯野小百苅遺跡　40. 宮町遺跡
41. 小西北遺跡　42. 三上遺跡　43. 三上Ⅱ遺跡　44. 金泉寺遺跡　45. 沖遺跡　46. 針原中町Ⅰ遺跡　47. 針原中町Ⅱ遺跡　48. 宮成遺跡　49. 水橋荒町・辻ヶ堂遺跡　50. 水橋中村遺跡
51. 水橋的場遺跡　52. 水橋二杉遺跡　53. 水橋入部遺跡　54. 沖遺跡　55. 鷲野城跡　56. 中野遺跡　57. 金尾新西遺跡　58. 新庄西遺跡　59. 金尾新遺跡　60. 中富居遺跡
61. 日方江遺跡　62. 日方江Ⅱ遺跡　63. そうけ塚　64. 精豊塚　65. 大村城跡

第2図　調査区位置図（1：4,000）　沼（古墳時代推定範囲）

出し、玉作関係遺物が豊富に出土した。本遺跡の西には、古府クルビ式期に築造された方墳であるちょうちょう塚がある。

古墳時代中期では、白岩川流域に県史跡・稚児塚古墳（円墳、立山町）をはじめとして、藤塚古墳（円墳、立山町）や塚越古墳（円墳、立山町）、清水堂大塚古墳（円墳）、若王子塚古墳（円墳）、宮塚古墳（方墳）など数多くの古墳が築造される。

奈良～平安時代には、古代律令期に関わる遺跡が多数所在する。本遺跡の北方約 1.1km にある米田大覚遺跡では掘立柱建物 32 棟、井戸、道路遺構などを検出し、208 点にも及ぶ墨書土器や石帯、緑釉陶器、風字硯などが出土したことから、「新川郡衙」と考える（市教委 2006）。常願寺川右岸にある水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は、『延喜式』に記載された越中八駅の一つである「水橋駅」と推定される。神通川左岸の百塚住吉D遺跡では、馬小屋の可能性がある大型土坑を検出し、婦負郡「寒江郷」との関連性を指摘した（市教委 2012）。また、打出遺跡、水橋金広・中馬場遺跡などでは、古代北陸道と考えられる道路跡が確認されている。藤田富士夫氏は駅路の他、郷を結ぶ通路や東大寺領荘園「丈部荘」「大荊荘」比定地も含めた検討をしており（藤田 1998・2001）、本遺跡を通る交通路の存在を指摘している。北は「磐瀬駅」に比定される蓮町遺跡や「新川郡衙」に比定される米田大覚遺跡への道路、東は水橋金広・中馬場遺跡周辺を比定地とする「丈部荘」開田図の「尾前道」、南は「宅持」の墨書土器が出土から官衙関連施設の可能性のある「総曲輪遺跡」方面への道路を想定している。

中世になると、海岸部に大村城、日方江城などの城館、白岩川流域には小出城や仏生寺城（舟橋村）などが築かれる。神通川左岸には中世の遺跡が集中する。この辺りは、室町時代頃に成立した『廻船式目』にみえる十大港（三津七湊）の一つである「越中岩瀬湊」の有力候補地とされる。四方荒屋遺跡、四方北窪遺跡や打出遺跡などでは中国製陶磁器の出土や屋敷跡などを確認し、港湾都市的な性格が考えられている（中世岩瀬湊調査研究グループ 2004）。白岩川流域では、水橋専光寺遺跡や水橋金広・中馬場遺跡などの集落遺跡が所在する。水橋金広・中馬場遺跡では、遺跡の西側北部で中世後期～近世初期を主体とする大溝で区画された館跡を検出し、出土遺物にヤスを線刻した木摺臼、金属製のヤスなどがあることから、中世末から近世にかけて河川漁にかかわる生業が営まれていた館跡と推測した（市教委 2001・2006）。米田大覚遺跡では、中世後期の居館の区画溝などを検出し、荘園「米田保」との関連を指摘した（市教委 2009）。千原崎遺跡は、中世末から近世にかけて神通川にかかる渡し場の宿場的な遺跡と考えられる。（堀内）

引用・参考文献

青山　晃 2013「第Ⅴ章　新堀西遺跡　6総括」『上梅沢遺跡　水橋金広・中馬場遺跡　新堀西遺跡発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

鹿島昌也 1999「白岩川流域古墳群」『シンポジウム富山平野の出現期古墳』富山考古学会

久々忠義 2001「弥生農村の風景と政治社会の誕生」『ふるさと富山歴史館』富山新聞社

中世岩瀬湊調査研究グループ 2004「「海中から中世岩瀬湊を探る」15 年度海底探査報告」『富山市日本海文化研究所報』第 33 号　富山市日本海文化研究所

富山市教育委員会 1974『富山市豊田遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 1998『富山市豊田大塚遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2001『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2006『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

富山市教育委員会 2006『富山市打出遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2006『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2009『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2009『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2012『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2012『富山市百塚住吉D遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

藤田富士夫 1998「東大寺領大藪荘の現地比定と遺跡」『古代探求』中央公論社

藤田富士夫 2001「東大寺領越中国荘園「丈部荘」の現地比定と若干の考察」『富山史壇』135・136 号　富山史壇会

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第1節　調査の方法

発掘調査は、建設工事の工程上、北側の引き渡しを早急に求められていたため、調査区を南北の2工区に分け、調査を進めた。また、調査区の形状が複雑であるため、調査対象外区域の表土・砕石を残したまま調査を進めると崩落の恐れが大きいことから、最初に建設工事予定区域全域 2,550 ㎡の表土・砕石をバックホウで除去した。そののち調査範囲をトータルステーションで測量・設定し、試掘調査の結果を踏まえながら、造成盛土等表土を遺物包含層上面までバックホウにより掘削・除去した。バックホウによる表土掘削が、安全と認められる範囲まで進んだ段階で遺物包含層の人力掘削を開始し、合わせて遺構検出を行った。北側の第1工区の遺構検出が終了した段階で検出状況写真を撮影し、遺構掘削を開始した。第1工区の進捗段階に応じて、南側の第2工区のバックホウによる表土掘削・除去、人力による包含層掘削を進めた。第1工区の空中写真測量、残務、完了検査と同時に第2工区の遺構検出を行い、検出状況写真撮影後、第1工区と同様の工程で調査を進めた。

遺構は断面観察用の畦を残して掘削したが、調査区内外周壁が遺構断面にかかり断面観察が出来る場合は、畦を残さず掘削した。断面は写真・図面記録をとったのち、完掘した。重要と認められる遺構出土遺物は、出土状況写真を撮影し、出土状況図を作成したのち、トータルステーションを使用し出土位置の三次元データを取得した。

複雑な調査範囲のバックホウによる掘削順序を明瞭化するため、掘削を進める北東端から掘削範囲・トレンチ単位でナンバリングし（第3図①～㉔）、表土掘削で出土した遺物は、この番号単位で取り上げた。また測量基準点設置後に、X80600.000Y6400.000 をF2南西角基準点、南西端を起点A1 とする、国土座標第Ⅶ系と同調し全調査範囲をカバーする 10m単位の方形区画を設定した（第3図）。この方形区画を基準に、概略図の作成や空中写真測量、遺物包含層出土遺物の分類整理などの作業を行った。また、A1 を起点に、南北方向をX1～X70、東西方向をY1～ 60 まで2m単位で方形区画を細分した小グリッドを設定し、遺物包含層掘削時の遺物取り上げに使用した。

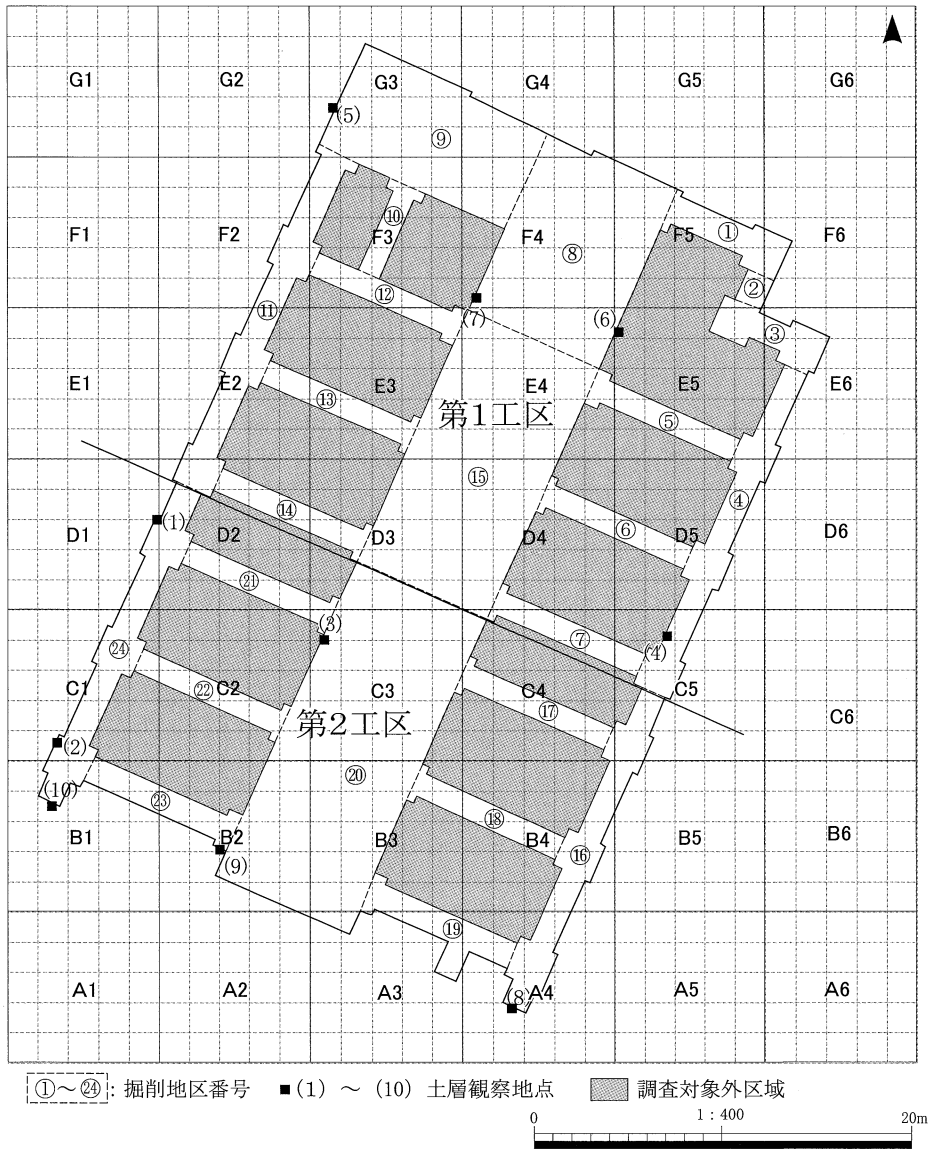
第2節　自然地形と基本層序

調査地周辺の現況はほぼ平坦で、宅地として利用されている。海岸線からの距離は約4kmで、現況の標高は約 8.5mである。当調査区を含め近隣地域は微高地であり、南から海岸線のある北側に向かって緩やかに傾斜する地形が広がる。旧地形では、蛇行していた神通川の河道に代表される多数の旧河道や河岸段丘、湿地帯や微高地が入り組んだ複雑な旧地形が復元される。今回の調査区の遺構検出面の標高は約 6.6 ～ 7.5mであり、約 150m北東に位置する 1995 年（平成7年）度調査区（旧豊田大塚遺跡）の遺構検出面の標高 8.7mと比べ最低でも約1m低く、豊田大塚・中吉原遺跡範囲全体として東に向かって緩やかに傾斜し低くなる地形が復元できる。また調査区北端で確認した縄文時代晩期～古代まで存続した沼の痕跡は、1995 年度調査区の旧沼地とつながるものと推察できる。

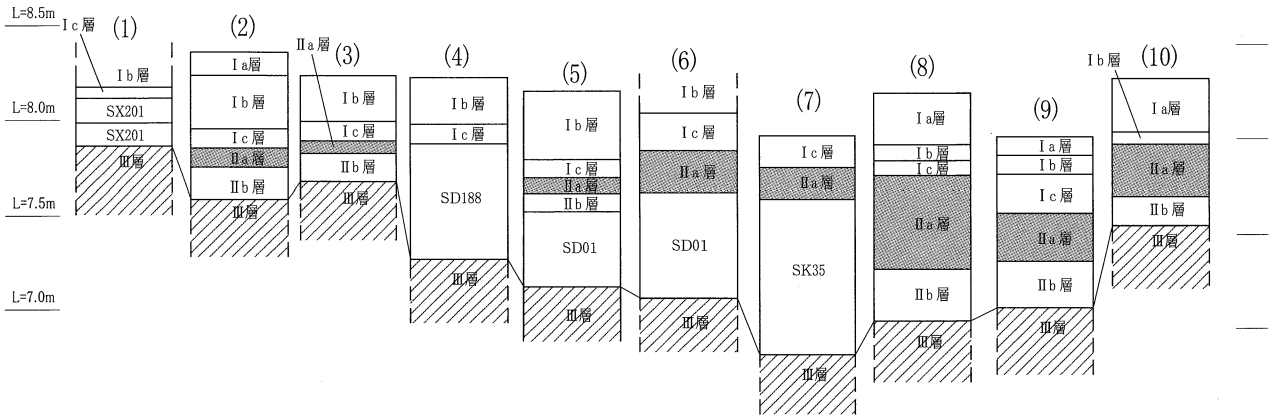
調査区の基本層序は、主に調査区壁面を用いて観察を行った。層序は表土・砕石・盛土から下を、Ⅰa 層からⅢ層までの6層に分けた。上層からⅠa ～ c 層:灰黄色 / 灰黄褐色シルト（旧表土）、Ⅱa 層：黒褐色シルト（遺物包含層）、Ⅱb 層:黄灰色シルト（漸移層）、Ⅲ層:灰黄色シルト(地山 / 遺構検出面) である。今回の調査では、一部でⅡb 層上面で検出できる遺構がみられたが、Ⅲ層上面で明瞭に確認されたため、上層で検出できた遺構は輪郭を残して掘り下げ、そのほかはⅢ層上面で検出した。

第3節　遺　構

遺構は調査区全域で検出した。検出した遺構の総数は 244 を数え、種類は、沼1基、溝 58 条、竪穴建物2棟、掘立柱建物4棟、土坑 157 基、性質不明遺構4基、柱穴 18 基である。遺構の時期は、主に古墳時代前期、古代、中世の3期に属すると考えられる。調査区は、北西と中央部分を除く調



第3図 調査区割図



盛土　10YR4/1 褐灰色シルト
Ⅰa層：2.5Y6/2 灰黄色シルト
Ⅰb層：10YR5/2 灰黄褐色シルト（2.5Y3/1 黒褐色シルト
　　ブロック状 10%混）
Ⅰc層：10YR5/2 灰黄褐色シルト
Ⅱa層：2.5Y3/1 黒褐色シルト（遺物包含層）
Ⅱb層：2.5Y4/1 黄灰色シルト（漸移層／上層遺構検出面）
Ⅲ層：2.5Y6/2 ～ 7/2 灰黄色シルト（地山／下層遺構検出面）

第4図 基本層序

査範囲はトレンチを組み合わせた形状を呈しており、調査区内に多くの調査対象外区域が存在する。

1. 古墳時代

(1) 沼、溝

SD01（G3～5区・F4～6区・E6区／第6～9図、写真図版3・4）

調査区北端に位置し、調査区外に拡がる沼の南肩部分である。東西方向に長軸を持ち、調査区内で全長約36m、最大幅約14m、最深部で約1.1m、調査区内で総面積は約211.8㎡を測り、調査範囲の1/5以上を占める。自然科学分析の結果から、自然流路→沼→沼沢湿地という経過を辿ったと考えられ、当該期は沼であった可能性が高い。また、北西に位置する1995年度調査区で検出した沼跡の延長部分と推察できる。

埋土は大きく3層に分けられる。第1層（上層）は暗灰黄色シルトを基調とする。自然科学分析の結果から、沼の大部分が埋没し貯水機能がほとんど失われた段階、周辺地域と比較して相対的に低地であった時期に堆積したものと考えられる。そのため、周辺地域から流入した土師器、須恵器、珠洲、越中瀬戸、近世陶磁器など多様な遺物の小破片が出土した。

第2層（中層）は黒色／黒褐色シルトを基調とするもので、下位にはアシ・ヨシ類の植物遺体が多量に混じる。遺物は縄文土器、古墳時代の土師器、石器、木製品、種子等が出土した。調査区北東端には、保存状態が良好な板材が出土したが、まとまりがなく広がっており、人為的な構築物としての規則性はみられない。また中央付近には、第2層の最下部、第3層や地山との境付近に、古墳時代前期の土師器が集中して出土する地点（第7・8図－1・3、写真図版3－1～4）、部材や古墳時代前期の土師器がまとまって出土する地点（第7・8図－2、写真図版3－5、4－1）などがある。

第3層は黄灰色シルトで、第2層と同様にアシ・ヨシ類の植物遺体が多量に混じるが、無遺物層である。調査区内におけるSD01遺構埋土の最下層である。

遺物の出土量は中型コンテナ25箱を数える。主に縄文時代晩期の土器（1～7）、古墳時代初頭～前期の土師器（8～52）、石製品（176～178）、弥生時代後期～古墳時代前期・古代の部材・加工木（190～199）等が出土している。縄文土器、古墳土師器が主体である。

放射性炭素年代測定の結果、縄文土器付着炭化物（試料№7）から2380±30BP、部材（193、試料№4）から1960±30BP、角材（190、試料№5）から1890±30BPという数値が出た。試料№5・7は出土遺物の年代との整合性が高いが、試料№4は、ほぼ同一地点で出土した古墳時代前期の土師器との整合性がみられない。その要因として材の転用や古木効果、計測部位による遺構の時期との誤差が考えられる。また、第2層上層で出土した板材（199、試料№6）からは980±30BPの数値が出た。以上のことから、沼としての存続時期は少なくとも縄文時代晩期（紀元前5世紀）から古代後半（11世紀）であると推察できる（第Ⅳ章 自然科学分析参照）。

SD51・SD86（F3区／第6・7・11・12図、写真図版4－4・5）

調査区北西に位置する。SD51は幅0.46m、深さ0.47mを測る溝で、東西方向N－60°－Wに軸を持つ。SD86は幅0.64m、深さ0.42mを測る溝で、東西方向N－60°－Wに軸を持つ。いずれも両端が調査区外に延びる。直線的に掘り込まれ、断面形は逆台形かそれに近いU字状を呈する。埋土は黒褐色砂質シルトに地山が斑状に少量混じる。SK165を中心点として、SX157をほぼ等間隔に挟んだ北側にSD51、南側にSD86が平行に伸びている。遺構の位置関係と形状及び埋土の共通性から、SX157の区画溝または側溝として開削された可能性が指摘できる。遺物はSD51から古墳時代の土師器（54・55）が出土した。

SD55（F3区／第6・7・11・12図、写真図版4－5～7）

調査区北西に位置する。幅1.19m、深さ0.85mを測る溝で、東西方向N－52°－Wに軸を持つ。両端が調査区外に延び、東端部でSD98とつながる。溝側面は直線的に掘り込まれるが、底面は調

査範囲全体を通して凹凸の激しい複雑な様相を呈している。埋土も同一遺構内で大きく異なっており、西壁は黒褐色砂質シルトや黒色シルト、地山が不規則に入り込む複雑な断面形を呈しているのに対し、東南壁は地山が班・ブロック状に混じる黒褐色シルト層が互層に堆積する。以上の状況を、地震やそれに起因する伏流水等の地盤への影響と考えたことから、地震考古学の研究者である寒川旭氏に遺構断面・平面の状況写真をみていただき、富山大学の地磁気学の研究者管頭明日香氏には土壌サンプルの採取及び分析をしていただいたが、地震の影響との明確な結果は得られなかった。遺物は古墳時代前期の土師器(56 ～ 62)、石製品（179 ～ 181）が出土した。

SD98（F3 区 / 第6・7・11 図、写真図版4 - 5）

調査区北西に位置する。幅 0.80m、深さ 0.36mを測る溝で、N - 44° - E に軸を持つ。北東側が調査区外へ延び、南西側がSD55 とつながる。埋土は主に2層からなり、大半を占める上層は黒褐色砂質シルトを基調とし、下層は黒褐色シルトに灰黄色シルトがマーブル状に混じる混土である。SD55 と同様、遺構の底面の凹凸が著しい。上層埋土が同一でSD55 との新旧の切合関係がないことから、同時期の遺構であると考える。遺物は縄文土器の小片、古墳時代前期の土師器（65･66）が出土した。

（2）竪穴建物

SI61（E4 区 / 第6・10 図、写真図版5 - 1・2）

SD01 の約 10m南に位置する竪穴建物である。遺構西半が調査区外に拡がることから、全容を把握することは出来ない。検出した規模は5m×2.3m、床面積は 11.5 ㎡、深さは 0.34mを測る。平面形は一辺5mの隅丸方形で、床面積は約 25 ㎡と推察する。埋土の大半は黒色シルトを基調としており、自然堆積とみられる状況が断面で観察できないことから、埋め戻しの可能性がある。床面はほぼ水平で、明確な硬化面や貼床、炉跡は存在しないが、最下部の一部で貼床の可能性のある黄灰色砂質シルト層を確認した。また不明瞭であるが周壁溝が南側に残る。底面でピットを6基（SP117・151・152・153・155・156）検出したが、主柱穴と考えられるものはない。埋土はいずれもSI61 の埋土と共通性があり、黒色 / 黒褐色シルトを基調とする。遺物は遺構南側を中心に古墳時代前期の土師器（68 ～ 71）が出土した。

SI107（E2・3 区 / 第6・11・12 図、写真図版5 - 3・4）

SD01 から約 16m南に位置する竪穴建物である。SX157 を切る。遺構南東半が調査区外に拡がることから、全容を把握することは出来ない。検出した規模は4m×1.5m、床面積は6㎡、深さは 0.40mを測る。平面形は一辺5mの隅丸方形で、床面積は約 25 ㎡と推察する。埋土は黒褐色シルトを基調としており、下層には灰黄色シルトがブロック状に混じる。貼床・炉跡、柱穴等は検出できなかった。底面で柱穴の可能性があるSK162 を確認したが、柱痕がみられないことから土坑とした。遺物は縄文土器の小破片、古墳時代の土師器（72 ～ 89）等が出土した。また埋土下部から出土した土器内面に付着した炭化物（試料№8）に放射性炭素年代測定を行い、1760±30BP という結果を得た。

（3）掘立柱建物

古墳時代初頭～前期以前の掘立柱建物SB1～3を調査区北側で検出した。沼SD01 の南側岸部分に形成されたと考えられる。

SB1 -SP25・26・27（E5 区 / 第6・7・13 図、写真図版6 - 4～6）

第1工区中央北東に位置し、SP25 ～ 27 で構成される。1間 ×2間以上の掘立柱建物と考えられ、北側に拡がる可能性が高い。調査区内で検出したのは南側の1列のみで、柱間寸法は約2.33mである。埋土は2層に分かれ、上層は黒褐色シルトに灰黄色砂が斑状に少量混じり、下層は灰黄色シルトに黒褐色シルトが斑状に少量混じる。SP26・27 には柱が残存したが、SP25 は南東半が調査区外に延びるため柱痕は確認できなかった。新旧の切合関係があり、SP25 はSD14 より古い。遺物は、SP26 から縄文土器（91）および古墳土師器の開脚高坏の底部小片が、SP27 から古墳土師器の壺（92）のほか、

高坏か器台の小片が出土している。91は縄文時代晩期、92は古墳時代前期の白江式期のものである。一方、SP27に伴う柱（202、試料№1）の放射性年代測定の結果2030±30BPという数値が得られたが、当調査区で検出した遺構・遺物全体から想定した年代より古い。これはSD01 出土部材と同様、古木効果や材の転用、測定部位などによる遺構の年代との誤差と考える。SP27 出土遺物の年代と合わせ、SB1の時期は古墳時代初頭～前期である可能性が高い。

SB2 - SP52・53・101（FG3区／第6・14図、写真図版6 - 7・8）

第1工区北西に位置する。1間 ×1間の掘立柱建物で、SP52・53・101 で構成される。柱間寸法は約 4.3m、面積は約 18.5 ㎡である。柱穴の平面形は円形で、埋土は黒褐色シルトを基調とする。SP52・53に柱（203、204）が残る。SP52から古墳時代前期の土師器小片が出土した。SP101は遺構上半をSX95 に削平されていることから、柱の痕跡は確認できなかった。SP52 の柱（203、試料№2）は放射性炭素年代測定の結果 1830±30BP という数値が得られたことから、古墳時代初頭～前期の建物である可能性が高い。

SB3 -SP8・9・15・134・163（D5区／第6・13図、写真図版5 - 1・2）

第1工区南西に位置し、SP8・9・15・134・163 で構成される。2間 ×2間以上の総柱建物であり、調査区外南東方向に拡がると考えられる。調査区内では一部分のみ検出した。調査区内にSP8・9・15・134・163がある。桁行 4.5m以上、梁行 4.33m以上で、調査区内の面積は 19.48 ㎡である。主軸はN- 61° -Wである。柱穴の平面形は概ね円形で、柱間寸法は 2.2 ～ 2.5mに収まる。埋土は黒褐色シルトを基調とする。SP15 に柱（200）を伴うが、他の柱穴には柱痕は確認できなかった。SD14より古い。SP15の柱（試料№3）の放射性炭素年代測定の結果1700±30BPという数値が得られており、古墳時代前期の建物の可能性が高い。遺物は、SP8から古墳時代の土師器壺口縁部（90）および壺か甕の頸部が、SP134から土師器小片のほか、壺か甕の口縁部などが出土した。

（4）土坑

SK32（D5区／第6・14図、写真図版4 - 8）

調査区北西、SD01 南岸に位置し、SD01 に沿って東西方向に拡がる。長軸 21.4m、短軸 5.3m、深さ約 0.50mを測る不整形の大型土坑である。遺構の東と南半が調査区外に延びており、全容は不明である。底面はほぼ水平で、その直上から古墳時代の土師器がまとまって出土した。SX95より新しい。北西端でSD01 とつながる。埋土は3層からなり、上層が黒褐色シルト、中層が黄灰色シルト、下層は黄灰色シルトと黒褐色シルトの混土である。遺物は主に古墳時代前期の土師器（93 ～ 102）が出土した。

SK35（F4区／第6・15図、写真図版7 - 1 ～ 3）

調査区北側中央、SD01 南岸に位置する。東西軸 6.28m、南北軸 4.4m、最大深さ 0.52mを測る不整形の大型土坑である。遺構西半が調査区外に延びるため全容は不明である。底面が遺構南側に向かって緩やかに傾斜する。遺構底面に柱穴、貼床、炉など竪穴建物の痕跡が確認できなかったことから土坑とした。埋土は主に3層からなり、上層が黒色シルト、中層が黒褐色シルト、下層は黒褐色シルトと地山の混土である。遺物は古墳時代前期の土師器（105 ～ 132）が多量に出土したほか、非晶質安山岩の剥片（184）が出土した。土師器には二次被熱の痕跡が残る赤彩を施した台付壺（118）や赤彩を施した有鈕筒状蓋（132）などを含む。以上の事から、当初祭祀場として使用され、のちに土器廃棄場として転用された可能性がある。

SK178（D2区／第6・12図、写真図版9 - 2）

調査区中央南西に位置する。長軸 1.28m、深さ 0.46mを測る楕円形と考えられる土坑である。南半が調査区外に延びる。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ水平である。埋土は大半が黒褐色砂質シルトを基調とする層で、最下部に黒褐色シルトに灰黄色砂質シルトが斑状に混じる層が薄く堆積する。

遺構の規模に比べて出土した土器の量が多いが、大半が土器の小破片である。古墳時代前期の土師器（138 ～ 143）や黒曜石の二次加工剥片（185）が出土した。

(5) 性質不明遺構

SX95（F3・4 区 / 第6・7・14 図、写真図版7 - 4）

調査区北西の短いトレンチ状の調査範囲内に位置する。長軸 6.33m、短軸 5.0m、深さ 0.31mを測る竪穴状の土坑である。平面形は東西端が調査区外に延び、北側はSK32 に削平されているため全容は不明である。土坑開削時の掘り込みが唯一確認できる南側は，検出面から直線的に掘り込まれる。壁際には周壁溝の可能性がある溝を確認した。炉跡や柱穴等が確認できなかったため、性質不明遺構とした。埋土は3層からなり、上層、中層が黒褐色シルトを基調とし、下層は灰黄色シルトに黄灰色シルトと黒褐色シルトがモザイク状に混じる。中層以下、特に下層埋土が非常に硬く締まり、貼床の可能性がある。遺物は縄文土器、古墳土師器等の小破片が一定量出土した。SB2の柱穴SP101 をSX95 完掘後に底面で検出したことから、当遺構の時期はSB2より新しいと考える。

SX157（F3・4 区 / 第6・12 図、写真図版7 - 5）

調査区内で長軸 9.17m、短軸 5.33m、深さ 0.47mを測り、平面形が隅丸長方形の可能性がある遺構である。想定面積は 48.88 ㎡であるが、東西端が調査区外に延びるため全容は不明である。SI107 より古い。底面がほぼ平坦である。埋土は主に3層からなり、上層は黒褐色シルトを基調とする混土、中・下層は黒褐色シルトに地山が異なる割合でモザイク状に混じる混土である。特に下層埋土はSX95 と同様、非常に硬く締まる。またSI107 の壁断面下層で確認した黒褐色シルトと地山が班・ブロック状に混じる混土は、SI107 埋土より広範囲に拡がることから、SX157 の埋土である可能性が高い。また南北 1.8 m離れて、SD51・SD86 が東西方向に平行して伸びており、関連する遺構と考える。遺構底面で検出したSD87・168 は周壁溝、SK165・166 はSX157 に伴う土坑である可能性がある。遺物は縄文土器、古墳時代前期の土師器（145 ～ 147）等が出土した。

2. 古 代

道路状遺構

SF1/SD94（D3 ～ 5 区 / 第6・16 図、写真図版8 - 5）

当遺構はSD169 とともに古代道路に伴う側溝と考えられる。調査区中央やや南を東西に横断する溝で、SD169と平行して伸びる。SD169との路面幅は5.5mである。調査区西側では確認できなかったが、調査区中央西側のⅡ層及びⅢ層上面が削平されたためと推察する。東西ともに調査区外に伸びる可能性が高い。規模は幅 1.67m、深さ 0.28mを測る。断面形は逆台形で底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色シルトを基調としており、使用されなくなった後に自然堆積した可能性が高い。遺物は縄文土器、古墳土師器、中世土師器（152 ～ 156）、緑色凝灰岩剥片（184）が出土した。埋土上層から出土した中世土師器や珠洲の小片は流入したものであり、最終的な埋没年代は 13 ～ 14 世紀である可能性が高い。平行して延びるSD169 から中世以降の遺物が出土しないことから、SD170 の北側に位置する当遺構のみ、中世集落が成立した後も生産域内の区画溝などとして転用されたか、自然の落ち込みとして存続したと考える。

SF1/SD169（C3 ～ 5 区 / 第6・16 図、写真図版8 - 4）

調査区南側を東西に横断する溝で、SD94 と平行して伸びる。SD94 と共に古代道路の側溝である可能性が高い。規模は幅 1.67m、深さ 0.26mを測り、断面形は逆台形、底面はほぼ平坦である。埋土は上層が黒褐色シルト、下層は灰黄色シルトがマーブル状に混じる黒褐色シルトであり、開削からしばらくの期間は緩やかな水の流れがあった可能性が高い。埋土は自然堆積である。遺物は古墳土師器、古代土師器（148）、須恵器、砥石（183）などが出土した。

3. 中世以降

(1) 掘立柱建物

SB4 -SP185・211・212・222・225・230・262・270（C3 区 / 第6・17 図、写真図版9 - 1）

第2工区中央に位置する、1間 ×3間の南北棟側柱建物である。柱穴は北西端から時計回りにSP270、SP211、SP212、SP262、SP222、SP225、SP230、SP185 からなる。柱穴の平面形は概ね円形である。柱穴の埋土は主に黒色シルトを基調とする。いずれも柱は伴わず、明確な柱痕は確認できなかった。桁行に沿って外側に雨落ち溝と考えられるSD184・209 を伴う。建物部分の規模は、桁行 6.67m、梁行 3.83m、面積 25.55 ㎡で、主軸は N - 45° - W である。柱間寸法は桁行が 2.0 ～ 2.33m、梁行は 3.83mであり、梁行が2倍程度あることから、SK203 やSD221 中程の窪みが浅い柱穴である可能性がある。出土遺物は、SP211、SD209 から土師器小片が出土した。

(2) 溝

SD170（C4・5 区、D2 ～ 4 区 / 第6・16 図、写真図版8 - 3、9 - 5・6）

調査区の中央やや南側を東西方向N- 73° -Wに横断する溝である。規模は幅 1.00m、深さ 0.54mを測り、断面形は U 字状である。埋土は主に2層に大別でき、上層は黒褐色シルトを基調とし、下層は地山と黒褐色シルトがモザイク状に混じる。西端部が貯水池状遺構SX201 と連結する。SD188・SD14 より新しい。用水路としての機能を持っていた可能性が高い。遺物は土師器小片、中世土師器（159）、瀬戸碗（160）が出土しており、遺構の開削時期は 13 世紀頃、最終的な埋没時期は 15 ～ 16 世紀頃の可能性がある。SX201 と共に、調査区内で最も新しい時期の遺構である。

SD188（C3 ～ 5 区 / 第6・16 図、写真図版8 - 3）

調査区南側を東西N- 70° -Wに横断する溝である。SD94・SD169 の間に位置し、ほぼ平行して同方向に延びる。規模は幅 1.69m、深さ 0.31m、検出長は約 12.5mである。断面形は逆台形、底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色シルトに黄灰色シルトと黒色シルトがブロック状に混じる混土が主体で、廃棄時に人為的に埋められたと考えられる。SD170 より古い。規模・位置関係はSD94・SD169 との共通性をうかがわせるが、当遺構はⅡa 層上面から掘り込んでおり、埋土も異なることから、開削時期と埋没時期が異なると考える。遺物は古墳時代の土師器、中世土師器、珠洲などが出土した。

SD14（A4B4、B5C5D5 区 / 第6・13 図、写真図版6 - 1、9 - 5）

調査区東端部を南北方向N- 7° -Wに縦断する溝である。南端が調査区外に伸びる一方、北端部が E5 地区以北でみられない。これは北東側の遺物包含層が残っていなかったことから、後世に削平されたと考える。調査区内で幅 3.33m、深さ 0.28m、検出長で約 35mを測る。底面のレベルはほぼ一定で大きな高低差はみられないが、遺構検出面は南西に向かって傾斜して低くなる。新旧の切合関係があるSP15（SB3）・SP25（SB1）・SD94・169 を切り、SD170 には切られる。埋土は主に2層であり、下層は締まりの緩い黒褐色シルトを基調とし、酸化鉄が多く混じる。上層は黒褐色シルトに地山が粒・ブロック状に混じる混土がほぼ水平に堆積する。下層は無遺物層であり、遺物は全て上層から出土した。埋土の堆積状況および埋土の特徴から、溝が機能していた当時、植物が生い茂る状態であったと考える。遺物は古墳時代の土師器小片が多量に出土したことから、開削時に多くの遺構が削平された可能性が高い。当該期の遺物として珠洲の擂鉢（151）が出土した。

(3) 土坑、性質不明遺構

SX201（D2 区 / 第6・16 図、写真図版9 - 3・4）

第2工区北西に位置する。遺構西半が調査区外に拡がる。規模は調査区内で長軸 7.81m、短軸 1.83m、深さ 0.85mを測り、南に向かって深くなる。遺構底面は湧水層である灰黄色砂に達し、調査期間中、常に多量の水を湛える状態であった。遺構は南に向かって深くなり、用水的な機能を持っていたと考えられる中世の溝SD170 と南側で連結し、水を供給する井戸・貯水池的な役割を果たしてい

第1表　遺構一覧(1)

遺構		時期	地区	平面形(SK/SP/SX)/軸方向(SD)	掲載遺物	挿図No.	幅(cm)	深さ(cm)	特徴	遺物
SD	01	縄文晩期～古代	G3～G5 F4～F6 E6	N-63° -W	1～52、176～178,190～199	6～9	3600x1400	110	調査区北端に位置する沼　①自然流路→沼→沼沢湿地の経過をたどり、②存続時期は縄文晩期～11世紀であり、③縄文晩期および弥生時代後期～古墳時代前期、古代後半の3つの時期に沼として生産 活動に組み込まれていた可能性が高い。	縄文・土師器小片×500～、縄文土器(晩期:御経塚～下野／AMS:試料No.7土器付着炭化物BC400)、古墳土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、石器、土製品、木製品(AMS:部材AD30～50、炭化材AD90～120、板材AD1030)
SK	02	古墳前期	E6	円	-	-	38	40	-	-
SK	03	古墳前期	E6	円	-	-	46	40	＜SD01	-
SK	04	古墳前期	E6	円	-	-	26	12	-	-
SK	05	古墳前期	E6	円	-	-	28	13	-	-
SK	06	古墳前期	E6	円	-	-	22	18	-	-
SK	07	古墳前期	D6	(楕円)	-	-	41	30	西半が調査区外	-
SP	08	古墳前期	D6	楕円	90	13	93	29	SP15,8,9,134,163でSB3を構成	土師器壺口縁×1、土師器壺か甕頸部×2
SP	09	古墳前期	D5	円	-	13	43	35	SP15,8,9,134,163でSB3を構成	-
SK	10	古墳前期	D5	(楕円)	-		107	14	底面でSP10を検出　同一遺構の可能性あり	土師器小片x10、縄文晩期深鉢(波状口縁)小片×1外面赤彩高坏か器台底部小片、壺口縁小片×2
SD	14	中世以降	AB4 BCD5	N-23° -E	151	6・13	228	28	第2工区SD177と同　SP15,SK132,SP163,SK136,SD170＜SD14＜SD94　多くの中世以前遺構を削平していると考えられる。古墳時代土師器の出土量多い。	土師器小片×多、高坏か器台口縁小片x1・赤彩頸部(透孔あり)x1、壺口縁有段x1・小片x1、製塩土器x1、不明口縁x1
SP	15	古墳前期	D5	不整形	200	10	47/58	48/42	SP15,8,9,134,163でSB3を構成	柱(AMS:AD350～380)
SD	19	古墳前期以前	D5	N-81° -E	-		18	4	南西に位置するSD70とつながる可能性高い。	土師器小片x2
SD	21	古墳前期	D4D5	N-80° -W	-		114	11	-	土師器小片×多、器台小片×1
SK	23	古墳前期	E5	円	-		24	10	-	-
SP	25	古墳前期	E5	楕円	-	6・7・13	60	38	SP26,27,25とSB1を構成	-
SP	26	古墳前期	E5	楕円	91・201	6・7・13	47	58	SP26,27,25とSB1を構成	土師器小片x3、波状口縁壺口縁x1、赤彩高坏か器台(透孔あり)x1、柱
SP	27	古墳前期	E5	楕円	92・202	6・7・13	114	70	SP26,27,25とSB1を構成	土師器小片x7、有段甕口縁(実)x1、柱(AMS:BC110～AD50)
SK	31	古墳前期	F4	不整形	-		188/227/162	14/17/14	-	土師器小片x多、器台頸部x1、壺口縁x4(内外面赤彩x1,凹線文x1,棒状浮文付x1,)壺か甕底部小片(網?文付)x1、台付壺(浮帯文部分)x1、器台か高坏口縁部x1
SK	32	古墳前期	FG3FG4	不整形	93～102	14	2140x530	61	＞性質不明土坑SX95　SD167とつながる。	土師器小片x多、土師器壺甕類(口縁～体部x2、口縁部x8外面赤彩x1、体部～底部x2、底部x1)、高杯器台(口縁x1、内外面赤彩坏部x1、頸部x2)
SK	33		F4	円	-		19	10	SD01付近	-
SK	34	古墳前期	F4	不整形	103・104		117	41	SD01と切り合う。	土師器小片x多、蓋x1、赤彩高坏か器台頸部x1、壺口縁部小片x1、壺口縁x2(凹線文x1)、口縁部小片x6
SK	35	古墳前期	F4	不整形	105～132・179	15	385/222/343/535	25/31/27/52	作業場・祭祀場の可能性のある大型土坑(土器廃棄場に転用か)。SK36＞　SD167・SK32と切り合う可能性あり。	土師器小片x多、古墳土師器甕、壺、高坏、器台、剥片
SK	36	古墳前期	E4	不整形	133～136		294/211	30/16	＜SD39、SK35とつながる。SK118・160を底面で検出	土師器小片x多、内外面赤彩高坏坏部小片x4(口縁部x1)、外面赤彩壺体部小片x1、壺口縁小片x3、平縁甕口縁x1、器台頸部小片x1、赤彩高坏か器台底部(透孔あり)x1・頸部x1、壺口縁x3
SK	37	古墳前期	F4	(楕円)	-		78	14	＜SK31、試掘トレンチ直下	土師器小片x多、須恵器坏小片x1(試掘時に混入した可能性が高い)
SD	39		E4E5	N-80° -W	-		52	8	＜SK36・SI61、SK161と切り合う 。SD167と同一の可能性あり。	縄文体部小片x1、土師器小片x多、内外面赤彩高坏か器台口縁・脚部小片x各1(計2)
SK	41	古墳前期	E4	楕円	-		78	15	-	土師器小片x10、内外面赤彩高坏か器台小片x1
SK	42		E4	不整形	-		50	41	-	-
SK	43		E5	不整形	-		24	19	-	-
SK	45		E4	円	-		30	20	-	-
SK	46		E4	円	-		45	40	-	-
SK	47		E5	円	-		41	9	-	土師器小片x2
SK	48		E4	円	137		23	25	-	土師器壺口縁x1
SK	50		E4	円	-		31	6	-	-
SD	51	古墳前期	F3	N-60° -W	54・55	6・7・11	46	47	SD86と同一目的で構築された可能性あり。SX157SI107の南北に東西方向に平行に延びる。	土師器小片x多、内外面赤彩高坏か器台小片x1・坏部(高杯)x1・頸部x1、有段壺甕類口縁x1・底部x1、ミニチュア？底部x1
SP	52	古墳前期	G3	円	201	6・7・14	37/40	85/60	SP52・53・101でSB2を構成	土師器小片x1、柱(AMS:AD90)
SP	53	古墳前期	F3	円	202	6・7・14	56/38	75/53	SP52・53・101でSB2を構成	柱
SD	55	古墳前期	F3F4	N-52° -W	56～62・180～182	6・7・11	119/222	76/85	遺構底面に地山が不規則に隆起したような痕跡がみられる。SD98と切り合う 。布留系甕と東海系の頸部突帯文の技法の折衷型土器が南東端遺構最下層から出土	土師器小片x多、土師器壺口縁x1、甕口縁部x1・底部x1、高坏坏部x1／直口細頸壺口縁x1、器台か高坏口縁(口径16)x1、内外面赤彩高杯(口径30)、内外面赤彩器台小片x1、高杯小片(坏稜部にキザミ、擬凹線5条)、石器
SP	56		F3	N-66° -W	-		54	12	西壁	-
SK	57		E4	円	-		25	20	-	-
SK	58		E4	円	-		23	22	-	-
SK	59		E5	円	-		28	16	-	-
SI	61	古墳前期	E3E4	(隅丸方形)	68～71	10	252	34	竪穴建物、西半分が調査区外に延びる。周壁溝を伴う が、地床炉・貼床・主柱などは確認出来ない　SD70SD116SK142と切り合う 。SP117・151・152・153・155・156など柱穴の可能性あり。	土師器小片x多、土師器甕、高杯坏部・脚部x1
SK	62		D4	円	-		48	36	SK62・65・97・124でSAを構成か	-
SK	63	古墳前期	E4	不整形	-		126	19	＜SD120　落ち込み状	土師器小片x多、壺甕類口縁(有段)x1
SK	65	古代	D4	楕円	-		52	17	SK62・65・97・124でSAを構成か	-
SD	66	古墳前期	D3	N-66° -W	63		61	11	遺構掘削後SK135を検出、SK72と切り合う。	土師器小片x11、有段口縁甕x1
SK	67	中世以前	D4	円	-		35	14	-	-
SK	68	古墳前期	D4	(隅丸方形)	-		89	15	撹乱に遺構北側を切られる。	土師器小片x8、土師器壺肩部小片
SD	69	中世	D4	N-5° -E	-		21	7	西からSD139・120(122)・93・SD69(92)・91がほぼ等間隔平行に南北方向に延びる細溝　畠(畝溝)の可能性が高い。＜SD94	-
SD	70	古墳前期	DE4	N-14° -W	-		19/83/27	7/7/18	SD70SD116SK77通し断面　＞SD116、SI61と切り合い、SD19とつながる可能性が高い。	土師器小片x6
SD	71	古墳前期	DE4	不整形	-		75	16	南延長SD66の可能性あり。掘削後南端下部でSK133検出	土師器小片x多、内外面赤彩高杯頸部、壺甕類口縁x1・底部x1、縄文土器(粗製)底部x1、外面赤彩鉢底部x1
SD	72		DE3	N-4° -E	64		38	14	-	土師器小片x多(SD71出土土器と同一個体と考えられるもの含む)
SK	73		E4	円	-		32	19	-	-
SK	75		D4	円	-		36	39	-	-
SK	77		E4	(不整形)	-		83	18	SD70SD116SK77通しセクション断面　SD116と切り合う。	-
SK	79		D2	不整形	-		46	12	-	-
SK	80		D2	円	-		32	35	-	土師器小片x1
SK	81		D2	(不整形)	-		69	22	西側調査区外	土師器小片x2、有段口縁壺(A2)x1、中世土師器皿?x1、近世磁器x1
SD	82	古墳前期	E2E3	N-62° -W	-		71	16	SD86と平行に東西方向に延びる。	土師器小片x8、外面赤彩高杯か器台体部小片x1、土師器底部小片x1、壺甕類口縁x1
SD	83		D3	N-80° -E	-		48	10	SD238と同一遺構か	-
SD	84		D3	N-74° -W	-		32	8	SD121と同一遺構か　西側落ち込みがあり不明瞭	土師器小片x2
SK	85		E2	円	-		21	13	-	土師器小片x1
SD	86	古墳前期	E2	N-63° -W	-	6・11・12	65	42	107・164・87・86通しセクション南端　SD51・86は同一用途の可能性があり。SX157・SI107の南北に、東西方向に平行に延びる。	土師器小片x5、高坏か器台口縁部(径13)小片x1・体部小片x1、縄文土器底部x1
SD	87	古墳前期	E2	N-68° -W	-	11・12	98	24	107・164・87・86通しセクション断面。SI107と関連する溝(竪穴内周溝)か	-
SK	88		C5	円	-		25	34	-	-
SD	89		CD5	N-24° -E	-		16	9	＜南側撹乱　SD170との切り合い不明	-
SD	90	中世以前	D4	N-8° -E	-		35	9	北側撹乱に切られSD94との切り合い不明　SD91と平行で南北に延びる　畠(畝溝)の可能性が高い。下層埋土に流水性の堆積の特徴有	土師器小片x1
SD	91	中世以前	D4	N-5° -E	-		42	8	西からSD139・120(122)・93・SD69(92)・91がほぼ等間隔平行に南北方向に延びる畝溝　畠(SN1)を構成　＜北側撹乱　＜SD94	土師器体部(高坏か)x1
SD	92	中世以前	D4	N-4° -E	-		39	17	西からSD139・120(122)・93・SD69(92)・91がほぼ等間隔平行に南北方向に延びる畝溝　畠(SN1)を構成　＜SD94	-
SD	93	中世以前	D4	N-6° -E	-		21	7	西からSD139・120(122)・93・SD69(92)・91がほぼ等間隔平行に南北方向に延びる畝溝　畠(SN1)を構成　＜SD94	-

第1表　遺構一覧(2)

遺構		時期	地区	平面形(SK/SP/SX)/軸方向(SD)	掲載遺物	挿図No.	幅(cm)	深さ(cm)	特徴	遺物
SD	94	古代	D3～5	N-77° -W	152～156,184	6・16	158/128	28/24	SD69(92)・93・120(122)・168＜SD94・SD14、SD169と平行に東西方向に延びる。道路側溝の可能性が高い。	土師器小片x多、中世土師器x7、縄文土器口縁部x4(外面赤色x1)、器台口縁部小片(受部キザミ)x1・体部下半(穿孔あり)x1、珠洲甕体部小片x1、剥片
SX	95	古墳前期	F3F4	(不整形)	-	6・7・14	583/22	72/10	竪穴建物か　SP101＜SX95＜SK32	土師器小片x多、土師器底部小片x1、壺甕類口縁部x7、縄文土器口縁部x6
SX	96		E3	(不整形)	-		169	45	SD114とつながる　滞水性の埋土　しまりゆるい	-
SK	97		D4	円	-		27	29	SK62・65・97・124でSAを構成する可能性あり。	-
SD	98	古墳前期	F4	N-44° -E	65・66	7	80/133	28/36	SD55とつながる。南北調査区外に延びる。	土師器小片x多、高杯頸部x1、高坏か器台口縁部x3・体部x2、縄文土器口縁部小片x1
SK	99		D4	円	-					-
SP	101	古墳前期	F3	円	-	6・7・14	20	15	＜SX95、SP52・53・101でSB2を構成	-
SD	102	古墳前期	E3	N-50° -W	-	-	66	31	SD114とつながる。埋土の共通性からSD55の可能性あり。	土師器壺甕類小片x2・外面赤彩x2、緑色凝灰岩小片x1
SD	105	古墳前期以降	E3	N-10° -E	-	-	28	12	＞竪穴SI107・SX157　南北端調査区外に延びる。	-
SD	106	古墳前期以降	E2E3	N-26° -W	-	-	18	4	＞SI107・SX157・SK165・SK166　南北調査区外に延びる。	縄文土器体部小片x1、土師器壺甕類体部小片x1
SI	107	古墳前期	E2E3	(隅丸方形)	72～89	11・12	116/476	27/40	＞SX158、107・164・87・86通しセクション　＜SD105・106、SK16 周壁溝の可能性があるSD164を遺構底面で検出。	土師器小片x多、縄文晩期土器(口縁x1・外面赤彩体部x1)土師器大型壺口縁部(棒状浮文)x1、土師器壺甕類(有段甕・平縁甕・丸縁甕・短頸壺口縁部、有孔壺底部、壺底部x多)・高坏か器台(東海系椀型坏部x3・内外面赤彩有孔器台受部x1)
SD	108		E3	-	-		-	-	竪穴建物SI107につながる。調査対象区域外で検出	-
SD	109		E3	N-73° -W	-		47	12	＞竪穴建物SI107	土師器小片x6(同一x5)、内外面赤彩高坏か器台坏部x1
SD	110	古墳前期	E2	N-75° -E	-	11・12	131	30	竪穴建物SI107内　SD87と切り合う。	-
SX	112		D3		-		68	11	不明瞭な落ち込みのため遺構番号削除	土師器小片x多、土師器壺甕類口縁部小片x2、高坏か器台口縁・坏部小片x4、縄文土器底部x1、弥生中期(小松？)土器壺体部小片x1
SK	113		E5	(円)	-		21	29	-	土師器小片x1
SD	114	古墳前期	E3	N-10° -W	-		35	17	SD114・SX96とつながる。	土師器小片x多(SD109と同一個体の可能性の高いもの含む)、縄文土器口縁部小片x1
SK	115		E3	円	-		29	10	-	-
SD	116	古墳前期	E4	N-27° -W	-		19/83/27	7/7/18	SD70SD116SK77通しセクション　＜SD70・SK77　SD137とつながる。SD55と同一遺構の可能性がある。	-
SP	117	古墳前期	E4	不整形	-	10	49	15	SI61内	-
SK	118	古墳前期以前	F4	(不整形)	-		27	21	SK36底面で検出	-
SD	120	中世	D4	N-10° -E	-		20	7	SD69(92)・93・120(122)・168等間隔平行南北方向の畝溝　畠(SN1)を構成する可能性あり。SD121＜SD120(122)＜SD94・170　S63とつながる。	-
SD	121	中世以前	D4	N-76° -W	-		30/36	9/7	＜SD122　SD84・SD139と同一遺構の可能性あり。	-
SD	122	中世	D4	N-12° -E	-		184/18	14/8	西からSD139・120(122)・93・SD69(92)・91がほぼ等間隔平行南北方向に伸びる畝溝　畠(SN1)を構成　SD121＜SD120(122)＜SD94・170　SK63と切り合う。	-
SK	123	古墳以前	F4	(楕円)	-		51	23	SK123＜SK31　SK31底面で検出	-
SK	124	古墳前期	D3	不整形	-		43	26	SK62・65・97・124で櫃(SA)を構成か	土師器小片x1、高坏か器台坏部小片x1
SK	125		D3	不整形	-		28	22	SD66底面で検出	-
SK	126	中世以前	D4	(円)	-		28	24	＞SD94	-
SK	127		D4	円	-		28	25	-	-
SK	128		D3	円	-		26	11	-	-
SK	129		D3	(不整形)	-		34	23	-	-
SK	130		D3	(円)	-		34/26	15/24	-	土師器小片x1
SK	131		D3	円	-		23	9	-	-
SK	132	中世以前	D5	円	-		19	8	＜SD14	-
SK	133		D3	円	-		30	34	SD71底面で検出	-
SP	134	古墳前期	D5	円	-	13	39	47	SP15・8・9・134・163でSB3を構成　SK10底面で検出	土師器小片x5、土師器壺甕類口縁部x1、高坏か器台小片x2
SD	135	中世以前	C5	N-70° -W	-		72	29	SD170の延長の可能性高い。＞SD14	土師器小片x4
SK	136	中世以前	C5	円	-		27	28	＞SD14	-
SD	137		E4	N-27° -W	-		22	4	SD116とつながる。	-
SD	138		E4	N-41° -E	-		16	3	-	-
SD	139	中世	D4	N-13° -E	-		16	6	西からSD139・120(122)・93・SD69(92)・91がほぼ等間隔平行南北方向に伸びる畝溝　畠(SN1)を構成　＜SD94・170	-
SK	139	中世以前	D4	N-13° -E	-		31	6	SD139底面で検出	-
SD	140		D3	N-64° -W	-		27	16	＞不明瞭な落ち込み状遺構SX112	-
SD	141		D3	N-40° -W	-		50	4	＞不明瞭な落ち込み状遺構SX112	-
SK	142		E4	(楕円)	-		36	6	SI61と切り合う。	-
SK	143		C5	(円)	-		30	36	SD170＞SK143＞SD144	-
SD	144		C5	N-16° -W	-		80	28	＜SK143	-
SK	145	古代？	E4	円	-		27	19.5	-	-
SK	146		E4	円	-		21	27	-	-
SK	147		F4	円	-		12	20	-	-
SK	148		F4	円	-		16	15	-	-
SK	149		F4	円	-		24	34	SD01内	土師器小片x1
SP	151	古墳前期	E4	円	-	10	32	12	SI61内	-
SP	152	古墳前期	E4	円	-	10	28	12	SI61内	-
SP	153	古墳前期	E4	円	-	10	23	10	SI61内	-
SP	155		E4	円	-		28	18	-	-
SP	156	古墳前期	E4	円	-	10	28	62	SI61内	-
SX	157	古墳前期	E2EF3	(不整形)	145～147	6・12	479	47	固く締まったモザイク状の混土が拡がる。＜SI107　東西調査区外に延びる。遺構底面でSK165・166・SD168(周壁内溝か)を検出	土師器小片x多、土師器壺甕類口縁部小片x1、内外面赤彩高坏か器台口縁部小片x2
SD	158	古墳前期	E2	N-25° -W	-	11・12	426/47	51/17	SX157内南側	土師器小片x多
SK	160	古墳前期以前	E4	円	-		26	15	SK36底面で検出	-
SK	161	古代	E5	(円)	-		88	43	SD39底面で検出　南半が調査区外に拡がる。	土師器小片x3、土師器壺口縁x1、須恵器壺甕類体部小片x1
SK	162	古墳前期	E3	円	-		25	38	SI107底部で検出　埋土は砂質土　遺構底から涌水が激しい。SI107に伴う柱穴の可能性有	-
SP	163	古墳前期	D5	(不整形)	-		57	17	＜SD14　SP15,8,9,134,163でSB3を構成。	-
SD	164	古墳前期	E2	N-65° -W	-	11・12	256	30	SI107内にあり、周壁溝の可能性がある。107・164・87・86通しセクション	-
SK	165	古墳前期	E2	不整形	-	11・12	72	7	SX157底面で検出	-
SK	166	古墳前期	E3	楕円	-	11・12	40	32	SX157底面で検出	-
SD	167	古代	EF4	N-15° -E	-		48	8	＜SK35　SK32との切り合い不明瞭	-
SD	168	古墳前期	D3D4	N-68° -W	-	11・12	25	10	SX157底面で検出　周壁溝の可能性有　南側のSD87と並行に延びる。	-
SD	169	古代後期	C3C4C5	N-77° -W	151183	6・16	147/156	25/26	底面でSK191を検出　＜SK218・SD177(SD14)	土師器小片x多、須恵器坏口縁部小片x1、土師器壺甕類口縁部小片x3、壺底部x2・器台か高坏坏部小片x1・内外面赤彩x)・器台頸部x2／土師器小片x多、土師器壺口縁x2、砥石
SD	170	中世	D2D3CD4C5	N-83° -W	159・160	6・16	69/91/104/82/62	43/39/49/46/54	SX201とつながる可能性が高い。SD168・122・93・141など北側に伸びる畝溝群とつながる可能性有　＞SK265	土師器小片x多、中世土師器口縁部x1、青磁碗口縁部x1
SD	171		B2	N-28° -E	-		122	20	遺構底面でSK285を検出	-
SK	172		B2	円	-		18	26	-	土師器小片x2、外面赤彩土師器口縁小片x1
SD	173		C2BC3	N-75° -W	-		135	32	底面でSK223を検出	土師器小片x7、土師器甕底部x1
SD	174	古墳前期	C3	N-64° -W	-		62/130/29	4/25/15	＞SD175、SD184	土師器小片x8、内外面赤彩土師器小片x1、口縁部x1
SD	175		C3	N-14° -E	-		23	5	＜SD174　SK261と重なる。	-
SK	176		C3	不整形	-		94	12	底面でSK202・203・204を検出	土師器小片x多、土師器壺甕類底部x2、口縁～頸部x1
SD	177	中世	AB4BC5	N-78° -W	-		-	-	SD14の第2工区延長部分　＜SD169	土師器小片x多、珠洲鉢口縁(実)x1、土師器壺甕類口縁部小片x5、坏(か?)口縁部小片x1
SK	178	古墳前期	C2	(隅丸方形)	138～143,185	6・12	128	46	第2工区に位置するやや大型の土坑　埋土に土器小破片が多少に含まれる。	土師器小片x多、土師器壺甕類口縁部x5～(内外面赤彩x1)・底部小片x3～(穿孔x1)・外面赤彩体部x1、器台か高坏口縁～坏部(内外面赤彩)x1・坏部小片x1・頸～底部(赤彩)x1、頸部x1・剥片x1

第1表　遺構一覧(3)

遺構		時期	地区	平面形(SK/SP/SX)/軸方向(SD)	掲載遺物	挿図No.	幅	深さ	特徴	遺物
SD	179		C2	N-24°-E	-		45	20	-	土師器壺口縁～頸部小片x1
SK	181		C2	円	-		26	14	-	-
SK	182		C2	円	-		17	20	-	-
SK	183		C2	(円)	-		20	6	-	-
SD	184	中世	BC3	N-84°-W	-	16	44/31	19/36	>SK255・SD174　SD209とSB4柱穴群を挟んで平行に延びる(雨落ち溝)。SP185・211・212・222・225・230・262・270、SD184・209でSB4を構成	-
SP	185	中世	C3	不整形	-		34	47	SP185・211・212・222・225・230・262・270、SD184・209でSB4を構成	-
SK	186		C3	円	-	16	32	18	-	土師器壺体部小片x1
SK	187		C3	円	-		23	8	-	-
SD	188	中世以降	CD3C4	N-75°-W	-	6・16	169	31	底面でSK271・283を検出　>SD14	土師器小片x多、土師器壺口縁部小片x1・底部x4、高坏か器台口縁部x3(外面赤彩x1)、中世土師器(口縁部)x1、珠洲甕体部x1
SK	189		C3	円	-		26	11	-	土師器小片x3
SK	190		C3	円	-		26	37	-	土師器小片x6、土師器壺甕類口縁部小片x1
SK	192	中世	D2	(隅丸方形)	-		173	23	<地割れ	土師器小片x多、珠洲甕底部x1、土師器壺甕類口縁部x4(端部に面をとるx1、端部小波状x1)、高坏か器台小片x1
SK	193		D2D3	(楕円)	-		68	58	<SK194	土師器小片x多、土師器底部x1
SK	194		D2D3	円	-		28	21	>SK193　*撹乱の可能性高い。	-
SK	195		D3	円	-		32	30	>196	土師器小片x3
SK	196		D3	円	-		28	34	<195	土師器小片x6
SK	197		D3	円	-		35	13	-	-
SK	199		D3	円	-		18	20	SK199・200で切り合う。	土師器高坏か器台口縁部小片x1
SX	201	中世	D2	(不整形)	157 186	6・16	781	85	遺構底面が湧水層に達し、常時滞水(貯水池状遺構)　SD170とつながる可能性が高い。遺構底面(浅い地点)でSK277・278・279を検出	土師器小片多、中世土師器、水輪(五輪塔)
SK	202	古墳前期	C3	(円)	-	-	13	15	SK176底面でSK202・203・204を検出	-
SK	203	古墳前期	C3	円	-	-	21	16	SK176底面でSK202・203・204を検出	土師器高坏か器台(体部x1、外面赤彩x1)、土師器壺甕類体部小片x1
SK	204	古墳前期	C3	(隅丸方形)	-	-	18	12	SK176底面でSK202・203・204を検出	-
SK	205		CD4	円	-	-	67	9	-	-
SK	206		D3	不整形	-	-	53	32	-	土師器小片x2、土師器壺甕類頸部小片x1
SK	207		D3	円	-	-	28	53	-	土師器小片x1
SK	208		D3	円	-	-	23	15	-	-
SD	209	中世	C3C4	N-46°-W	-	17	30/47	21/15	SP185・211・212・222・225・230・262・270、SD184・209でSB4を構成 <SD209	土師器小片x5、体～底部小片x1
SD	210	古墳前期	C3	N-44°-W	-	-	31	6	<SD209	-
SP	211	中世	C3	円	-	17	45	47	SP185・211・212・222・225・230・262・270、SD184・209でSB4を構成	土師器小片x多(時期明瞭な遺物なし)
SP	212	中世	C3	円	-	17	47	41	SP185・211・212・222・225・230・262・270、SD184・209でSB4を構成	.
SK	213		C3	円	-	-	28	24	-	-
SK	214		C3	不整形	-	-	27	18	-	-
SD	215		BC1	N-30°-W	-	-	72	12	調査区外に延びる。	-
SK	216		C1	(円)	144	-	28	60	-	土師器壺口縁～体部
SK	217		C2	円	-	-	26	6	-	-
SK	218	中世以降	C4	(円)	-	-			>SD169	土師器小片x1
SD	220	古墳前期	C3	N-45°-E	-	-	96	16	埋土堆積状況不明瞭(地割れの影響か)	土師器小片x6
SD	221		C3	N-38°-E	-	-	44	7	底面でSK266を検出　埋土堆積状況不明瞭(地割れか)　シミ状不整形	土師器小片x3、珠洲甕体部x1
SP	222	中世	B3	楕円	-	17	31	70	SP185・211・212・222・225・230・262・270、SD184・209でSB4を構成	
SK	223		C3	(円)	-	-	19	17	SD173底面で検出	
SK	224		C3	円	-	-	18	12	-	
SP	225	中世	C36	円	-	17	45	45	SP185・211・212・222・225・230・262・270、SD184・209でSB4を構成	
SK	226		B3	円	-	-	32	13	-	
SK	227		B3	円	-	-	32	20	-	土師器小片x2
SK	228		B3	円	-	-	29	18	-	
SK	229		B2	円	-	-	37	12	-	
SP	230	中世	C3	不整形	-	16	47	19	SP185・211・212・222・225・230・262・270、SD184・209でSB4を構成	
SK	231		C3	円	-	-	21	14	-	-
SK	232		B3	円	-	-	33	9	-	土師器小片2、内外面赤彩高坏か器台口縁部小片1
SK	234		B3	円	-	-	24	18	<ハサ穴	-
SK	235		B3	楕円	-	-	24	14	-	-
SK	236		B3	円	-	-	38	28	-	-
SD	238		D2	N-68°-E	-	-	52/57	36/36	遺構底面でSK281を検出　SD83と同一遺構の可能性あり。	土師器小片10～、土師器壺甕類口縁部小片1、高坏か器台体部小片1
SK	240		B3	円	-	-	38	27	基本的に埋土は2.5Y3/1黒褐色シルトだが上層中心2.5Y4/1黄灰色シルト	
SK	242		B4	(円)	-	-	29	25	南壁に伸びる	-
SP	243		C4	楕円	-	-	31	27	SK243・245・249・263で柵列またはSBの柱列の可能性あり	-
SK	244		B4	円	-	-	21	21	-	-
SP	245		B4	円	-	-	16	11	SK243・245・249・263で柵列またはSBの柱列の可能性あり	-
SK	246		B4	円	-	-	24	22	-	土師器小片1
SP	249		B4	円	-	-	23	24	SK243・245・249・263で柵列またはSBの柱列の可能性あり	-
SK	250		B4	楕円	-	-	39	26	-	-
SK	251		B4	円	-	-	19	24	SK251>252	土師器小片x1
SK	252		B4	(楕円)	-	-	37	32	SK251>252	中世土師器口縁部小片1
SK	254		A4	円	-	-	22	31	調査区外に延びる	-
SK	256		C4	円	-	-	19	12	-	-
SK	257		C4	円	149	-	24	32	-	土師器壺甕類口縁部小片1
SK	258		C4	円	-	-	25	19	-	-
SK	261		C3	(楕円)	-	-	26	26	SD175底面で検出　<SD175	土師器小片1
SP	262	中世	C3	円	-	16	35	56	SP185・211・212・222・225・230・262・270、SD184・209でSB4を構成	-
SP	263		C4	円	-	-	32	26	SK243・245・249・263で柵列またはSBの柱列の可能性あり	-
SK	264		C1	(円)	-	-	23	22	調査区外に延びる。	-
SK	265		D4	(円)	-	-	29	14	-	-
SK	266		C3	円	-	-	25	32	SD221の底面で検出	-
SX	267		B3	不整形	-	-	94	29	-	-
SK	268		D3	円	-	-	17	10	SD188底面で検出	-
SK	269		D3	円	-	-	23	15	SD188底面で検出	-
SP	270	中世	C3	楕円	-	16	34	25	SP185・211・212・222・225・230・262・270、SD184・209でSB4を構成	-
SK	271		C4	円	-	-	32	10	SD188底面で検出	土師器口縁部・体部・底部小片x各1
SK	272		C2	円	-	-	26	14	SD179底面で検出	-
SK	273		B2	円	-	-	21	14	-	-
SK	274		B2	円	-	-	28	31	-	-
SK	275		B2	円	-	-	22	41	-	-
SK	276		B4	円	-	-	27	12	-	-
SK	277		D2	(楕円)	-	-	30	18	SX201の浅い地点底面で検出	-
SK	278		D2	円	-	-	29	27	SX201の浅い地点底面で検出	土師器小片1
SK	279		D2	(楕円)	-	-	38	15.5	SX201の浅い地点底面で検出	
SK	280		BC2	(楕円)	-	-	26	37	調査区外に延びる。	-
SK	281		D2	楕円	-	-	49	24	SD238底面で検出。、同一遺構の可能性が高い。	-
SK	282		B3	円	-	-	19	12	-	土師器壺甕類口縁部小片1
SK	283		C4	(円)	-	-	30	17	SD188底面で検出	-
SK	284		C3	円	-	-	20	24	-	-
SK	285		B2	円	-	-	23	43	SD171底面で検出	-
SK	286		D3	円	-	-	18	27	SD188底面で検出	-

た可能性が高い。埋土の堆積は主に4層に分けられるが、いずれも黒褐色シルトを基調とする。最下層は地山と黄灰色シルト及び黒褐色シルトがモザイク状に混じる。常時滞水しているため、下層程しまりが緩い。遺物は土師器小片、中世土師器（157）、五輪塔の水輪（186）が出土した。

（4）畠

SN1/SD91 ～ 93・122・139（D3・4区 / 第6・16図）

調査区中央に位置する。SD170 を南側の起点とし、南北方向N- 4～ 11° -Eに軸を持つ。約 1.5 ～ 2.1mの間隔を空け、北側に直線的に伸びる鋤溝群である。規模はそれぞれ幅 0.16 ～ 0.42m、深さ 0.06 ～ 0.14mを測り、全長は長いもので約9mを測る。断面形は U 字状で、埋土は主に黒褐色シルトを基調とする。新旧関係のある古代の溝SD94 を切る。遺物はSD91 から土師器小片が出土した。

第4節 遺 物

遺物は縄文土器、弥生土器、古墳土師器、古代土師器・須恵器、中世土師器、珠洲、瀬戸、中国製青磁、越中瀬戸、近世陶磁器、土製品（垂飾・土錘・土玉）、石製品（打製・磨製石斧、石鏃、石皿、石核、剥片等）、木製品（部材、加工木、柱、板材等）、種子（モモ）、骨が出土した。遺物の量は、出土時で中型コンテナ 56 箱を数える。出土遺物の比率は古墳時代初頭～前期の土師器が最も多く、次いで縄文時代晩期の土器が多い。出土遺物の約半分が沼SD01 からであるほか、古墳時代の土師器については当該期の集落を構成する竪穴建物や大型土坑、溝からも多く出土した。一方、弥生土器および古代以降の遺物は少なく、遺構に伴うものはほとんどない。

以上の事から、古墳時代の遺物とそれ以外の時代の遺物を大別し、古墳時代以外の遺物については、文中でふれた遺構から出土した重要または代表的な遺物について記述した。古墳時代の土師器については組成図にまとめ、遺構毎に記述した。なお土師器の分類は、同器種でもその形態および調整等の組み合わせが多種多様であったことから、主に口縁部形態と器形に着目し大きく分類した（第5図）。図版掲載遺物のうち文中でふれなかったものや個々の遺物の詳細については、遺物観察表にまとめた。文中では煩雑さを避けるため、”～形”は省略した。また弥生土器の系譜を持つものは一括して在地系とし、古墳時代以降に本格的に導入されたものを外来系とした。

1. 縄文土器（第 18・22 図）

SD01 1～5は深鉢で、いずれも縄文時代晩期の条痕文土器である。1は胴部から口縁部にかけて内傾して立ち上がり、端部を薄く仕上げ強く外傾する。2はゆるく内湾して立ち上がり、3は直線的に立ち上がる。端部は丸く仕上げる。1は外面に斜位に、2・3は縦方向に条痕文を施す。いずれも晩期の下野式に比定される。4・5は深鉢の底部で、外底面に木葉痕が認められる。6・7は浅鉢である。6は口縁を内掘させ、外面に沈線文・赤彩を施す。端部は内側に面をとる。7は小波状口縁で、口縁端部付近の内面に沈線を1条施す。いずれも縄文後期末葉～晩期前葉のものである。また第5図で出土位置を示したSD01 の縄文土器（試料№7）内面の付着炭化物について放射性年代測定を実施しており、2380±30BP との結果を得た。これはSD01 出土の縄文土器の編年上の位置付けと整合性がみられる。

SP26 91 は条痕文系の深鉢である。口縁部が軽く「く」の字状に屈曲し拡がり、口縁部にキザミを施す。

2. 弥生時代後期～古墳時代前期の土器（第5・18 ～ 23 図）

（1）器種分類（第5図）

甕は有段甕（A）・「く」の字口縁甕（B）・有稜甕（C）・小型甕（D）に大別した。有段甕（A）は在地系で、口縁部に擬凹線文を持つもの（A1）と無文のもの（A2）に分けられるが、擬凹線文を施すものは非常に少なく、不明瞭な退化形態のものが多い。「く」の字口縁甕（B）には口縁端部が丸縁（B1）、面を取る平縁（B2）、そのまま仕上げるもの（B3）、受口状（B4）があり、口縁端部外面に刺突文を施すものや指頭による加工痕を残すものもみられる。体部は最大径を上部に持つ卵倒型が多いが、球胴型・長胴

型もみられる。最終的な外面調整は基本的にハケメだが、さらに部分的にナデ・ケズリ調整を施すものや、反対に工程を省略したと思われるものがある。体部上半のタタキ調整が明瞭に残るものも一定量出土した。口縁部調整は基本的にヨコナデだが、ヨコナデを施さず、端部付近までハケメ調整を残すものも一定量みられる。有稜甕(C)は、有段口縁外面下端を肥厚または稜を持つ、山陰系のものである。小型甕(D)は器高14㎝未満のものを抽出した。

壺は有段壺(A)・長頸壺(B)・短頸壺(C)・広口壺(D)・装飾壺(E)・台付壺(F)・小型壺(G)がある。壺Aは在地系(A1)と外来系(A2)があり、壺A1は月影式の退化形態で擬凹線が不明瞭または無文のもの、壺A2は有段部分が外反して伸びるものである。壺Bは直口口縁をもつ精製壺であり、外面～口縁内面まで丁寧なミガキ調整が施される。口縁は内湾気味のものと直線的なものがある。壺Cは短く内湾気味に伸びる口縁を持つ、やや小型の土器である。壺Dは口縁が「く」の字に開き端部を丸く収めるもの(D1)と、口縁が外傾し端部に小さく面を取るもの(D2)がみられる。また、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部外面と内面上方に向かって面を取り、頸部に刻入突帯を有するもの(D3)がみられる。口縁端部内面に面を取る技法は、布留系甕の影響であり、畿内の様式を部分的に受容した折衷型と考えられる。装飾壺(E)は口縁部を有段または垂下させて面をつくり、そこに2単位の棒状浮文などの装飾を施す。球胴型の体部を持つ。近江・東海系の影響を受けたものである。台付壺(F)は弥生台付壺の系譜に連なるもの(F1)、台付甕の系譜に連なるもの(F2)に分けられる。F2に関しては、ミガキ調整及びや赤彩を施すことから台付壺とした。小型壺(G)は器高11㎝未満のものを抽出した。

高坏は弥生時代の系譜に連なるもの(A)と外来系(B)のものがある。高坏Aには、柱状脚裾部に段を持つもの(A1)、有段部分から大きく広がる拡張口縁のもの(A2)のほか、底部が水平方向に伸び、途中で屈曲して稜や段を持つ坏部と、端部に向かって開く「ハ」の字または途中で緩やかに屈曲して伸びる脚部を持つもの(A3)がみられる。外来系は東海系2種(B1a・b)・畿内系2種(B2a・b)がある。東海系1種(B1a)は小さな坏をもつもので、坏底部が途中で屈曲し稜を持ち口縁部に向かって立ち上がる。2種(B1b)は坏部が脚部近くで屈曲して大きく開くものである。畿内系1種(B2a)は小型の椀状坏と坏部より大きく広がる脚をもつ開脚高坏である。2種(B2b)は坏部が有稜で屈曲して立ち上がり、脚は下部で強く屈曲して広がるものである。

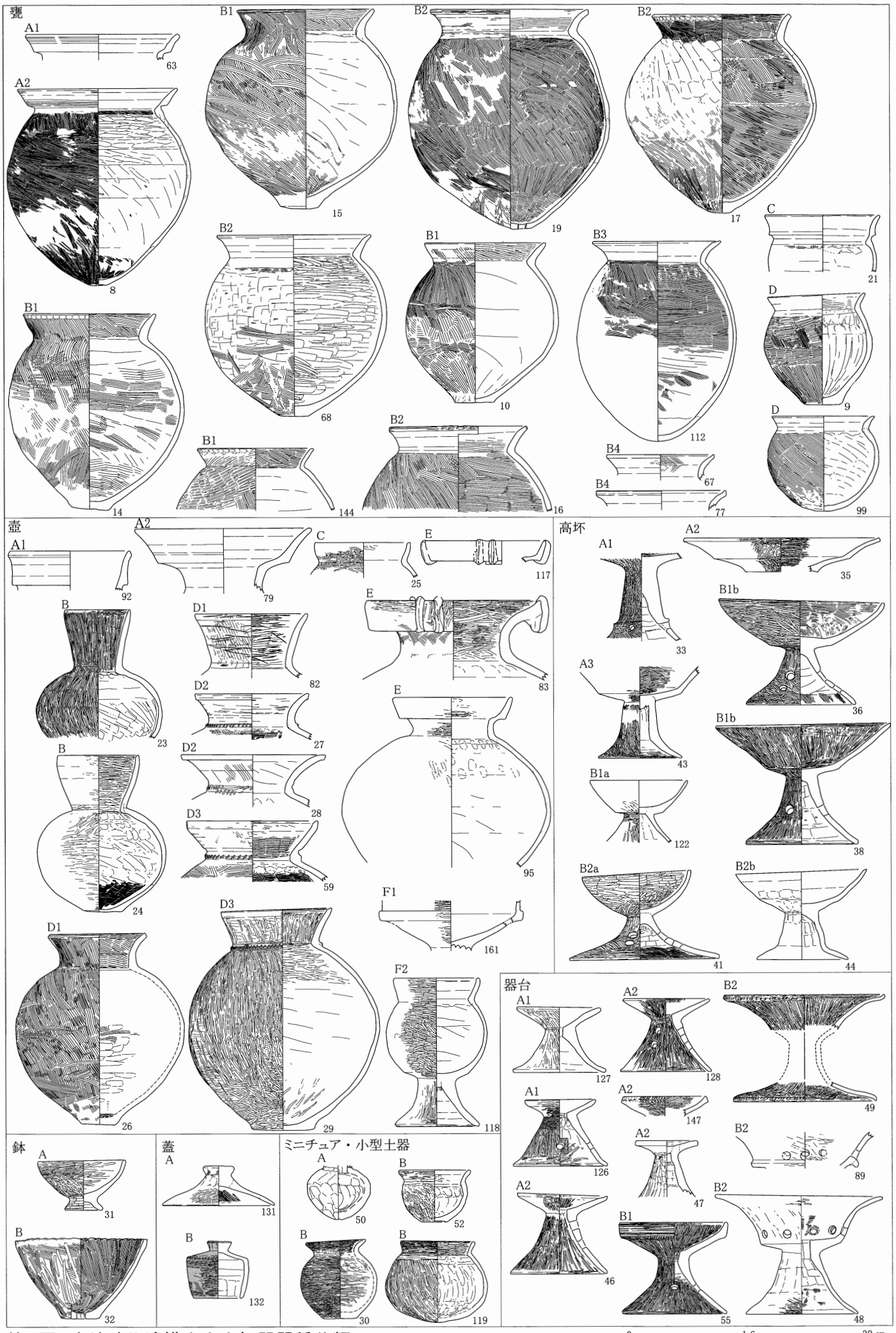
器台は小型器台(A)・有段器台(B)があり、器台Aが大部分を占める。器台Aは外来系で、口縁部を丸く収めるもの(A1)と面を取るもの(A2)があり、そのなかには台部が接合部分から直線的に「ハ」の字状に開くものと内湾気味になるもの、下部で緩やかに屈曲して開くものがある。器台A2にはミガキ調整および赤彩を施す精製品がある。口縁部端面には凹線による羽状文を巡らす。なお器台Aに含めたが、県内での出土事例の少ない、受部中央から脚部に向かって孔を施さない無孔のものもみられる。器台Bは受部が屈曲して直線的に立ち上がるもの(B1)と、端部に向かって大きく外反するもの(B2)ある。器台B1は受部の有段部に擬凹線文やキザミを巡らしたものがある。器台B2は月影期に盛行する装飾器台やその祖型に連なるものである。そのなかで祖型が独自に発展したと考えられるものには、全面にミガキを施し、受部・脚部共に端部にはキザミ等の装飾を施すもの(B2a)がある。退化形態と考えられるものには、受部に涙滴形透孔の省略・退化形である円形透孔を施し、その下端に粘土紐を貼り巡らすもの(B2b)がある。

鉢には台付鉢(A)・底部穿孔鉢(B)がある。鉢Aは小型のもの、鉢Bは口縁が波状で、底部が安定して自立する平底をもっており、底部穿孔鉢でも古相のものである。

蓋は有鈕蓋(A)で、内面に返しをもたない蓋A1のほか、端部が筒状に垂下する有鈕筒状蓋(A2)がある。ミニチュア・小型土器は、手捏ね成形(A)、小型精製土器(B)で分類した。

(2) 沼SD01(第19～21図)

SD01出土遺物には8～52がある。8～21は甕である。8は甕Aである。擬凹線文は退化し、不



第5図　古墳時代遺構出土土師器器種分類

明瞭になっている。 9～20は甕Bであり、口縁形態は甕B1(9～14)、甕B2(15～19)、甕B4(20)となる。21は甕Cである。 調整に着目すると、9・14・18の体部外面肩部～上半部にはタタキ痕がみられるほか、14・17 の口縁端部外面にはユビオサエ痕が、 口縁部外面にはヨコナデが施されずハケメが残る。 16の口縁端部の一部にはキザミを施す。

22 ～ 30 は壺である。 22 は壺 A1 である。 月影式の退化形態で、 口縁の有段部が不明瞭である。端部は丸く収める。 23・24 は壺 B である。 23 は外面全体にタテミガキが施される。 24 の口縁部は内湾して立ち上がる。 25 は壺 C である。 26 は壺 D1、 27・28 は壺 D2 で、 29 は壺 D3 である。 26 ～28は口縁端部に面を取り、27・28は頸部にキザミまたは刻入突帯を巡らす。29は内面斜め上方に向かって面を取り、 端面に沈線を1条巡らす。 30 は壺 G である。

31・32 は鉢である。 31 は鉢 A で、 器高 6.2 cmと小型のもの。 内外面に赤彩を施す。 内面底部を中心に被熱痕が残る。 32 は鉢 B で、 口縁端部にキザミを施し小波状とする。 底部にモミ殻が残る。

33 ～ 44 は高坏である。 33 は高坏 A1 の棒状有段脚で、裾部に段をもち、その下部に円孔を施す。34 は高坏 A2 で、 35 は拡張口縁を持つ大型の高坏 A3 である。 36・37 は高坏 B1a、 38 ～ 40 は高坏 B1b である。 41・42は高坏 B2a、 43・44 は高坏 B2b である。

45 ～ 49 は器台である。 45 ～ 47 は器台 A である。 5・46 は台部に円孔を上下2段ほぼ等角に3方向から施す。 47 は受部底面中央から脚部に向かってに孔を穿たないものである。 外面に赤彩を施す。受部が小さく、 古相のものと考えられる。 畿内系で、 県内での出土事例は少ない。 448 は器台 B2 で受部下半に円孔を9～ 10 方向から施す。 月影式期に盛行した装飾器台の退化形態の一種と考えられる。 49 は弥生時代後期の装飾器台の祖型を系譜に持つもので、 内外面全面にミガキを丁寧に施し、受部および脚部の端部にはキザミを施す。

50 ～ 52 はミニチュア・小型土器で、 いずれも壺である。 50 は手捏ね土器、 51・52 は全面にミガキを施す精製土器である。 52 には赤彩を施す。

(3) 溝（第 21 図）

SD51 出土遺物には 54・55 がある。 54 は甕 B である。 端部に面を取る。 55 は器台 B で受部の口縁外面に粗い擬凹線を巡らせ、 下端には刻みを施す。 台部の中位には円孔を4方向から施す。

SD55 出土遺物には 56 ～ 62 がある。 56 ～ 58 は甕 B である。 57 の口縁部端面に沈線が1条巡る。59 は壺 D3 である。 口縁端部外面と内面上方に面を取り、 頸部に刻入突帯を巡らす。 布留系甕の口縁部の技法を受容した近江・東海系壺との折衷型である。 60・61 は高坏で、 60 は高坏 B1a、 61 は B2a である。 62 は蓋 A1 である。

(4) 竪穴建物（第 21・22 図）

SI61 出土遺物には 68 ～ 71 がある。 68・69 は甕 B である。 70・71 は高坏で、71 は高坏 B1b である。

SI107 出土遺物には 72 ～ 89 がある。 72 ～ 78 は甕である。 72 は底部に穿孔を施す。 73 ～ 78 は甕Bで、口縁形態は甕B1(73)、甕B2(74)、甕B3(75)、甕B4(76)である。76は口縁部にヨコナデを施さず、ハケメがみられる。 79 ～ 83 は壺で、 口縁形態は壺A2(79)、 壺 B(80)、 壺 D1(82)、 壺 E(83) である。83 は大型壺で口縁部に棒状浮文2単位をほぼ等角に3方向から施す。 磨耗が激しいが、 口縁部内面に赤彩の痕跡が残る。 このほか体部のみの出土であったため実測していないが、 球胴型の大型壺が複数出土している。 84 ～ 86 は高坏で、 それぞれ高坏 B1a(84)、 高坏 B2a(85・86) である。 87 ～ 89 は器台である。87・88は器台Aである。87は台部に円孔をほぼ等角に3方向から、88は6方向から施す。89 は器台 B2 で、 受部の身下部に粘土紐を貼り巡らすほか、 円孔を施す。

(5) 柱穴（第 22 図）

SP8出土遺物は 90 がある。 甕 B4 の口縁部である。 端部に狭い面を取り、 軽く受口状とする。

SP27 出土遺物は 92 がある。 壺 A1 で端部に向かって軽く外反する。 口縁端部には面を取る。

(6) 土坑・性質不明遺構（第 22 ～ 24 図）

SK32 出土遺物には 93 ～ 102 がある。93・94 は甕 B である。93 は甕 B1 での口縁部は端部に向かってやや内湾気味に短く伸びる。外面の調整は板ナデのちケズリを施す。94 は甕 B2である。95 ～ 96 は壺である。95・96 は壺 A1 である。95 は有段口縁の退化形態で、口縁がやや外傾して伸び、端部を丸く収める。96 の体部は球胴型である。97 は壺C、98 は壺Eと考えられるが、棒状浮文は残存しない。99 は壺 G である。100・101 は高坏、102 は高坏か台付壺の脚部と考えられるが、いずれも口縁部または脚部のみの出土であり、器形の詳細は不明である。

SK35 出土遺物には 105 ～ 132 がある。105 ～ 112 は甕である。105 ～ 109 は甕 B1 である。そのうち 106、112 は長胴型、108 は相対的に小型で器高は 15.75 ㎝を測る。110・111 は甕 B2 である。111 は口縁部端面に沈線が1条巡る。112 は甕 B3 である。113 ～ 120 は壺である。113 は丸底である。それぞれ壺 A2(114)、壺 B(115)、壺 D(116)、壺 E(117)、壺 F(118)、壺 G(119・120) である。115 は外面に赤彩を施し、残存する体部外面下半には炭化物が付着する。117 は外面赤彩で、口縁部に棒状浮文2単位をほぼ等角4方に施す。118 は外面赤彩で、体部外面に炭化物が付着するが、台部には付着しない。119・120 は小型精製壺である。119 の外面には炭化物が付着する。121 ～ 125 は高坏である。それぞれ高坏 B1a(122・123)、高坏 B1b(124)、高坏 B2a(125) である。121 は高坏B1の可能性が高い。126 ～ 130 は器台である。それぞれ器台 A1(126 ～ 128)、器台 B(130)、器台 B1(129) である。129 には被熱痕がみられる。131・132 は蓋で、それぞれ蓋 A1(131)、蓋 A2(132) である。132 は筒状に端部が垂下するもので、上端部にキザミが、外面上半には凹線文が3条巡る。全面に赤彩を施す。

SK178 からは 138 ～ 143 が出土した。138・139 は甕で、それぞれ甕 B1(138)、甕 B2(139) である 140・141 は高坏である。141 は高坏B1aである。142・143 は器台である。142 は器台 B1 の可能性が高い。有段器台で受部の口縁外面に粗い擬凹線を6条巡らせ、下端には刻みを施す。内外面赤彩である。

SX157 からは 145 ～ 147 が出土した。145 は壺 A である。有段口縁下部を肥厚させる。擬凹線文は施さない。146 は高坏 B1a である。SX157 内であるが、SD168 の延長上から出土した。147 は器台 A2 で口縁端部に凹線による羽状文を施す。

(7) Ⅱ層出土（第 24 図）

161 は壺 F1 である。体部外面下端に粘土紐を 1 条巡らす。162 は蓋 A である。口径 17 ㎝を測る大型のものである。

3. 古代の土器（第 24 図）

SD169から148が出土した。土師器甕の口縁部である。口縁部がやや外傾して端部に向かって延び、端部はやや丸みを帯びた方形を呈する。

SK257 から 149 が出土した。土師器甕の口縁部である。口縁は端部に向かってやや外傾し、端部に面を取る。小型で、古墳時代の可能性がある。

遺物包含層から 163 が出土した。須恵器の坏Bで体部外面中程に沈線が2条巡る。

4. 中近世の土器・陶磁器（第 21・24 図）

SD01 から 53 が出土した。中世土師器の皿で非ロクロ成形、越前編年NDⅡ類である。

SD14から151が出土した。珠洲の鉢で吉岡編年Ⅰ期に比定される。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁は外傾し、端部は方形の面をとる。

SD94 から 152 ～ 156 が出土した。いずれも中世土師器の皿でNDⅡ類である。

SD170 から 159・160 が出土した。159 は中世土師器の皿でNDⅡ類、160 は瀬戸の碗である。口縁をやや細く引き出し、端部を面取りする。灰釉を施す。

SX201 から 157 が出土した。中世土師器の皿でNDⅡ類である。

遺物包含層から 164 ～ 173 が出土した。164 ～ 168 は中世土師器の皿である。164 はNCⅡ類、165 ～ 168 はNDⅡ類である。径8～ 11 ㎝に収まる小型の皿であるNDⅡ類、やや大きい皿のNCⅡ類は、13 ～ 14 世紀に位置づけられる。173 は中国製青磁である。龍泉窯系青磁椀で体部外面に片彫蓮弁文を描く。大宰府編年椀Ⅱ類で 13 世紀初頭～前半の標識土器である。169 ～ 172 は珠洲である。169 は鉢、170・171 は擂鉢である。172 は甕である。口縁が「く」の字状に強く屈折し、端部は短い円頭を呈する。

5. 土製品（第 25 図）

174・175 がある。174 は樽型の土錘である。175 は土玉で径 0.4 ㎜の穿孔を施す。

6. 石製品（第 25 図）

176 ～ 189 がある。176 は磨製石斧である。蛇紋岩製である。定角式で縄文時代中期以降のものである。177・181・189 は打製石斧である。178 は石皿とした。台石との兼用で、裏面には砥石として使用した痕跡が残る。179・182・184・185 は剥片である。179 は玉髄質泥岩（横山真脇石か）、182 は緑色凝灰岩で、184 は非晶質安山岩、185 は黒曜石の二次加工剥片である。180 は鉄石英の石核である。183 は砥石で、4面に砥面としての使用痕がみられる。186 は五輪塔の水輪である。球形の上下を切り取った形状で、中位からやや上方に最大径がくる。側面に梵字“𑖪（バン）”を刻む。187 は垂飾と考えられる。穿孔2孔と三叉文が施される。縄文時代中期中葉のものである可能性が高い。188 は石鏃である。非晶質安山岩で、弥生時代のものと考えられる。

7. 木製品（第 26 図）

SD01 から出土した部材・棒材・角材・板材（190 ～ 199）、SP15・26・27・52・53 から出土した柱（200 ～ 204）に限られ、容器や農工具など他の種類は確認されなかった。190 は角材で片側が炭化している。191 は部材で側面に穿孔を2箇所施す。192、193 は部材である。192 は長さ 188 ㎝を測る大型のもので、193 は正面に横約7㎝ × 縦約6㎝の方形の孔を穿つ。194 は角材、195 ～ 199 は板材である。195 ～ 199 は調査区北東部から、その他大小 35 片と共にまとまって出土した。木製品はいずれも芯去材であり、樹種同定した結果、すべて材質はスギであった。190・193・199・200・202・203 については放射性年代測定を実施し、その結果は弥生時代後期（193・202）、古墳時代前期（190・200・203）、古代後期（199）である。（朝田）

参考・引用文献

池野正男 2012「越中の古墳時代土器様相」『大境』第 31 号 富山考古学会

越前慎子 1996「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の形式分類について」『貿易陶磁研究№.2』日本貿易陶磁研究会

小林達雄編 2008『総覧 縄文土器 －小林達雄先生古稀記念企画－』『総覧 縄文土器』刊行委員会 アム・プロモーション

田嶋明人 1986「Ⅳ考察 漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター

藤沢良祐 2005「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム中世窯業の諸相 生産技術の展開と編年』中央大学文学部日本史研究会

藤田富士夫 2004「古代越中新川郡の「道」と「郷」に関する若干の考察」『人文社会学研究所年報』№.2敬和学園大学

藤田富士夫・駒見和夫 1981「ちょうちょう塚の概要と若干の考察」『大境』第 7 号 富山考古学会

（財）大阪府文化財センター 2003『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』

山本信夫 2000『太宰府市の文化財第 49 集 大宰府条坊跡ＸＶ 陶磁器分類編』太宰府市教育委員会

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉岡弘文館

小杉町教育委員会 1999『HS－04 遺跡発掘調査報告』

庄内式土器研究会 2003『庄内式土器研究ＸＸⅥ- 庄内式併行期の土器生産とその動き -』

富山市教育委員会 1998『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』

富山市教育委員会 2006『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2006『富山市打出遺跡発掘調査報告書 - 一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告 -』

（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2012『水上遺跡 赤井南遺跡 安吉遺跡 棚田遺跡 本江大坪Ⅰ遺跡発掘調査報告』

（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2013『上梅沢遺跡 水橋金広・中馬場遺跡 新堀西遺跡発掘調査報告』

（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2013『下黒田遺跡 下佐野遺跡 諏訪遺跡 蔵野町東遺跡 蔵野町遺跡 駒方南遺跡発掘調査報告』

婦中町教育委員会 2003『富山県婦中町 鍛冶町遺跡発掘調査報告』

八尾町教育委員会 1997『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書1』

第2表　遺物観察表（1）土器

遺物No.	遺構No.	実測図版No.	写真図版No.	出土地点	種別	器種	時代	法量(cm) 口径	器高	底径	頸径	体部最大径	孔径／鍵径	色調	備考	調整	胎土	焼成	残存率(%)
1	1	18	10	F4区 SD01：X20Y30	縄文土器	深鉢	縄文晩期	30.3	(23.7)	－	－	－	－	10YR7/4にぶい黄橙	条痕文土器	内面～口縁ナデ 体部外面 条痕文	密 φ3mm以下の粗砂混	良	20%
2	1	18	10	G3区 SD01	縄文土器	深鉢	縄文晩期末	(24.8)	(21.8)	－	－	－	－	10YR7/3にぶい黄橙～4/1褐灰	条痕文土器	内面ナデ 外面条痕文・ナデ	密 長石・石英含、φ5mmの小礫あり	良	20%
3	1	18	10	F4区 SD01：X20Y30	縄文土器	深鉢	縄文晩期末	(26.2)	(20.9)	－	－	－	－	2.5Y7/3浅黄	条痕文土器	内面ナデ・ミガキ 外面条痕文＋ナデ	密 長石・石英多含	良	20%
4	1	18	10	SD01	縄文土器	深鉢	縄文晩期	－	(7.0)	9.75	－	－	－	10YR6/1褐灰	底面：木葉痕	ハケ→ケズリ	密 長石・石英砂非常に多い	良	5%
5	1	18	10	SD01	縄文土器	深鉢	縄文晩期	－	(4.6)	7.5	－	－	－	10YR6/3にぶい黄橙	底面：木葉痕	ハケメ	密 砂多く混 長石・石英含	良	5%
6	1	18	10	SD01	縄文土器	浅鉢	縄文後～晩期	32.0	(11)	－	－	－	－	10YR6/4にぶい黄橙	縄文後期後葉～晩期前葉、口縁部に沈線文	ミガキ	粗 長石・石英多く含	良	20%
7	1	18	10	SD01⑥下層	縄文土器	浅鉢	縄文晩期	32.5	(7.5)	－	－	－	－	10YR6/2灰黄褐	底部付近もあるが、接合しない。底径不明	全面ミガキ 波状口縁、口縁付近に横沈線1条	密 長石・石英多含	良	50%
8	1	19	12	G4区 SD01③	土師器	甕	古墳前期	19.9	24.5	1.9	15.7	22.8	－	2.5Y8/3淡黄		口縁ヨコナデ 体部外ハケメ、内ケズリ・ハケメ	やや粗 粗砂混	良	95%
9	1	19	11	G4区 SD01③	土師器	甕	古墳前期	11.8	18.8	4.05	10.4	13.3	－	10YR7/3にぶい黄橙		口縁内面ヨコナデ 体部外面ハケメ、上半タタキ 内面板ナデ ※内面に化粧土？塗布	やや粗 φ1mm以下砂多く混	良	95%
10	1	19	11	G4区 SD01②	土師器	甕	古墳前期	(14.7)	19.8	5.0	(12.6)	18.45	－	7.5YR7/6橙		口縁ヨコナデ・ハケメ 体部外ハケメ、内ナデ 底部ケズリ	やや粗 骨針含・砂混	良	50%
11	1	19	12	SD01⑥	土師器	甕	古墳前期	18.0	26.0	2.5	15.1	23.3	－	10YR7/4にぶい黄橙～6/2灰黄褐		口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	やや粗 砂混	良	80%
12	1	19	12	SD01⑥下層	土師器	甕	古墳前期	(17.1)	26.3	4.0	(15.4)	(23.55)	－	10YR7/3にぶい黄橙	全体に大きくゆがむ。	口縁外面ハケ→ヨコナデ 体部内外 ハケメ	やや粗 長石・石英・雲母混	良	80%
13	1	19	12	SD01⑥下層	土師器	甕	古墳前期	17.2	27.35	4.05	14.1	24.3	－	10YR6/4にぶい黄橙		口縁ヨコナデ 体部外面ハケ→ケズリ 内面板ナデ→ハケ 底部ケズリ	やや粗 砂粒混・骨針含	良	80%
14	1	19	12	SD01②	土師器	甕	古墳前期	16.1	24.4	4.6	14.15	21.3	－	7.5YR7/6橙	ゆがみ大きい。	口唇部オサエ 内外ハケメ 屑部にタタキあり	やや粗 砂混、φ5mm以下小礫	良	70%
15	1	19	12	SD01②	土師器	甕	古墳前期	16.4	24.7	4.8	14.7	23.7	－	外7.5YR7/6橙、内2.5Y7/2灰黄		口縁～体部外面ハケメ、体部内面ナデ、底部外面ナデ、内面ハケメ	やや粗 砂混	良	80%
16	1	19	14	SD01⑥下層	土師器	甕	古墳前期	16.8	(10.6)	－	14.4	－	－	10YR7/3にぶい黄橙	口縁一部のみキザミ	口縁ハケ→ヨコナデ 体部内外ハケメ	やや粗 粗砂混	良	15%
17	1	19	11	SD01⑥	土師器	甕	古墳前期	16.25	24.15	2.9	15.1	23.6	－	10YR7/4にぶい黄橙	外面スス付着	口唇部オサエ・頸部キザミ有 外面ハケメ→ケズリ 内面ハケメ	やや粗 骨針含・φ2mm以下粗砂混	良	60%
18	1	19	11	G4区 SD01③	土師器	甕	古墳前期	15.3	25.3	4.3	14.0	22.3	－	10YR7/4にぶい黄橙		外面ハケメ、体部上半タタキ痕 内面ケズリ	粗 骨針含・砂25% φ3mm以下小礫混	良	98%
19	1	19	12	SD01⑥下層	土師器	甕	古墳前期	19.4	27.3	2.3	16.7	25.0	－	10YR7/3にぶい黄橙		口縁ヨコハケ・ヨコナデ 体部内外ハケメ、外面下部ケズリ→ハケメ	やや粗	良	95%
20	1	19	14	SD01	土師器	甕	古墳前期	17.7	(6.7)	－	16.4	－	－	10YR6/4にぶい黄橙	端部に面を取る。	口縁ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面板ナデ体部ハケメ(一部板ナデ様)	密 粗砂多く混、石英粒含	良	10%
21	1	19	14	SD01	土師器	甕	古墳前期	14.0	(7.1)	－	12.0	13.4	－	10YR6/3にぶい黄橙	山陰系	ヨコナデ・ナデ	密 長石・石英含	良	5%
22	1	20	12	SD01	土師器	壺	古墳前期	15.1	30	6.3	11.6	26.3	－	10YR6/4にぶい黄橙	体部に黒斑あり。	口縁～外面ミガキ 屑部、底部付近内面ハケメ 体部ナデ	やや粗 長石・石英混	良	80%
23	1	20	12	G4区 SD01③	土師器	長頸壺	古墳前期	8.0	(15.9)	－	6.0	25.7	－	7.5YR7/6橙		口縁～体部外面タテミガキ 体部内面ナデ→ケズリ	やや粗 砂混	良	50%
24	1	20	12	G4区 SD01①	土師器	長頸壺	古墳前期	9.9	19.4	4.9	6.8	16.0	－	5YR7/8橙～7.5YR7/6橙	内湾口縁、甑壺状	口縁内外～体部外面ミガキ 体部内面下部ハケメ、中部ナデ、上部オサエ・指ナデ	やや粗 石英・長石砂含	良	95%
25	1	20	14	SD01	土師器	壺	古墳前期	11.85	(4.45)	－	10.95	－	－	10YR7/3にぶい黄橙		ミガキ	やや粗	良	20%
26	1	20	11	G4区 SD01③	土師器	壺	古墳前期	10.7	23.7	3.9	9.4	20.85	－	10YR8/3浅黄橙	体部に黒斑あり。	口縁～頸部内外・体部外面ハケメ 体部内面上半ナデ？一部ハケメ、下半ケズリ	密 φ1mm砂粒10%、φ3mmレキ混	良	99%(ほぼ完形)
27	1	20	14	SD01	土師器	壺	古墳前期	13.9	(5.75)	－	10.65	－	－	10YR6/3にぶい黄橙	頸部にキザミが巡る。端部に有段状のしっかりとした面を取る。	口縁ヨコナデ屑部外面ハケ→ミガキ内面ハケメ	密 砂混	良	10%
28	1	20	14	SD01⑤	土師器	壺	古墳前期	17.9	(6.4)	－	10.4	－	－	10YR8/4浅黄橙	頸部にキザミ(粗い)、端部に面を取る。	ハケ→ヨコナデ	やや粗 φ2mm以下粗砂混、長石・石英含	良	10%
29	1	20	11	SD01	土師器	壺	古墳前期	13.7	27.55	7.1	10.7	23.7	－	外5YR6/8橙、内10YR8/3浅黄橙	頸部に刻入突帯 端部内側に面を取る。端面に沈線が1条巡る。体部に黒斑あり。	内外ミガキ 体部内面はナデ→ミガキ	やや粗 長石・石英混	良	80%
30	1	20	12	G4区 SD01①	土師器	小型壺	古墳前期	7.2	9.75	4.0	5.4	9.35	－	10YR7/4にぶい黄橙		外面～口縁内面ミガキ 体部内面上半ナデ(指ナデ)、下半ミガキ様のケズリ	密 φ1～3mm砂粒3%含	良	100%(完形)
31	1	20	12	SD01⑤	土師器	台付鉢	古墳前期	10.6	6.2	4.4	3.4	－	－	10YR8/4浅黄橙、赤彩2.5YR4/6赤褐	赤彩(台部内面を除く)	台部内面ナデ他はミガキ 外面一部ハケメ残 内面ナデ残	やや粗 長石・石英砂含	良	50%
32	1	20	12	SD01⑥	土師器	鉢(底部穿孔)	弥生終末～古墳初頭	16.4	10	4.15	－	－	1	10YR7/4にぶい黄橙	口縁キザミ 底部モミ痕あり。	内面ハケメ 外面口縁部ヨコナデ→キザミ＋オサエ→ハケメ→ナデ	やや粗 φ3mm以下砂粒混	良	80%
33	1	20	14	SD01	土師器	高坏	弥生後～終末期	－	－	－	3.9	－	－	2.5Y7/2灰黄、赤彩2.5YR5/6明赤褐	棒状有段脚(有段裾) 円孔3方向 赤彩	ミガキ、脚部内面板ナデ	やや粗 骨針含、石英・長石混	良	30%
34	1	20	14	SD01	土師器	高坏	古墳前期	13.5	(5.5)	－	3.45	－	－	10YR7/4にぶい黄橙		ヨコナデ	密 長石・石英混	良	50%
35	1	20	14	SD01⑤	土師器	高坏	古墳	24.0	(4.2)	－	－	－	－	7.5YR7/4にぶい橙、赤彩2.5YR4/6赤褐	拡張口縁、赤彩	ミガキ	やや粗 長石・石英含	良	5%
36	1	20	13	G4区 SD01③	土師器	高坏	古墳前期	20.1	13.1	13.1	3.4	－	－	10YR8/3浅黄橙	体部に黒斑あり。	坏部～脚部外面ミガキ 脚部内面ハケメ・板ナデ 脚部スカシ2段×3方向	やや粗 細砂多混、骨針含	良	95%
37	1	20	13	SD01⑥	土師器	高坏	古墳前期	21.5	14.0	13.3	3.5	－	－	10YR7/3にぶい黄橙	外面スス付着、円孔3方向	坏部・脚部外面ミガキ 脚内面板ナデ(一部ハケメ)	やや粗	良	80%
38	1	20	13	SD01	土師器	高坏	古墳前期	21.4	14.95	13.4	3.7	－	－	10YR6/4にぶい黄橙		坏部～脚外面ミガキ 脚内面ヨコナデ・ケズリ	粗 骨針含、砂・φ3mm小礫混	良	95%
39	1	20	13	SD01	土師器	高坏	古墳前期	19.4	14.25	12.3	3.25	－	－	5YR6/6橙	脚裾部上下2段3方同間隔円孔	ミガキ、脚部内面ハケメ・板ナデ	やや粗 砂多く混、骨針・長石・石英含	良	70%
40	1	20	13	SD01③	土師器	高坏	古墳前期	19.4	13.55	12.4	3.1	－	－	10YR7/4にぶい黄橙～5YR6/6橙		ミガキ、脚部内面板ナデ	やや粗 砂多く混	良	95%
41	1	20	13	G4区 SD01③	土師器	高坏	古墳前期	13.35	11	18.5	3.0	－	－	10YR7/4にぶい黄橙	円孔2段3方向・体部に黒斑あり	坏部、脚外面ミガキ 脚内面ケズリ・ハケメ	やや粗	良	95%
42	1	20	14	SD01④	土師器	高坏	古墳前期	－	(7.7)	－	3.45	－	－	7.5YR7/4にぶい橙、赤彩5YR4/6赤褐	赤彩、円孔3方向	坏部、脚外面ミガキ 頸部ミガキの上からナデ 脚内面板ナデ	密 砂混・骨針含・雲母？混	良	20%
43	1	20	13	SD01⑥	土師器	高坏	古墳前期	－	(11.3)	10.2	3.8	－	－	10YR6/3にぶい黄橙、赤彩2.5YR4/6赤褐	外面スス付着	内外ミガキ 脚部内面ハケおよびナデ	やや粗、骨針・長石・石英砂含	良	40%
44	1	20	14	G5区 SD01	土師器	高坏	古墳前期	(16.1)	(11.15)	(11.1)	3.95	－	－	5YR7/8橙	磨耗激しい。	ナデ、ケズリ 脚内面板ナデ	密	良	70%
45	1	21	14	G4区 SD01①	土師器	器台	古墳前期	10.25	9.45	12.1	3.45	－	－	5YR6/6橙	円孔2段 3方向か。	坏部・脚外面ミガキ	密、砂混、長石・石英含	良	50%

第2表　遺物観察表（2）土器

遺物No.	遺構No.	実測図版No.	写真図版No.	出土地点	種別	器種	時代	法量(cm) 口径	器高	底径	頸径	体部最大径	孔径／鈕径	色調	備考	調整	胎土	焼成	残存率(%)
46	1	21	14	SD01	土師器	器台	古墳前期		10.05	11.8	3.8	－	－	10YR6/3にぶい黄橙	円孔2段×3方向	ミガキ	粗　雲母微粉末？含、砂・φ3mm以下小礫混	良	50%
47	1	21	14	SD01④	土師器	器台	古墳前期	7.5	(7.05)	－	2.8	－	－	10YR6/4にぶい黄橙	受部底部中央から脚部へ向かっての穿孔が施されない。	受部外面ヨコナデ　脚部内面板ナデ　他はミガキ	やや粗	良	50%
48	1	21	13	G5区　SD01④	土師器	器台	古墳前期	20.2	14.8	13.5	4.5	－	－	10YR7/4にぶい黄橙	受部に円孔を9～10方向から施す。体部に黒斑あり。	受部～脚部外面ミガキ　脚内面ケズリ・ハケメ・ナデ	やや粗　骨針・長石・石英砂多含、φ5mm以下小礫混	良	95%
49	1	21	14	SD01	土師器	器台	古墳前期	19.7	－	17.6	－	－	－		受部・脚底部の端部にキザミを施す。円孔あり。8方向か。	ミガキ、口唇部ヨコナデ	密　骨針・石英・長石含	良	15%
50	1	21	12	G5区　SD01④	土師器	ミニチュア壷	古墳前期	－	(6.7)	0.9	3.45	7.7	－	7.5Y8/4浅黄橙		外面ケズリorナデ(摩滅)　内面ユビナデ　頸部内面シボリか？	やや粗	良	90%
51	1	21	14	SD01⑥	土師器	小型壷	古墳前期	－	(4.75)	4.2	－	7.6	－	10YR7/3にぶい黄橙		内外ともミガキ(底部もミガキ)	やや粗　骨針・長石・石英砂含・雲母含	良	30%
52	1	21	14	SD01⑥	土師器	小型広口壷	古墳前期	(8.8)	6.4	3.1	7.6	8.7	－	10YR8/3浅黄橙、赤彩2.5YR6/8橙	赤彩	外面ナデ・オサエ→ミガキ　内面口縁ヨコナデ→ミガキ、体部ナデ・オサエ	やや粗　骨針・石英・長石砂・雲母含	良	30%
53	1	21	14	SD01	中世土師器	皿(灯明皿)	中世	7.0	1.7	－	－	－	－	10YR7/4にぶい黄橙	非ロクロ	ナデ	密	良	50%
54	51	21	15	SD51	土師器	甕	古墳	29.4	(7.2)	－	－	－	－	外10YR6/4にぶい黄橙、内10YR7/4にぶい黄橙		ヨコナデ　ヨコハケ	やや粗	良	5%未満
55	51	21	13	SD51西壁内	土師器	器台	古墳前期	13.0	11.35	12.8	3.75	13.45	－	7.5YR8/6浅黄橙	凹線文は痕跡的、かなり雑	内外タテミガキ　受部凹線文・キザミあり　台部スカシ4方向	密　長石・石英含	良	90%
56	55	21	15	SD55	土師器	甕B	古墳前期	18.0	(5.85)	－	14.8	－	－	外7.5YR6/4にぶい橙、内10YR7/4にぶい黄橙、赤彩5Y6/6橙		口縁ヨコナデ　体部ハケメ	やや粗	良	5%
57	55	21	15	SD55	土師器	甕B	古墳前期	15.0	(3.55)	－	12.85	－	－	10YR7/4にぶい黄橙	口縁部端面に沈線が1条巡る	口縁ヨコナデ　体部ハケメ	やや粗　砂混	良	5%未満
58	55	21	15	SD55	土師器	甕B	古墳前期	14.3	(4.5)	－	11.35	－	－	7.5YR6/6橙		口縁ヨコナデ　体部ハケメ	やや粗　砂混	良	5%
59	55	21	15	SD55	土師器	壷	古墳前期	16.15	(7.45)	－	11.3	－	－	7.5YR8/6浅黄橙	口縁外面の一部にスス付着	口縁ハケ→ヨコナデ　頸部刻入突帯 肩部ハケメ内面ハケメ	密　φ3mm以下粗砂3%混	良	25%(口縁100%)
60	55	21	15	F3区　SD55	土師器	高坏か	古墳前期	11.4	(4.3)	－	－	－	－	10YR8/4浅黄橙		外面板ナデ　内面ナデ(指ナデか？)	やや粗　φ1～2mm砂25%混	良	10%
61	55	21	15	SD55	土師器	高坏	古墳前期	15.6	(14.2)	15.6	－	－	－	5YR5/6明赤褐	スカシあり。	ミガキ	やや粗　砂少し混	良	10%
62	55	21	15	SD55	土師器	有鈕蓋	古墳前期	－	(2.75)	－	－	－	3.15	5YR6/6橙、赤彩2.5YR4/6赤褐	外面赤彩	ミガキ	やや粗	良	10%
63	66	21	15	SD66	土師器	甕	古墳初頭	17.3	(3.15)	－	－	－	－	10YR6/3にぶい黄橙	有段口縁	ロクロナデ	やや粗　砂少し混	良	5%未満
64	72	21	15	SD72	土師器	壷	古墳前期	－	(4)	5.8	―	－	－	外5Y3/1オリーブ黒～7.5Y5/4にぶい褐、内2.5Y7/2灰黄	植物(イネ科)痕あり。黒斑部分あり。	内面ハケメ　底面ケズリ　外面ハケ→ミガキ	やや粗　長石・石英含	良	5%
65	98	21	15	SD98	土師器	器台	古墳前期	13.2	(2.7)	－	－	－	－	10YR7/4にぶい黄橙	もみ痕あり。キザミあり。90と同一個体の可能性あり。	外面ミガキ	やや粗	良	5%
66	98	21	15	SD98	土師器	器台	古墳前期	－	(4.2)	22	－	－	－	10YR7/4にぶい黄橙	89と同一個体の可能性あり。透穴あり。キザミあり。	ミガキ	やや粗　砂少し混	良	10%
67	179	21	15	SD179	土師器	甕	古墳前期	12.8	(3.0)	－	－	－	－	外10YR6/3にぶい黄橙、内2.5Y8/3淡黄	「く」の字口縁　外面スス付着	ハケ→ヨコナデ	やや粗　砂混	良	5%未満
68	61	21	15	SI61	土師器	甕	古墳前期	18.8	22.4	3.3	16.15	22.4	－	10YR8/4浅黄橙		口縁内外ヨコナデ　体部外面ケズリ→ハケメ 体部内面ケズリ(精緻)	やや粗　φ3mm以下の小礫・砂混、骨針含	良	90%
69	61	21	15	SI61	土師器	甕	古墳前期	18.5	(6.9)	－	16.6	－	－	10YR6/4にぶい黄橙	「く」の字口縁	口縁ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面板ナデ	やや粗　砂混	良	5%
70	61	21	15	SI61	土師器	高坏	古墳前期	－	(6.9)	9.05	3.4	－	－	5YR6/6橙、赤彩2.5YR4/6赤褐	外面赤彩	外面ミガキ　内面ヨコハケ→ヨコナデ	やや粗　砂混	良	30%(脚部100%)
71	61	21	15	SI61	土師器	高坏	古墳前期	18.7	(4.85)	－	－	－	－	10YR7/3にぶい黄橙、赤彩5YR5/6明赤褐色	赤彩	内面ミガキ　赤彩	やや粗　砂混	良	20%
72	107	21	15	SI107	土師器	甕(有孔)	古墳前期	－	(4.55)	1.4	－	－	－	外5Y3/1オリーブ黒、内10YR7/2にぶい黄橙	底部穿孔	ハケメ(内外)	やや粗　長石・石英含	良	5%未満
73	107	21	15	SI107	土師器	甕	古墳前期	13.9	(3.4)	－	12.0	－	－	10YR7/4にぶい黄橙		口縁部ヨコナデ　内面ハケメ	やや粗　長石・石英含	良	5%未満
74	107	21	15	SI107	土師器	甕	古墳前期	16.7	(4.4)	－	13.9	－	－	外10YR5/2灰黄褐、内7.5YR7/6橙	「く」の字口縁	ハケメ、ナデ	やや粗　φ4mm以下の小石礫を含	良	5%未満
75	107	21	15	SI107	土師器	甕	古墳前期	15.1	(16.9)	－	12.8	－	－	10YR7/4にぶい黄橙	ゆがみ大きい。	口縁ヨコナデ　体部外面ハケメ、内面ハケ→ケズリ	やや粗　φ3mm以下粗砂混、長石・石英含	良	20%
76	107	21	15	SI107	土師器	甕	古墳前期	18.5	(7.6)	－	15.7	－	－	10YR7/3にぶい黄橙	「く」の字口縁	口縁～体部外面ハケメ　体部内面ナデ	やや粗　砂混	良	10%
77	107	21	15	SI107	土師器	甕	古墳前期	13.8	(2.3)	－	10.8	－	－	2.5Y6/4にぶい橙		ヨコナデ(マメツ)	やや粗	良	5%未満
78	107	22	15	SI107	土師器	甕	古墳前期	14.1	(18.4)	－	12.4	(19.4)	－	10YR7/4にぶい黄橙		口縁部ヨコナデ、体部外面ケズリ→ハケメ、体部内面ナデ、肩部にハケメあり	やや粗　粗砂・φ3mm以下の小礫混	良	50%
79	107	22	15	SI107	土師器	壷	古墳前期	21.1	(8.05)	－	9.5	－	－	10YR8/4浅黄橙、内10YR5/2灰黄褐	外来系(東海)の有段口縁壷	ヨコナデ	粗　石英・長石混	良	10%
80	107	22	15	SI107	土師器	長頸壷	古墳前期	10.5	(8.2)	－	6.1	－	－	2.25Y7/3浅黄橙		ミガキ	密	良	5%
81	107	22	15	SI107	土師器	甕	古墳前期	11.0	(5.6)	－	10.6	－	－	外10YR4/2灰黄褐、内10YR8/4浅黄橙	有段口縁	口縁部ヨコナデ　体部板ナデ	やや粗　φ2mm以下の粗砂混	良	5%
82	107	22	16	SI107	土師器	壷	古墳前期	14.0	(7.95)	－	10.0	－	－	10YR7/4にぶい黄橙		ミガキ	密	良	10%
83	107	22	16	SI107	土師器	壷	古墳前期	21.45	(10.35)	－	13.6	－	－	10YR8/3浅黄橙、赤彩10R4/8赤	棒状浮文2単位×3方向　口縁内面赤彩	ハケメ→ミガキ	やや粗　長石・石英含	良	10%
84	107	22	16	SI107	土師器	高坏	古墳前期	10.5	(5.35)	－	3.0	－	－	10YR7/3にぶい黄橙	二次被熱のような赤変あり。	ミガキ	やや粗	良	20%
85	107	22	16	SI107	土師器	高坏	古墳前期	15.4	(6.15)	－	－	－	－	10YR7/3にぶい黄橙	体部に黒斑あり。	ミガキ	密　粗砂少し混	良	30%
86	107	22	16	SI107	土師器	高坏	古墳前期	－	(8.3)	－	4.2	－	－	2.5YR7/3浅黄	穿孔4か所	外面ミガキ　内面ハケメ	やや粗　骨針含	良	30%
87	107	22	16	SI107	土師器	器台	古墳前期	－	(8.15)	12.2	4.2	－	－	外5YR6/6橙、内7.5YR7/2明褐灰	等間隔に穿孔3か所　赤彩	外面ミガキ　内面ハケメ　ヨコナデ	やや粗　骨針・石英・長石含	良	30%
88	107	22	16	SI107	土師器	器台	古墳前期	－	(8)	12.05	3.0	－	－	10YR8/3浅黄橙	円孔6方向	外面ミガキ　脚内面シボリ・ナデ・ハケメ	やや粗　骨針・φ2mm石英粒含・微細雲母粉？含	良	40%
89	107	22	16	SI107	土師器	器台	古墳前期	－	(4.3)	－	－	－	－	5YR7/6橙、赤彩10R4/6赤	円孔あり。(方向不明　3以上)	ミガキ	やや粗　粗砂少し混	良	5%
90	8	22	16	D6区　SP8	土師器	甕	古墳～	(15.8)	(2.4)	－	－	－	－	10YR7/3にぶい黄橙		ヨコナデ	やや粗　砂混	良	5%未満

第2表　遺物観察表（3）土器

遺物No.	遺構No.	実測図版No.	写真図版No.	出土地点	種別	器種	時代	法量(cm) 口径	器高	底径	頸径	体部最大径	孔径／鈕径	色調	備考	調整	胎土	焼成	残存率(%)
91	26	22	16	F5区 SP26	縄文	深鉢	縄文晩期	－	－	－	－	－	－	10YR5/2灰黄褐		外面ケズリ 内面ナデ 口縁キザミ有	密 砂多く混	良	5%未満
92	27	22	16	E5区 SP27	土師器	壷	古墳前期	14.6	(4.9)	－	－	－	－	10YR7/4にぶい黄橙		ヨコナデ	やや粗 骨針含	良	5%未満
93	32	22	15	G4区 SK32	土師器	甕	古墳前期	(16.1)	24.0	1.7	14.0	22.3	－	外10YR3/1黒褐、内10YR7/4にぶい黄橙		口縁横ナデ 外面板ナデ→ケズリ 内面ナデ	粗 φ3mm以下の長石・石英粒含	良	70%
94	32	22	16	SK32	土師器	甕	古墳	12.4	(13.7)	－	13.8	21.7	－	外10YR5/3にぶい黄褐、内2.5Y7/2灰黄	頸部に工具による線刻あり。	口縁ヨコナデ、肩部外面ハケ→ケズリ→体部ハケ、内面ナデ	密 粗砂混	良	15%
95	32	22	16	SK32	土師器	壷	古墳前期	12.8	(5.5)	－	9.5	－	－	10YR7/4にぶい黄橙		ハケ→ミガキ	やや粗、φ3mm小礫有	良	5%
96	32	22	14	SK32	土師器	壷	古墳前期	－	(23.7)	8.0	－	27.0	－	10YR8/4浅黄橙	体部最大径27cm 体部に黒斑あり。	外面タテミガキ 内面ハケ→ナデ	やや粗	良	50%
97	32	22	16	SK32	土師器	壷	古墳前期	11.3	(4.4)	－	10.35	－	－	10YR7/4にぶい黄橙、赤彩2.5YR5/6明赤褐	口縁部内面～外面赤彩	ミガキ	やや粗	良	15%
98	32	22	14	SK32	土師器	壷	古墳前期	14.5	(21.1)	－	10.0	25.9	－	外10YR8/4浅黄橙、内2.5Y6/2灰黄		外面ミガキ 体部内面オサエ・ナデ	やや粗 φ3mm以下粗砂少混	良	50%
99	32	22	14	SK32	土師器	小型甕	古墳前期	12.2	(11.8)	1.8	11.2	13.7	－	7.5YR6/4にぶい橙		口縁部ヨコナデ 体部外面ハケメ 内部指ナデ	粗 φ4mm以下小礫を含む 粗砂含 骨針・長石・石英含	良	60%
100	32	22	16	SK32	土師器	高坏か？	古墳前期	－	(7.7)	11.15	4.2	－	－	7.5YR8/4浅黄橙		内面ハケメ 外面ミガキ(マメツ)赤彩	やや粗 φ3mm以下粗砂混	良	30%
101	32	22	16	SK32	土師器	高坏	古墳前期半	16.4	(6.7)	－	－	－	－	10YR8/4浅黄橙、赤彩2.5Y5/6明赤褐	赤彩	ミガキ	やや粗 骨針・長石・石英含む	良	20(鉢)/10(高坏)
102	32	22	16	SK32	土師器	高坏か	古墳前期	－	(4.3)	8.3	4.1	－	－	10YR8/3浅黄橙、赤彩2.5YR4/8赤褐	低脚	外面ミガキ→赤彩 内面ハケ→ナデ	やや粗 骨針含	良	40%
103	34	22	16	SK34	土師器	甕	古墳前期	18.0	(4.1)	－	－	－	－	2.5Y7/3浅黄	「く」の字口縁	ヨコナデ	やや粗 砂混	良	5%未満
104	34	22	16	SK34	土師器	有鈕蓋	古墳前期	―	(3.45)	－	－	－	2.95	外10YR7/4にぶい黄橙、内7.5YR6/6橙		ミガキ	密	良	10%
105	35	23	15	SK35	土師器	甕	古墳前期	16.9	(21.4)	－	14.7	21.7	－	10YR7/3にぶい黄橙	内面コゲ、外面スス付着 体部に黒斑あり。	口縁ヨコナデ 体部外面ハケメ、内面ケズリ	やや粗	良	70%
106	35	23	15	SK35	土師器	甕	古墳前期？	(14.75)	(20.85)	－	(12.6)	(17.2)	－	10YR7/4にぶい黄橙		口縁ヨコナデ 体部外ハケ→ケズリ、内下部ハケ、他ナデ	やや粗、φ2mm以下粗砂混	良	30%
107	35	23	16	SK35	土師器	甕	古墳前期	15.6	(7.0)	－	13.8	－	－	2.5Y7/3浅黄		口縁ヨコナデ 体部内面ナデ 外面ハケ→ケズリ？	粗 砂多く混	良	5%
108	35	23	15	SK35	土師器	甕	古墳前期	(14)	15.45	6.0	11.7	14.2	－	7.5YR8/4浅黄橙		口縁内外ヨコナデ 体部上半ハケメ 内面ナデ	やや粗、砂混	良	90%
109	35	23	16	SK35	土師器	甕	古墳前期	15.5	(10.3)	－	12.7	－	－	10YR8/4浅黄橙		口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	やや粗 長石・石英含	良	30%
110	35	23	16	SK35	土師器	壷	古墳前期	17.3	(7.5)	－	16.0	－	－	10YR7/4にぶい黄橙		口縁～体部外面ハケメ 体部内面ナデ	やや粗 砂混	良	5%未満
111	35	23	16	SK35	土師器	甕	古墳前期	18.8	(14.75)	－	17.0	23.2	－	10YR7/4にぶい黄橙	口縁部端面に沈線が1条巡る。	口縁～肩部ヨコナデ 内面ケズリ、外面ハケメ	密 φ2mm以下の粗砂20%混	良	20%
112	35	23	15	SK35	土師器	甕	古墳前期	15.6	24.8	－	12.0	19.8	－	2.5Y7/3浅黄	丸底・二次被熱あり。	口縁ヨコナデ 体部ハケメ(外面下半マメツ)	やや粗 粗砂混	良	60%
113	35	23	16	SK35	土師器	壷	古墳前期	－	(8.8)	－	－	－	－	10YR6/6橙	丸底 体部に黒斑あ。り	外面ミガキ 内面ハケ→ナデか(マメツ)	やや粗	良	20%
114	35	23	16	SK35	土師器	壷	古墳前期	16.8	(6.1)	－	－	－	－	10YR8/2灰白	外来系(東海)の有段口縁壷	ヨコナデ→ミガキ	やや粗 砂混	良	5%未満
115	35	23	16	SK35	土師器	壷	古墳前期	－	(7.65)	－	7.45	－	－	2.5Y8/3淡黄、赤彩2.5Y5/6明赤褐	外面赤彩 体部下半に炭化物付着	外面ミガキ 内面オサエ ミガキ	やや粗 砂混	良	10%
116	35	23	14	SK35	土師器	壷	古墳前期	12.2	30.0	4.7	10.9	25.8	－	7.5YR8/3浅黄橙	自立可 体部に黒斑あり。	口縁ヨコナデ 体部上半ハケ、下半ケズリ 内面ハケ→ナデ	やや粗	良	95%
117	35	23	16	SK35	土師器	壷	古墳前期	14.9	(2.95)	－	－	－	－	10YR8/4浅黄橙、赤彩2.5YR5/6明赤褐	外面赤彩 棒状浮文2単位4方ほぼ等間隔	ヨコナデ	やや粗	良	5%
118	35	23	13	SK35	土師器	台付壷	古墳前期	10.4	18.3	10.3	9.5	12.6	－	2.5Y7/2灰黄、赤彩5YR4/8赤褐	外面赤彩 スス付着 体部に黒斑あり。	口縁・脚内面ヨコナデ 壷体部内面ナデ 外面ミガキ 赤彩	やや粗 長石・石英含	良	70%
119	35	23	13	SK35	土師器	広口壷	古墳前期	9.1	10.1	0.95	8.6	12.7	－	10YR8/3浅黄橙	底部ほぼ丸底 体部に黒斑あり。	外面・口縁内面ミガキ 体部内面ナデ 口縁～頸部ヨコナデ+ミガキ	密	良	95%
120	35	23	14	SK35	土師器	小型広口壷	古墳前期	11.0	14.4	3.0	9.7	14.9	－	2.5Y8/3淡黄	外面スス付着 体部に黒斑あり。	口縁～外面ミガキ 底部付近ケズリ 内面ナデ	やや粗 砂混	良	70%
121	35	23	16	SK35	土師器	高坏	古墳前期	－	(7.8)	13.8	3.85	－	－	10YR8/4浅黄橙	脚裾部3方向等間隔円孔	外面ミガキ、内面ハケメ→ナデ	やや粗 長石・石英含	良	40%
122	35	23	16	SK35	土師器	高坏	古墳前期	12.0	(7.8)	－	3.7	－	－	10YR8/4浅黄橙		ミガキ	やや粗 砂混	良	50%
123	35	23	16	SK35	土師器	高坏	古墳前期	－	(4.2)	－	4.5	－	－	2.5Y7/3浅黄、赤彩2.5YR4/4にぶい赤	赤彩	ミガキ	やや粗 長石・石英含	良	20%
124	35	23	13	SK35	土師器	高坏	古墳前期	(19.6)	14.0	13.2	3.5	－	－	10YR8/3浅黄橙、外面一部2.5YR6/6橙		坏部・脚部外面ミガキ 脚内面ナデ	やや粗	良	50%
125	35	23	16	SK35	土師器	高坏	古墳前期	－	(5.8)	19.4	－	－	－	10YR7/2にぶい黄橙	脚裾部4方等間隔円孔(残2方向)	外面ミガキ 内面ハケメ ナデ	やや粗 骨針・長石・石英混	良	20%
126	35	24	13	SK35	土師器	器台	古墳前期	8.8	8.3	10.7	4.1	－	0.8～1.1	7.5YR7/6橙	一部に2次被熱と思われる赤変・スス付着あり 円孔4方向	外面～脚内面下部ミガキ 頸部内面シボリ 脚部内面オサエ・ナデ	やや粗 φ3mm以下砂含 骨針混	良	95%
127	35	24	14	SK35	土師器	器台	古墳前期	10.2	8.2	11.2	3.8	－	－	10YR8/4浅黄橙		ミガキ脚部内面はナデ	やや粗 長石・石英混	良	80%
128	35	24	16	SK35	土師器	器台	古墳前期	10.4	14.0	11.15	3.55	－	－	10YR8/3浅黄橙		内外前面タテミガキ 脚裾内面にハケメ残	密 φ2mm以下粗砂含	良	60%
129	35	24	16	SK35	土師器	器台	古墳前期半	－	(8.75)	13.1	3.8	－	－	10YR8/3浅黄橙、赤彩2.5YR5/6明赤褐	受部内面～外面赤彩、台部裾4方等間隔円孔	受部・脚部外面ミガキ、脚部内面ハケメ・板ナデ	やや粗 砂少し混 長石・石英含	良	60%
130	35	24	16	SK35	土師器	器台	古墳前期半	11.6	(2.45)	－	－	－	－	10YR8/2灰白、赤彩2.5Y5/6明赤褐	内外面赤彩	ミガキ	やや粗 砂少し混 長石・石英含	良	5%
131	35	24	16	SK35	土師器	有鈕蓋	古墳前期	13.9	5.0	－	－	－	3.9	10YR7/3にぶい黄橙		外面ミガキ 内面ヨコナデ、ハケメ	やや粗 骨針あり 砂混	良	30%(鈕100%)
132	35	24	13	試掘IT東から14.9～25.5(SK35)	土師器	筒状蓋	古墳前期	5.4	7.2	－	－	7.75	3.0	7.5YR7/4にぶい橙、赤彩2.5YR4/6赤褐	外面赤彩 凹線文 キザミ有	外面ハケ→ミガキ・赤彩 内面ナデ	密	良	90%
133	36	24	16	SK36	土師器	甕	古墳前期	11.8		－	－	－	－	外10YR5/2灰黄褐色、内10YR7/3にぶい黄橙	「く」の字口縁	ヨコナデ	やや粗 砂混	良	5%未満
134	36	24	16	SK36	土師器	甕	古墳前期	21.0	(3.6)	－	－	－	－	2.5Y7/3浅黄	「く」の字口縁	口縁部ナデ 頸部外面ハケメ	やや粗 砂混	良	5%未満
135	36	24	16	SK36	土師器	壷	古墳前期	11.9	(2.5)	－	－	－	－	外10YR7/4にぶい黄橙、内2.5Y6/3にぶい黄	有段口縁 擬凹線文	ヨコナデ	やや粗	良	5%未満

第2表　遺物観察表（4）土器・土製品

遺物No.	遺構No.	実測図版No.	写真図版No.	出土地点	種別	器種	時代	法量(cm) 口径	器高	底径	頸径	体部最大径	孔径／鈕径	色調	備考	調整	胎土	焼成	残存率(%)
136	36	24	16	SK36	土師器	高坏か器台	古墳前期	－	(4.2)	10.6	－	－	－	5YR6/4にぶい橙	内外面赤彩　円孔・脚部内面にモミ痕あり	外面ミガキ　内面ハケメ→ナデ	密　砂混	良	15%
137	48	24	16	SK48	土師器	甕	古墳	14.1	(3.9)	－	12.8	－	－	10YR7/3にぶい黄橙		ヨコナデ	やや粗　砂少し混	良	5%未満
138	178	24	16	SK178	土師器	壺	古墳前期	17.6	(5.1)	－	15.7	－	－	10YR7/3にぶい黄橙	「く」の字口縁	口縁～体部外面ミガキ、体部内面ナデ	やや粗　砂少し混	良	5%
139	178	24	16	SK178	土師器	甕	古墳前期	15.6	(4.5)	－	12.6	－	－	2.5Y7/3浅黄	「く」の字口縁	口縁ヨコナデ、体部ハケメ	密　砂少し混	良	5%未満
140	178	24	16	SK178	土師器	高坏	古墳前期	－	(9.5)	13.85	4.9	－	－	10YR8/4浅黄橙		外面ミガキ内面ハケメ	密	良	30%
141	178	24	16	SK178	土師器	高坏	古墳前期	13.9	(5.1)	－	－	－	－	胎土10YR8/1灰白～8/4浅黄橙、赤彩2.5YR5/8明赤褐	赤彩	ミガキ	やや粗　骨針含	良	30%
142	178	24	16	SK178	土師器	壺	古墳前期	12.8	(3.2)	－	－	－	－	7.5YR7/4にぶい橙、赤彩2.5YR5/6明赤褐	有段口縁　凹線文　有段下部にキザミ　内外面赤彩	ミガキ	密	良	5%未満
143	178	24	16	SK178	土師器	器台	古墳前期	－	(7.5)	11.5	3.8	－	－	胎土10YR8/2灰白～7/2にぶい黄橙、赤彩10R5/6赤	外面赤彩	ミガキ、内面ナデ	やや粗	良	20%
144	216	24	16	SK216	土師器	甕	古墳前期	14.3	(7.75)	－	12.5	－	－	10YR6/3にぶい黄橙	「く」の字口縁	口唇部オサエ　肩部タタキ　口縁ハケメ　体部内面ナデ　外面ハケメ	やや粗　φ2mm以下の粗砂多く混　長石・石英含	良	15%
145	157	24	17	SX157	土師器	壺	古墳前期	14.4	(5.4)	－	－	－	－	外7.5YR8/4浅黄橙、内10YR7/3にぶい黄橙		ヨコナデ、外面ミガキ	密	良	5%未満
146	157	24	13	F3区 SX157	土師器	高坏	古墳前期	21.2	15.2	12.8	3.75	－	－	5YR5/6明赤褐	円孔2段×3方向	脚内面ハケメ・板ナデ　他はミガキ	やや粗　骨針含　砂混	良	98%
147	157	24	17	SX157	土師器	器台	古墳前期	10.2	(2.5)	－	－	－	－	2.5Y7/3浅黄、赤彩2.5YR4/6赤褐	口唇部に凹線による羽状文　内外面赤彩	ミガキ	密　砂少し混	良	5%未満
148	169	24	17	SD169	古代土師器	甕	古代	21.9	(4.85)	－	20.2	－	－	外10YR6/3にぶい黄橙、内7.5YR7/4にぶい橙		回転ナデ	やや粗　砂混	良	5%未満
149	257	24	17	SK257	土師器	甕	古墳	16.2	(3.4)	－	－	－	－	10YR7/4にぶい黄橙		回転ナデ	やや粗	良	5%未満
150	192	24	16	SK192	土師器	ミニチュア	古墳前期	－	(3.5)	4.05	－	－	－	外2.5Y6/2灰黄、内10YR7/3にぶい黄橙		外面ハケメ　内面ナデ	やや粗　長石・石英含	良	30%
151	14	24	17	SD14	珠洲	鉢	中世	25.0	(9.05)	－	－	－	－	2.5Y6/1黄灰		内外回転ナデ	密　骨針含　砂混	良	5%
152	94	24	17	SD94	中世土師器	皿	中世	6.4	0.75	－	－	－	－	2.5Y7/3浅黄	非ロクロ	ナデ	密	良	20%
153	94	24	17	SD94	中世土師器	皿	中世	9.2	1.6	3.2	－	－	－	10YR7/3にぶい黄橙～5/2灰黄褐	非ロクロ	ナデ	密	良	20%
154	94	24	17	SD94	中世土師器	皿	中世	8.0	1.65	1.8	－	－	－	2.5Y7/2灰黄	非ロクロ	ナデ	やや粗	良(硬い)	25%
155	94	24	17	SD94	中世土師器	皿	中世	7.2	1.5	－	－	－	－	外2.5Y8/2灰白、内2.5Y7/3浅黄	非ロクロ	ナデ	密	良	5%
156	94	24	17	SD94	中世土師器	皿	中世	8.7	(2.0)	－	－	－	－	2.5Y7/3浅黄	非ロクロ	ナデ	密	良	10%
157	201	24	17	SX201	中世土師器	皿	中世	8.4	(1.65)	－	－	－	－	7.5YR7/4にぶい橙～2.5Y7/2灰黄	非ロクロ	ナデ	密	良	25%
158	192	24	17	SK192	珠洲	甕	中世	－	(7.6)	17.2	－	－	－	2.5Y6/2黄灰		回転ナデ　平行タタキ	粗　φ3mmの小礫あり	良	5%未満
159	170	24	17	SD170	中世土師器	皿(灯明皿)	中世	10.0	(2.65)	－	－	－	－	10YR7/3にぶい黄橙	非ロクロ	ナデ	密	良	5%未満
160	170	24	17	SD170	瀬戸	碗	近世	12.0	(4.45)	－	－	－	－	2.5Y6/1黄灰、釉5Y5/4オリーブ		回転ナデ	密	良	5%未満
161	300	24	17	C3区	土師器	高坏か	古墳前期	－	(6.25)	－	5.2	－	－	2.5Y5/8明赤褐	身下部に粘土紐を貼り巡らす。孔無し。	ミガキ	やや粗　骨針含　長石・石英含	良	10%
162	300	24	17	SK35(試掘時)	土師器	有鈕蓋	古墳前期	(17.0)	7.65	－	－	－	6.0	10YR8/3浅黄橙		ミガキ	やや粗　砂少し混	良	50%
163	300	24	17	Ⅱ層	須恵器	坏B	古代	－	(4.8)	12.1	－	－	－	5Y6/1灰	体部外面上部に沈線を2条施す。	回転ナデ	密	良	5%(底)
164	300	24	17	Ⅱ層⑮	中世土師器	皿	中世	11.2	(2.6)	－	－	－	－	10YR7/4にぶい黄橙	非ロクロ	外面マメツ　内面ナデ	やや粗	良	10%
165	300	24	17	D3区　Ⅱ層	中世土師器	皿	中世	8.0	(1.85)	－	－	－	－	10YR8/2灰白	非ロクロ	ナデ	密	良	20%
166	300	24	17	Ⅱ層	中世土師器	皿(灯明皿)	中世	8.0	(1.6)	－	－	－	－	10YR7/3にぶい黄橙	非ロクロ	ナデ　オサエ	密	良	20%
167	300	24	17	C5区 Ⅱ層	中世土師器	皿	中世	7.9	1.6	－	－	－	－	2.5Y8/2灰白	非ロクロ	ナデ	密	良	10%
168	300	24	17	C4～5区 Ⅱ層	中世土師器	皿(灯明皿)	中世	8.0	1.7	－	－	－	－	10YR7/3にぶい黄橙	非ロクロ	ナデ	やや粗	良	20%
169	300	24	17	Ⅱ層	珠洲	鉢	中世	52.0		－	－	－	－	2.5Y5/1黄灰	吉岡編年Ⅰ期	回転ナデ	粗	やや不良	5%
170	300	24	17	C5区 Ⅱ層	珠洲	擂鉢	中世	48.0	(4)	－	－	－	－		口縁端部が肥厚　卸目あり。	回転ナデ	密	不良	10%
171	300	24	17	B3区　Ⅱ層	珠洲	擂鉢	中世	－	(4.6)	12.3	－	－	－	N5/1灰	底部回転糸切り	回転ナデ	やや粗　骨針含	良	5%未満
172	300	24	17	Ⅱ層	珠洲	甕	中世	57.5	(4.45)	－	－	－	－	7.5Y4/1灰		ヨコナデ	粗	良	5%未満
173	300	24	17	Ⅱ層	中国製青磁	碗	中世	14.8	(4.5)	－	－	－	－	2.5Y6/1黄灰、釉5Y4/4暗オリーブ	蓮弁文　大宰府編年椀Ⅱ類(13世紀初頭～前半の標識土器)　釉の発色良	回転ナデ	密	良	5%
174	300	25	17	C5区　Ⅱ層	土製品	土錘		長さ 5.7	幅 3.8	－	－	－	孔径 1.6	10YR8/2灰白					
175	400	25	17	2区　排土	土製品	土玉		長さ 2.5	幅 3.1	－	－	－	孔径 0.4	10YR7/4にぶい黄橙					

＊300:Ⅱ層、400:排土

第2表　遺物観察表(5)

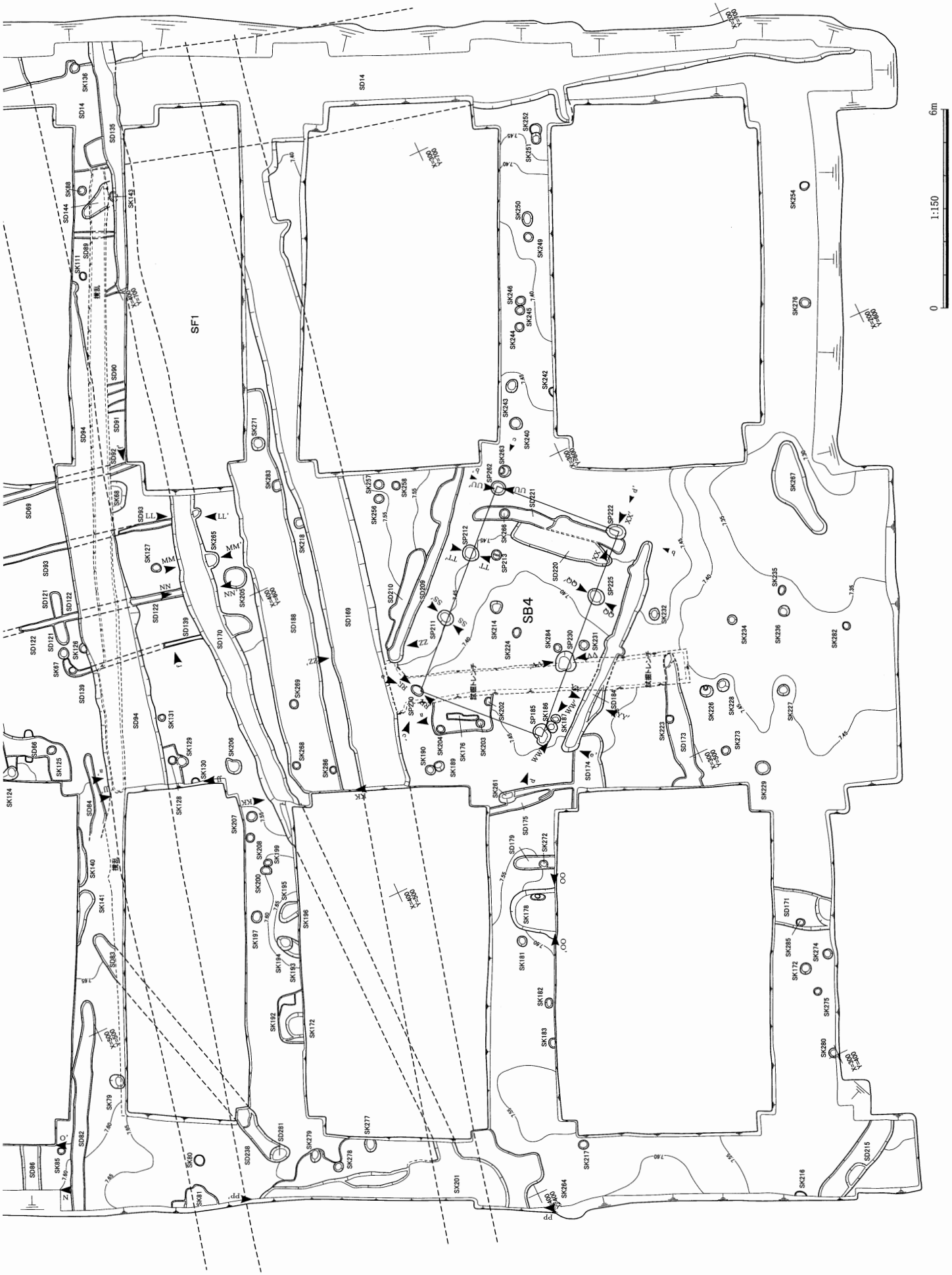
石製品

遺物No.	遺構No.	実測図版No.	写真図版No.	出土地点	種別	時代	法量				材質	備考
							長さ	幅	厚さ	重さ(g)		
176	1	25	10	E5区 SD01 X25Y25 黒色層	磨製石斧	縄文中期以降	6.7	4.6	2.2	104	蛇紋岩	定角式　両側面に叩打痕
177	1	25	10	F4区 SD01 排水溝	打製石斧		18.8	9.5	3.1	813		両側縁つぶし
178	1	25	10	SD01	石皿		17	11.9	4.3	1287		台石兼用、裏面砥石
179	55	25	17	F3区 SD55	剥片		3.6	4.3	1.1	17	玉髄質泥岩 (横山真脇石か)	
180	55	25	17	F3区 SD55	石核		4.3	4.2	4.3	66	鉄石英	
181	55	25	17	F3区 SD55	打製石斧		7.5	8.5	2.8	221		刃部上擦痕
182	94	25	17	D3区 SD94	剥片		2.4	4.8	0.9	10	緑色凝灰岩	
183	169	25	17	C5区 SD169	砥石		8.1	6.1	3.5	221		砥面4面
184	35	25	17	F4区 SK35	剥片		2.5	4	1	8	非晶質安山岩	
185	178	25	17	D2区 SK178	二次加工剥片		2.5	3.3	1.1	9	黒曜石	
186	201	25	17	SX201	水輪(五輪塔)	中世	18.7	18.7	13.8	7000		
187	300	25	17	D3区 Ⅱ層	垂飾か	縄文中期 中葉	4.4	3.3	1.4	18		下部欠損 穿孔2箇所 三叉文
188	300	25	17	D3区 Ⅱ層	石鏃	弥生	3.7	1.6	0.5	2	非晶質安山岩	
189	300	25	10	F4区 Ⅱ層	打製石斧		10	6.4	1.8	121		両側縁つぶれ

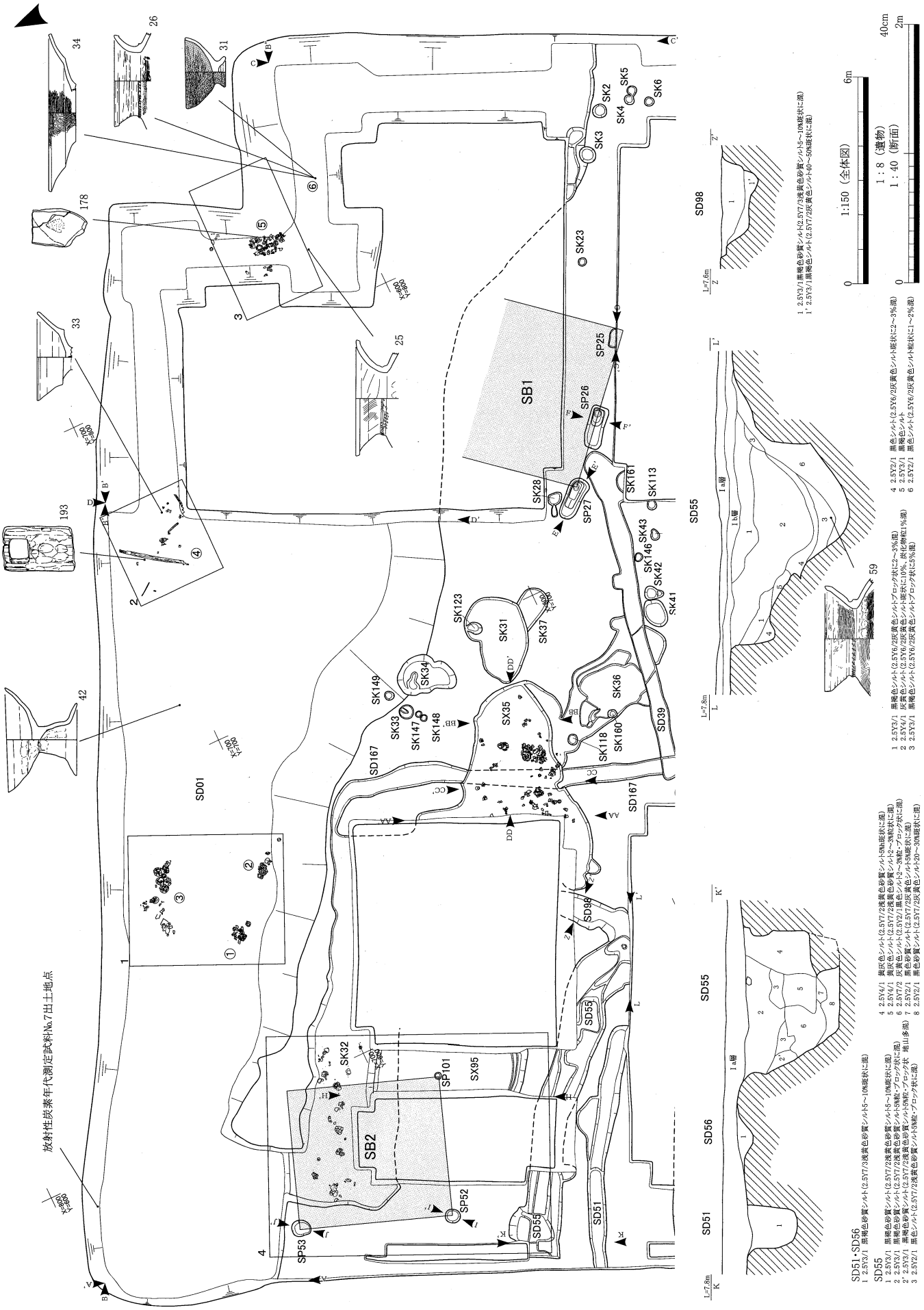
木製品

報告書No.	遺構No.	実測図版No.	写真図版No.	出土地点	種別	時代	法量			樹種	保存処理	自然科学分析		備考
							長さ	幅	厚さ					
190	1	26	18	SD01	角材		44.3	5.2	4.0	スギ	○	AMS No.5	樹種同定③	一部炭化
191	1	26	18	SD01	部材		89.5	5.3	2.8	スギ	○		樹種同定④	穿孔2箇所
192	1	26	18	SD01	部材		188	12.0	4.8	スギ	○		樹種同定11	出土状況図あり
193	1	26	18	SD01	部材		20.2	11.6	8.1	スギ	○	AMS No.4	樹種同定2	穿孔1箇所
194	1	26	18	F5区 SD01 X27Y21	角材		21.3	8.7	5.0	スギ	○		樹種同定5	
195	1	26	18	F6区 SD01 X27Y25	板材		(46.3)	5.0	0.55	スギ	○		樹種同定3	
196	1	26	18	F6区 SD01 X27Y25	板材		(15.9)	6.2	0.5	スギ	○		樹種同定4	
197	1	26	18	SD01 X25Y25	板材		(30.6)	3.1	0.7	スギ	○		樹種同定7	
198	1	26	18	SD01 X25Y25	板材		(27.0)	3.7	0.55	スギ	○		樹種同定6	
199	1	26	18	SD01 X25Y25	板材	平安時代	(17.85)	5.8	0.75	スギ	○	AMS No.6	樹種同定8	
200	15	26	18	SB3-SP15	柱	古墳時代前期	20.2	14.0	14.0	スギ	○	AMS No.3	樹種同定9	
201	26	26	18	SB1-SP26	柱		47.9	17.6	17.6	スギ	○		樹種同定10	
202	27	26	18	SB1-SP27	柱		46.4	16.8	16.8	スギ	○	AMS No.1	樹種同定1	
203	52	26	18	SB2-SP52	柱	古墳時代前期	24.5	8.6	3.7	スギ	○	AMS No.2	樹種同定②	
204	53	26	18	SB2-SP53	柱		32.5	12.7	5.9	スギ	○		樹種同定①	

SB1
SB2
SB3
SD01
SX35
SX95
SX96
SX157
SI61
SI107
SD51
SD55
SD98
SD102
SD114
SD108
SD109
SD105
SD106
SD158
SD164
SD168
SD167
SD116
SD137
SD138
SD70
SD69
SD93
SD65
SD99
SD120
SD72
SD71
SD19
SD21
SD94
SD110
SK32
SK31
SK34
SK33
SK147
SK148
SK149
SK123
SK37
SK118
SK36
SK160
SK161
SK113
SK43
SK146
SK42
SK41
SK47
SK50
SK45
SK46
SK57
SK58
SK77
SK145
SK48
SK59
SK73
SK142
SK60
SK75
SK97
SK63
SK62
SK133
SK115
SK162
SK166
SK165
SK132
SK10
SK9
SK8
SK7
SK6
SK5
SK4
SK3
SK2
SK23
SK28
SP101
SP52
SP53
SP25
SP26
SP27
SP15
SP163
SP134
SP151
SP152
SP155
SP117
SP153
SP156
SP8
SP9
SP10
X=700 Y=600
X=500 Y=600
X=400 Y=600
X=900 Y=600
X=700 Y=700

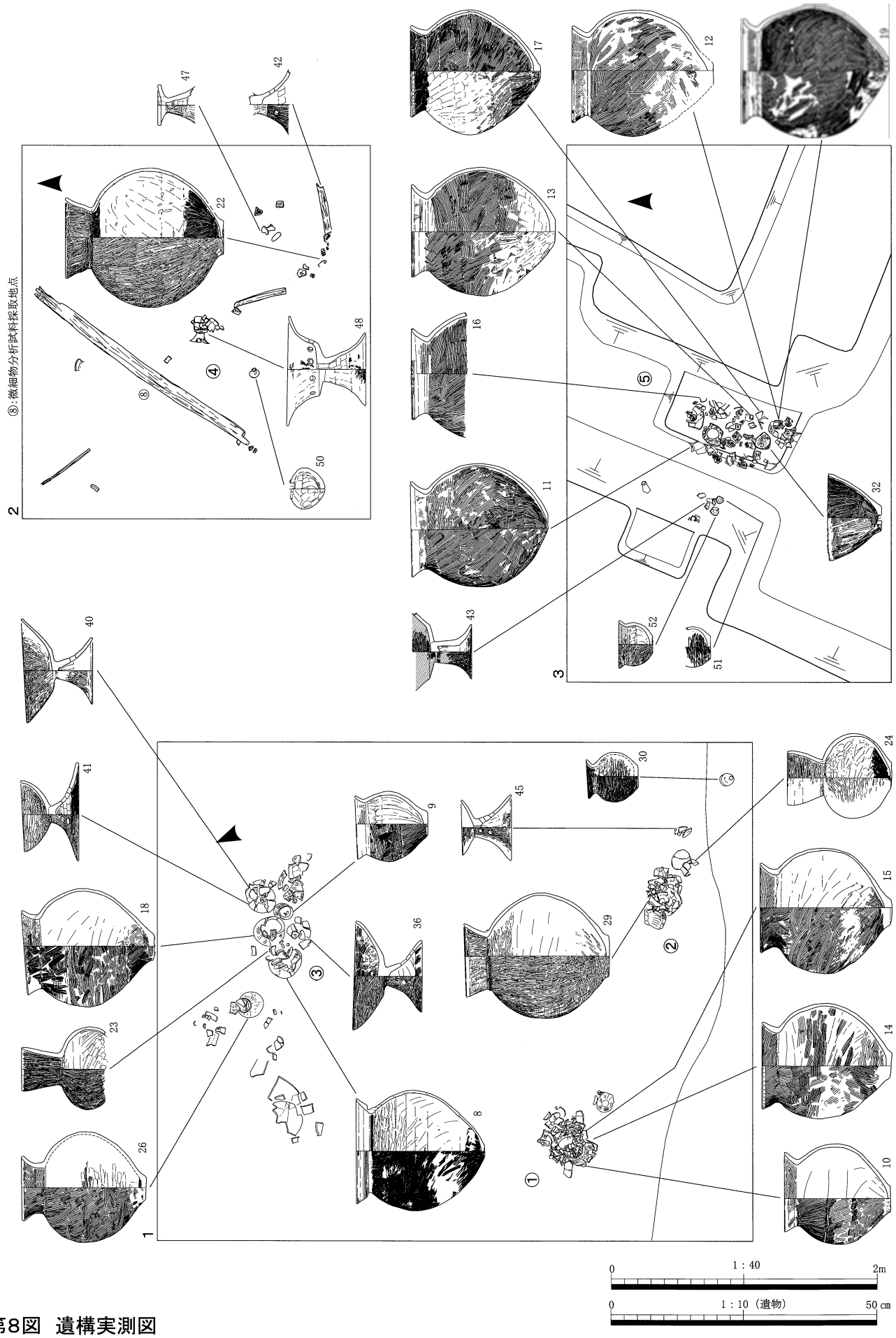


第6図　遺構全体図

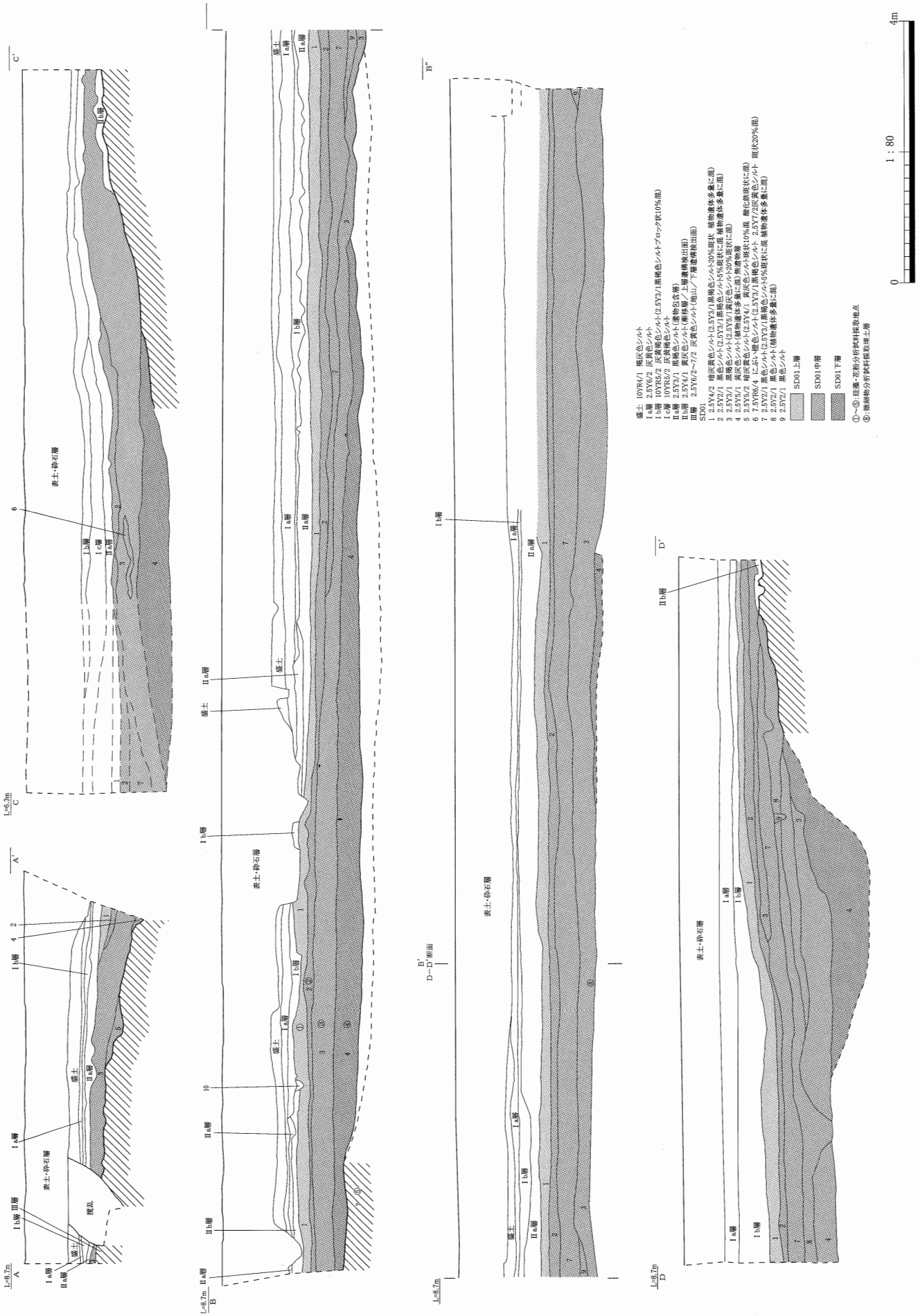


第7図　遺構実測図

SD01　SD51・SD55・SD56　SD98　SX95　SB1　SB2

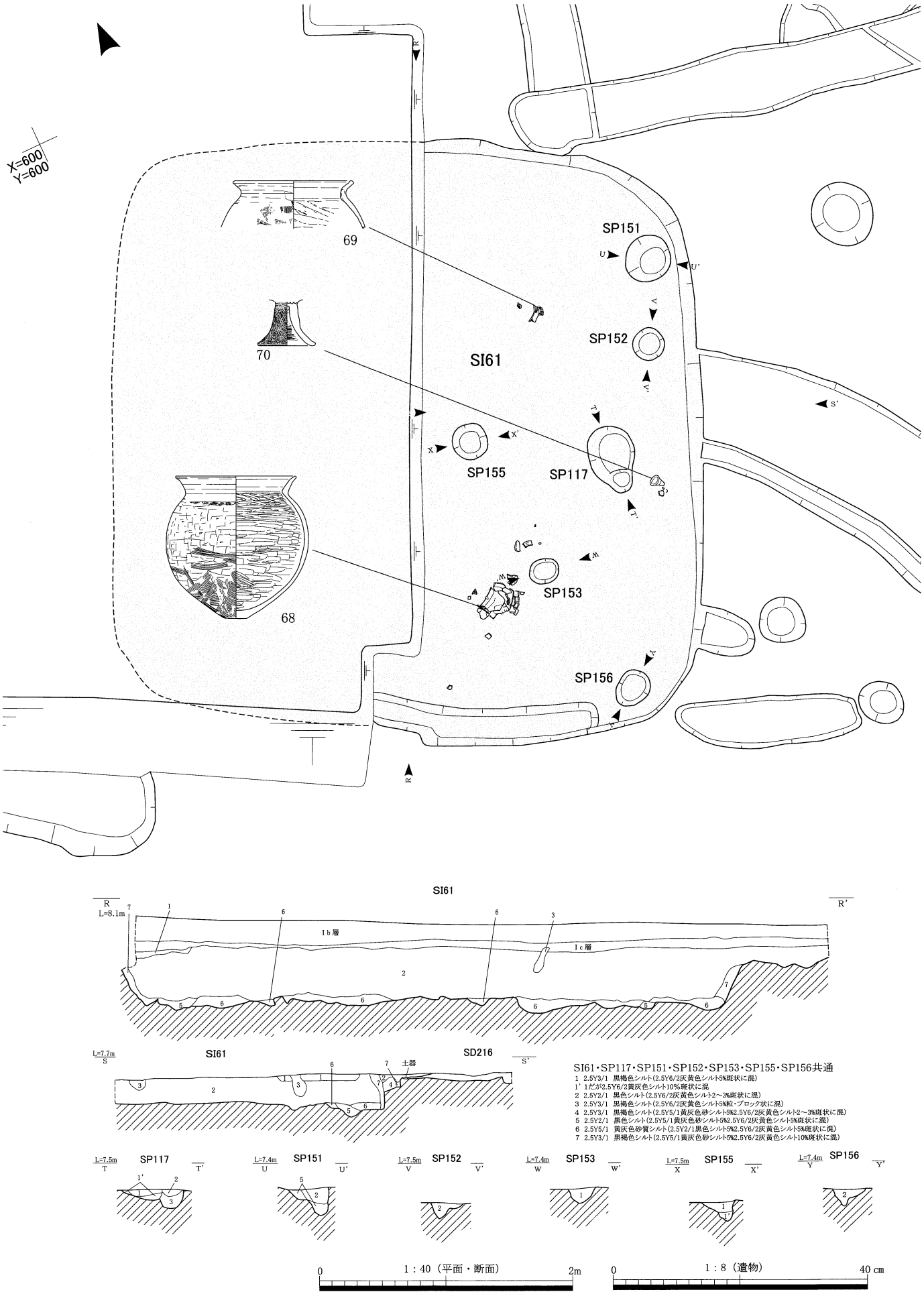


第8図　遺構実測図
SD01



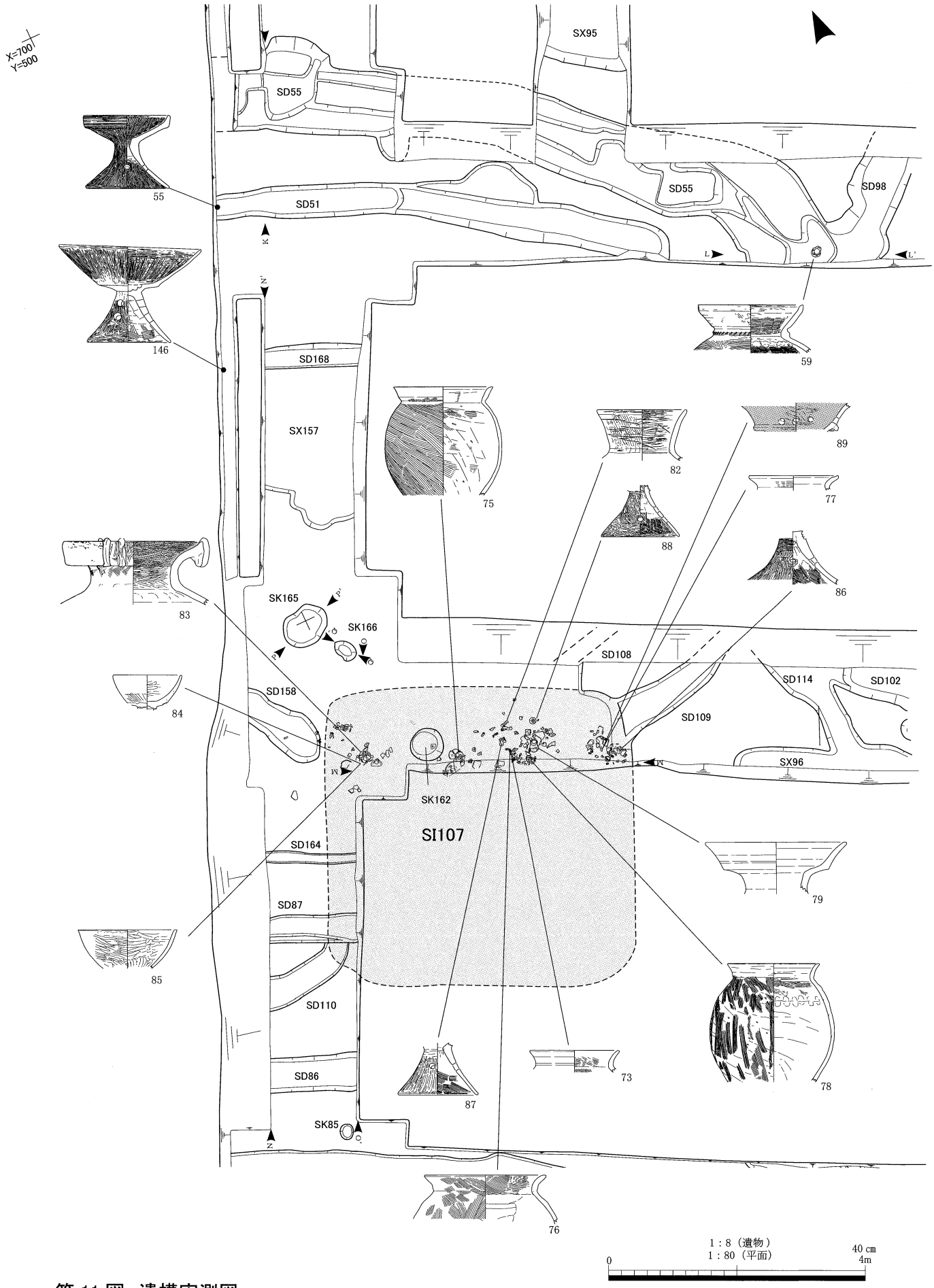
第9図　遺構実測図

SD01



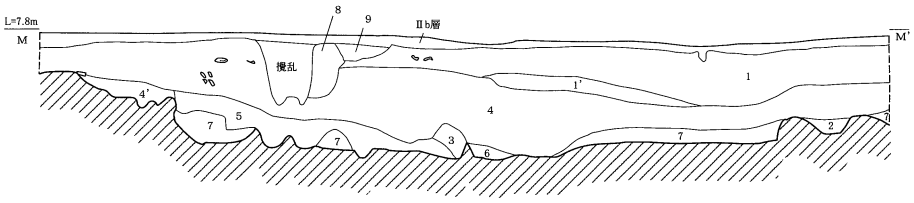
第 10 図　遺構実測図

SI61　SP117　SP151　SP152　SP153　SP155　SP156

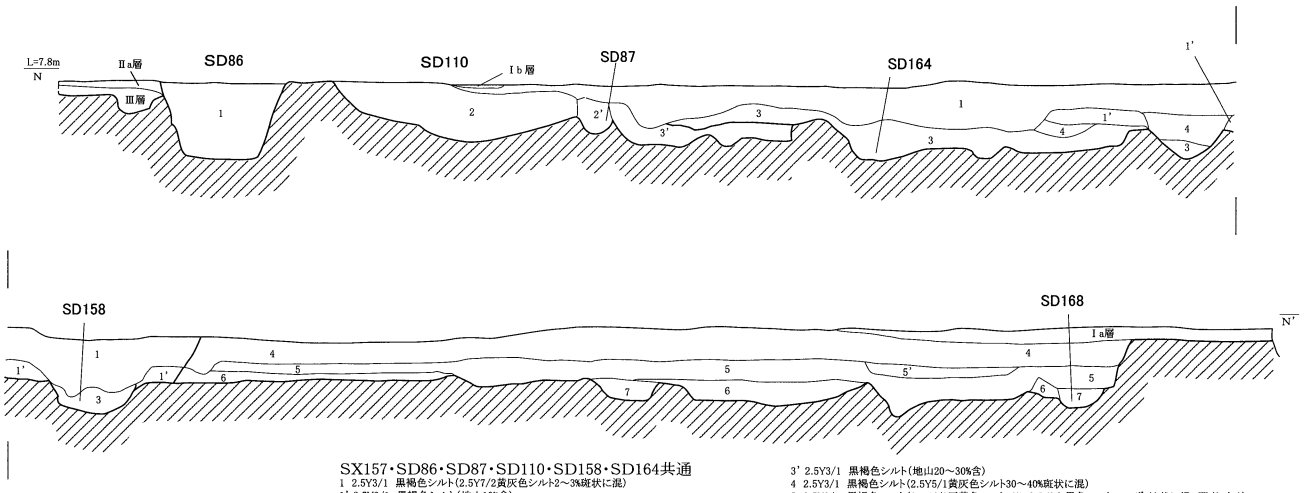


第 11 図　遺構実測図

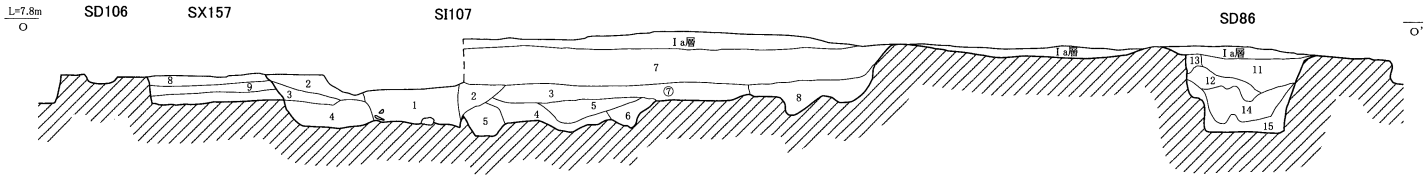
SI107　SD51　SD55　SD56　SD86　SD87　SD110　SD158　SD164　SD168　SK165　SK166　SX157



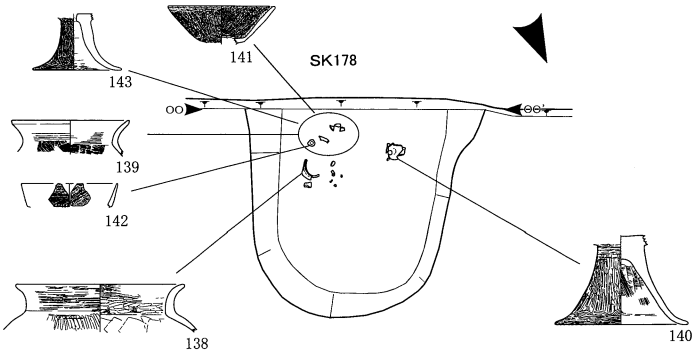
SI107
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト
1' 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y5/1シルト10%斑状に混)
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y5/1黄灰色シルト、2.5Y7/2灰黄色シルト10%ブロック状に混)
3 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2灰黄色シルト40%マーブル状に混)
4 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2黄灰色シルト2～3%斑状に混)
4' 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2黄灰色シルト2～3%斑状に混 地山多含)
5 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2黄灰色シルトブロック状10%混
6 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト30%、2.5Y7/2灰黄色シルト5%粒・ブロック状に混)
7 2.5Y5/1 黄灰色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト10%斑状、2.5Y7/2灰黄色シルト10%ブロック状に混)
8 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y5/1黄灰色シルト、2.5Y7/2灰黄色シルト10%ブロック状に混)
9 2.5Y5/1 黄灰色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト多混)

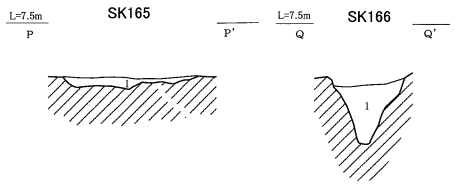


SX157・SD86・SD87・SD110・SD158・SD164共通
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2黄灰色シルト2～3%斑状に混)
1' 2.5Y3/1 黒褐色シルト(地山10%含)
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y5/1黄灰色シルト、2.5Y7/2灰黄色シルト10%ブロック状に混)
2' 2.5Y3/1 黒褐色シルト(地山10%含)
3 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2灰黄色シルト40%マーブル状に混)
3' 2.5Y3/1 黒褐色シルト(地山20～30%含)
4 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y5/1黄灰色シルト30～40%斑状に混)
5 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2灰黄色シルト10%、2.5Y2/1黒色シルト5%モザイク状に混、固くしまる)
5' 5だが2.5Y7/2灰黄色シルト25%混
6 2.5Y7/2灰黄色シルト(2.5Y2/1黒色シルト20%、2.5Y3/1黒褐色シルト5%モザイク状に混、固くしまる)
7 2.5Y5/1黄灰色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト10%斑状に混)

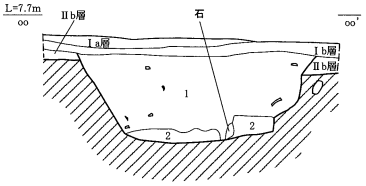


SI107
1 2.5Y2/1 黒色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト粒状1～2%混)
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト2～3%斑状に混)
3 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト30%2.5Y7/2灰黄色シルト5%粒・ブロック状に混)
4 2.5Y5/1 黄灰色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト10%斑状2.5Y6/2灰黄色シルト10%ブロック状に混)
5 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト5%斑状に混)
6 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト2～3%斑状に混)
7 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト斑状7～8%混)
⑦:珪藻・花粉分析試料採取地点
SX157
8 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y5/1黄灰色シルト30～40%斑状に混)
9 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2灰黄色シルト10%、2.5Y2/1黒色シルト5%モザイク状に混、固くしまる)
10 2.5Y7/2灰黄色シルト(2.5Y2/1黒色シルト20%、2.5Y3/1黒褐色シルト5%モザイク状に混、固くしまる)
SD86
11 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2黄灰色シルト2～3%斑状に混)
12 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト10%斑状に混)
13 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト20～30%斑状に混)
14 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト10%粒・ブロック状に混)
15 2.5Y2/1 黒色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト30～40%マーブル状に混)





SK165・166共通
1 10YR2/1 黒色シルト(2.5Y7/2灰黄色シルト粒・ブロック状5%混)

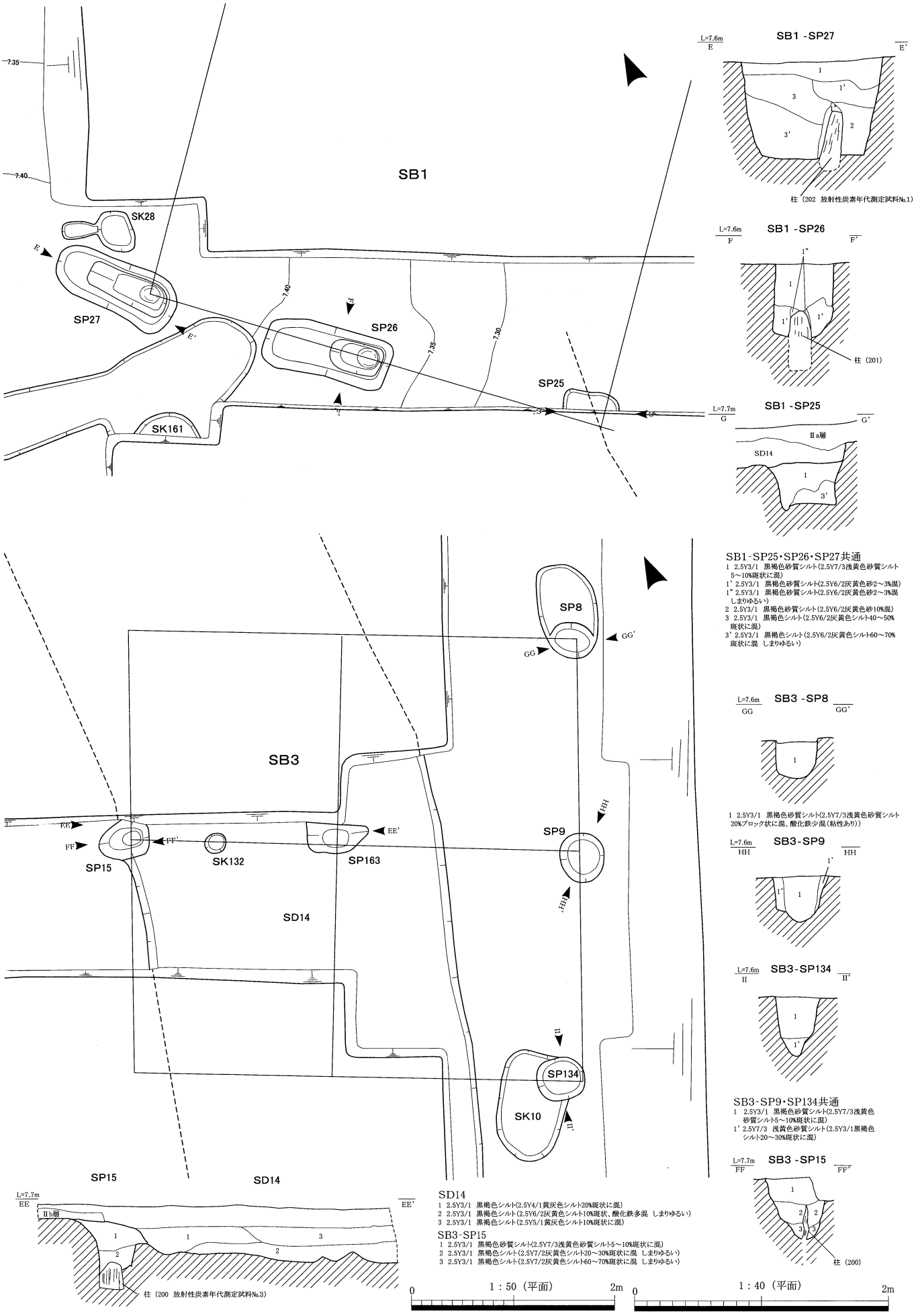


1.2.5Y3/1黒褐色砂質シルト(2.5Y7/3浅黄色砂質シルト5～10%斑状に混)
2.2.5Y3/1黒褐色シルト(2.5Y5/1黄灰色シルト20%斑状に混)

1：8（遺物）
1：40（平面・断面）
0 2m 40 cm

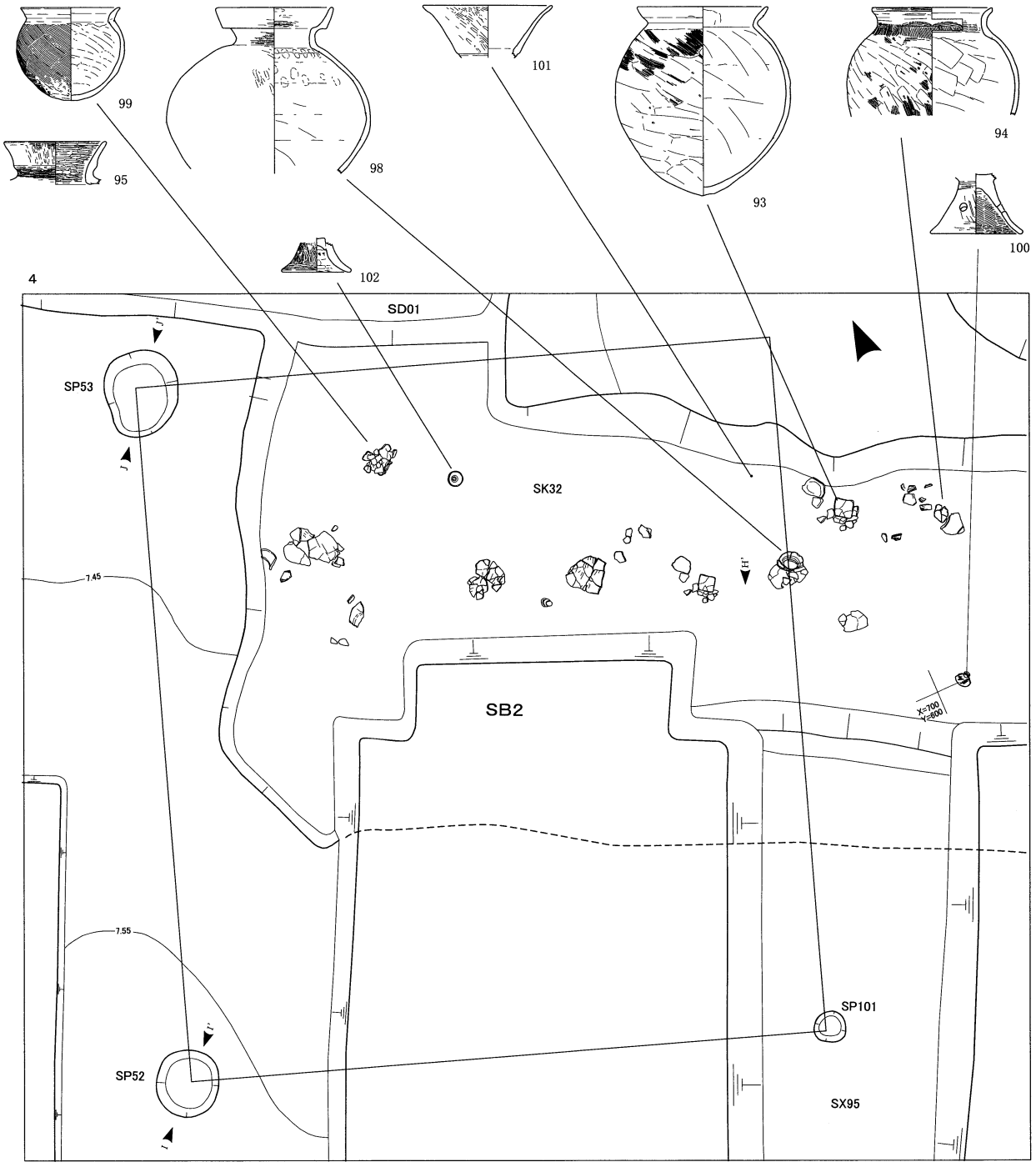
第12図 遺構実測図

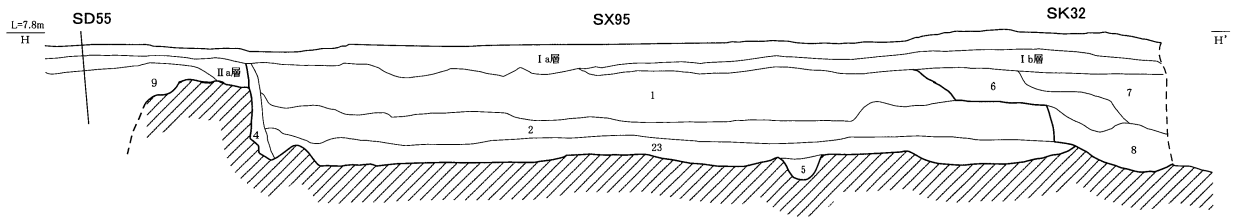
SI107 SD86・SD110・SD87・SD164・SX157・SD158・SD168 SX157・SI107・SD86 SK165 SK166 SK178

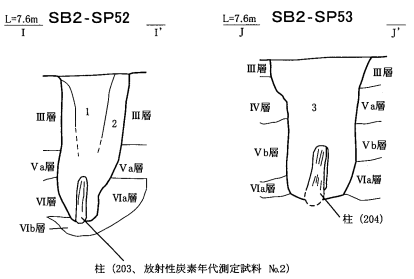


第 13 図　遺構実測図

SB1 -SP25・SP26・SP27　SB3 -SP8・SP9・SP15・SP134　SP15・SD14







SB2-SP52・SP53共通
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y6/2灰黄色シルト2～3%粒状に混)
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト10%斑状に混)
3 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y4/2灰黄褐色シルト30%混)
Ⅲ層 2.5Y7/2 灰黄色シルト
Ⅳ層 2.5Y7/1 灰白色粗砂(2.5Y3/1黒褐色シルト5%斑状に混)
Ⅴa層 2.5Y7/1 灰白色砂シルト(2.5Y7/1灰白色細砂5%混)
Ⅴb層 2.5Y7/1 灰白色砂シルト
Ⅵa層 2.5Y7/1 灰白色砂
Ⅵb層 2.5Y7/1 灰白色粗砂(2.5Y7/3浅黄色粗砂30%混)

SX95
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2灰黄色シルト5%粒・ブロック状に混 固くしまる)
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト30%2.5Y7/2灰黄色シルト10%モザイク状に混 固くしまる)
3 2.5Y7/2 灰黄色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト30%2.5Y3/1黒褐色シルト20%モザイク状に混 固くしまる)
4 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2 灰黄色シルト5%斑状に混)
5 2.5Y4/1 黄灰色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト10%斑状に混)

SK32
6 2.5Y4/1 黄灰色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト2～3%斑状に混)
7 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト10%斑状2.5Y7/2灰黄色シルト2～3%斑状に混)
8 2.5Y4/1 黄灰色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト20%斑状に混)

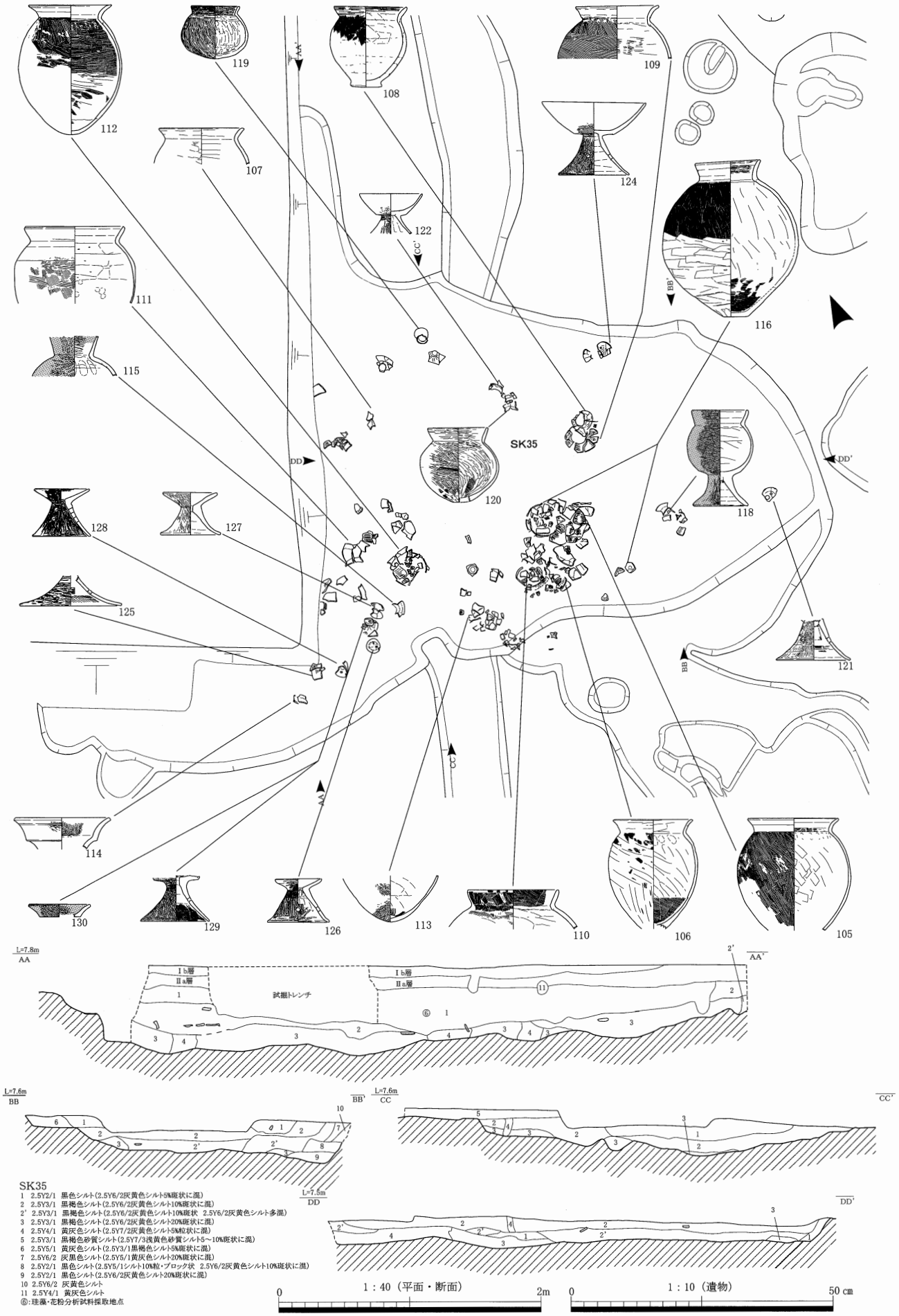
SD55
9 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y7/2灰黄色シルト5%粒・ブロック状に混)

0 1：8（遺物） 40cm

0 1：40（平面・断面） 2m

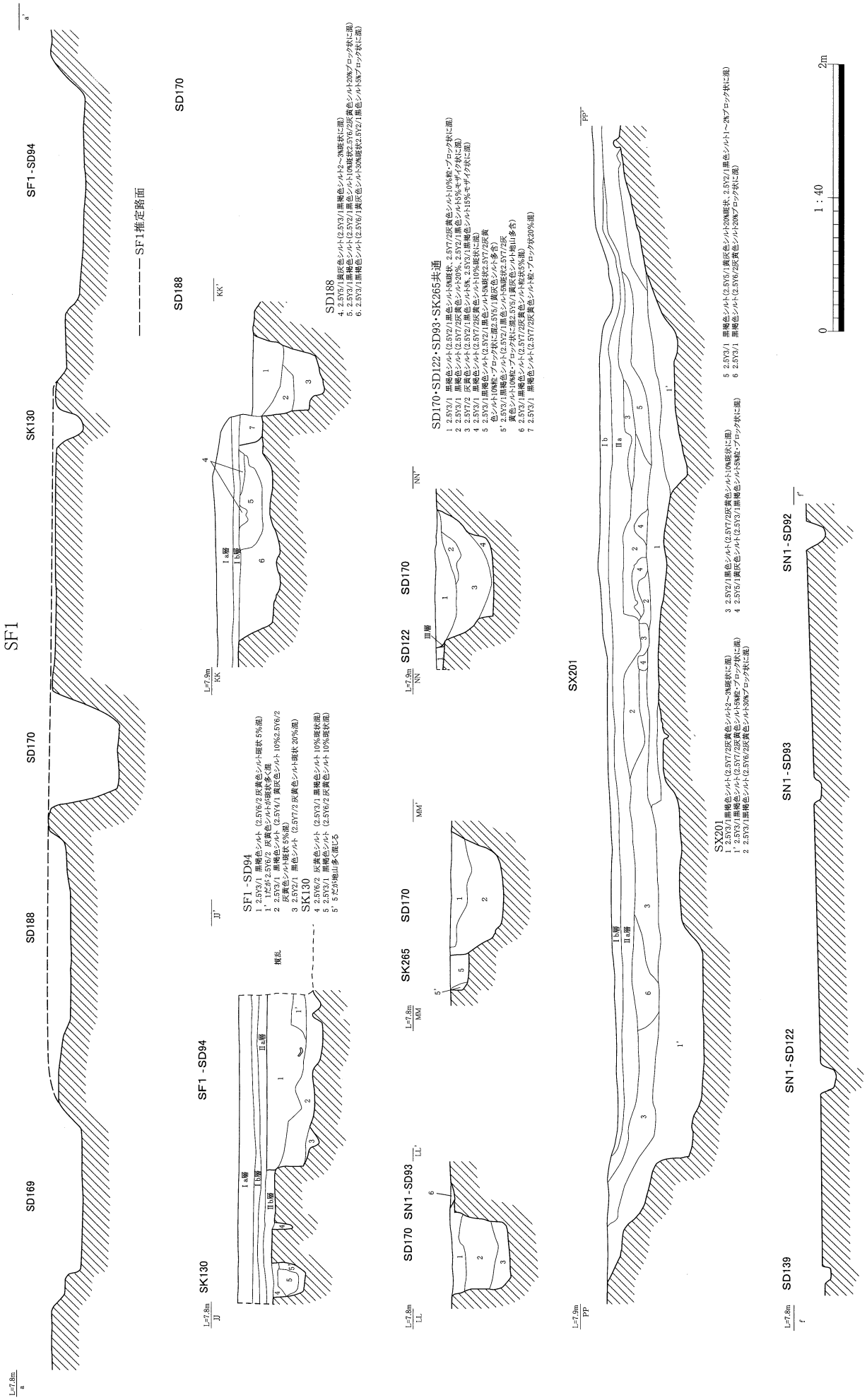
第 14 図 遺構実測図

SB2-SP52・53 SK32・SX95



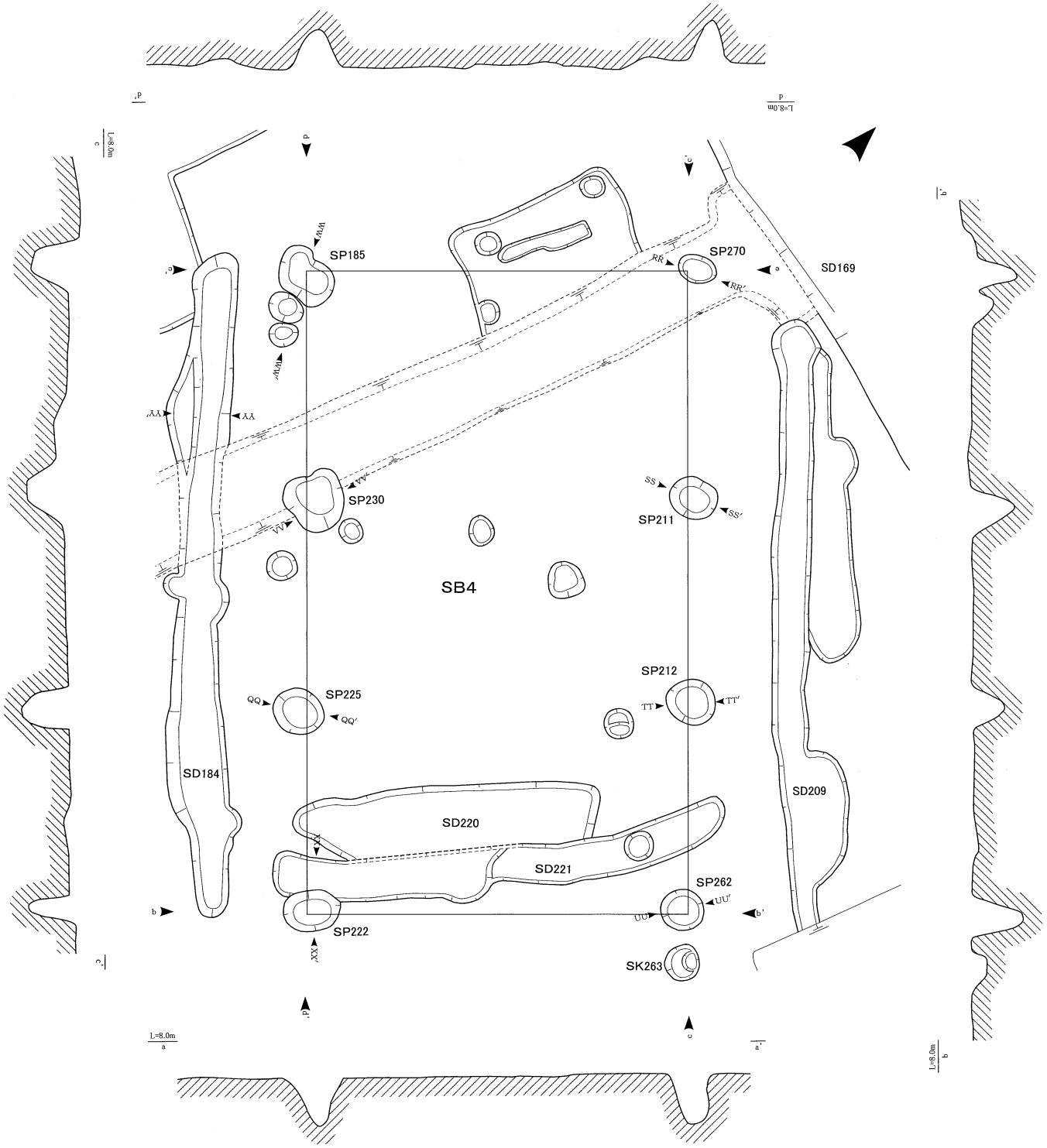
第 15 図　遺構実測図

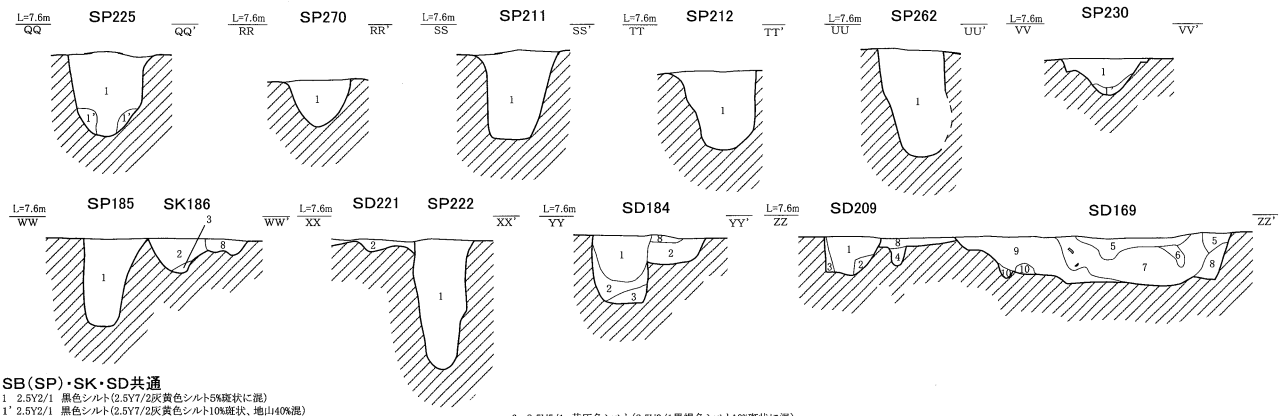
SK35



第 16 図　遺構実測図

SF1 -SD169・SD94　SD94・SK130　SD170・SD188　SD170　SD93・SD170　SD170・SK265
SD122・SD170　SX201　SN1 -SD91・SD92・SD93・SD122・SD139





SB(SP)・SK・SD共通

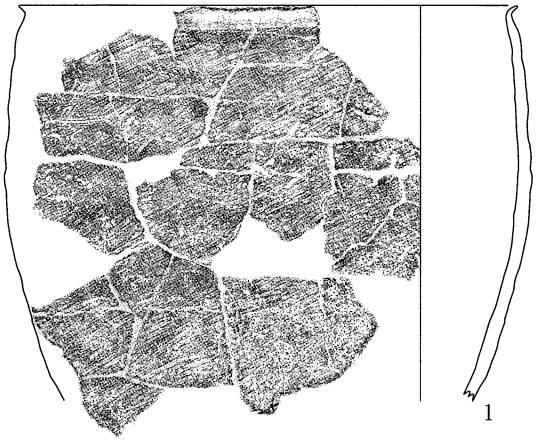
1 2.5Y2/1 黒色シルト(2.5Y7/2灰黄色シルト5%斑状に混)
1' 2.5Y2/1 黒色シルト(2.5Y7/2灰黄色シルト10%斑状、地山40%混)
2 2.5Y2/1 黒色シルト(2.5Y7/2灰黄シルト10%斑状に混)
3 2.5Y2/1 黒色シルト(2.5Y7/2灰黄シルト20%斑状に混)
4 2.5Y5/1 黄灰色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト30%, 2.5Y7/2灰黄色シルト5%粒・ブロック状に混)
5 2.5Y5/1 黄灰色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト5%, 2.5Y6/2灰黄色シルト2～3%斑状に混)
6 2.5Y5/1 黄灰色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト10%斑状に混)
7 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト(2.5Y7/3浅黄色砂質シルト5～10%斑状に混)
8 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y5/1黄灰色シルト10%斑状に混)
9 2.5Y3/1 黒褐色シルト(2.5Y2/1黒色シルト10%斑状, 2.5Y6/2灰黄色シルト20%ブロック状に混)
10 2.5Y5/1 黄灰色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト10～20%斑状に混)

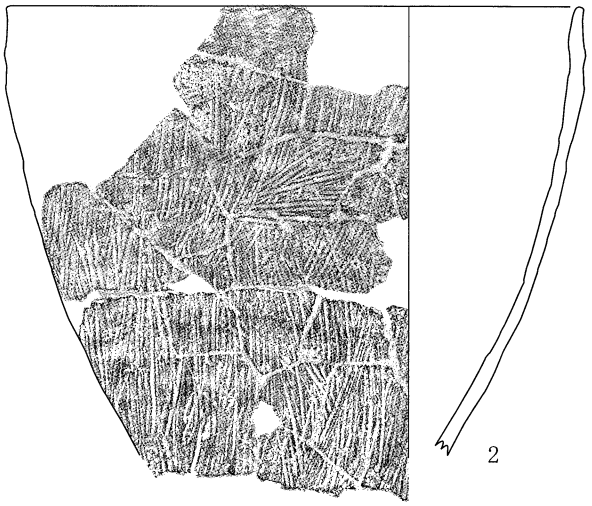
第17図 遺構実測図

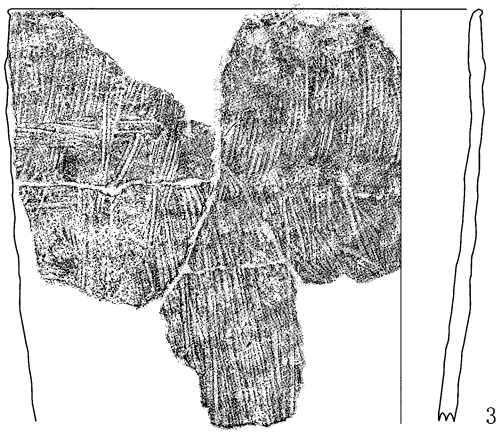
0 1:60（平面） 3m　0 1:40（断面） 2m

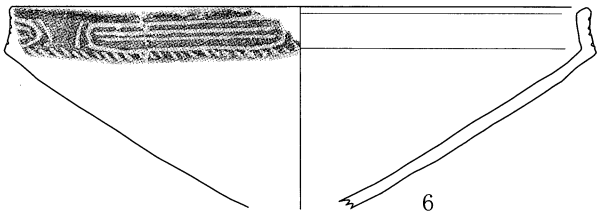
SB4 -SP211 SP212 SP225 SP230 SP262 SP270 SP185・SK186 SP222・SD221 SD184 SD169・SD209

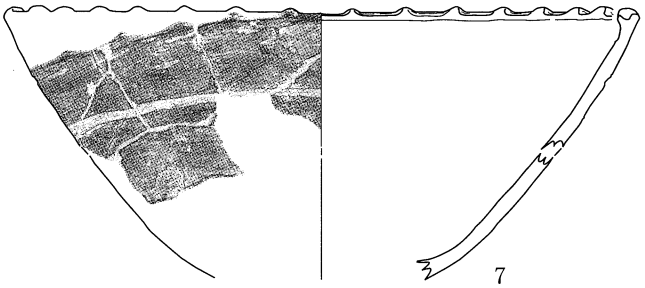
SD01

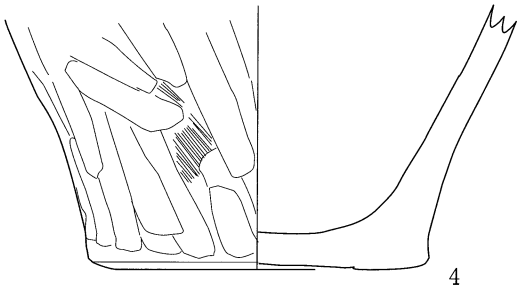


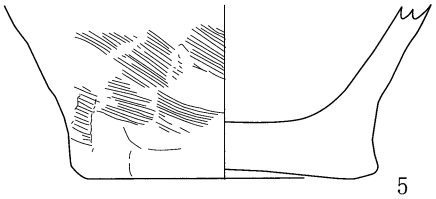


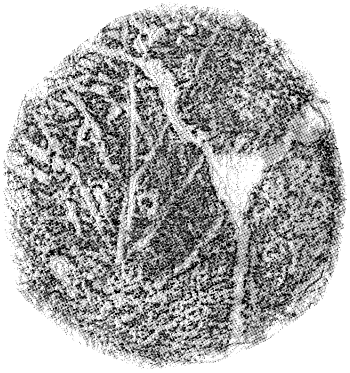


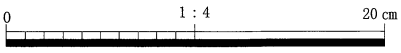






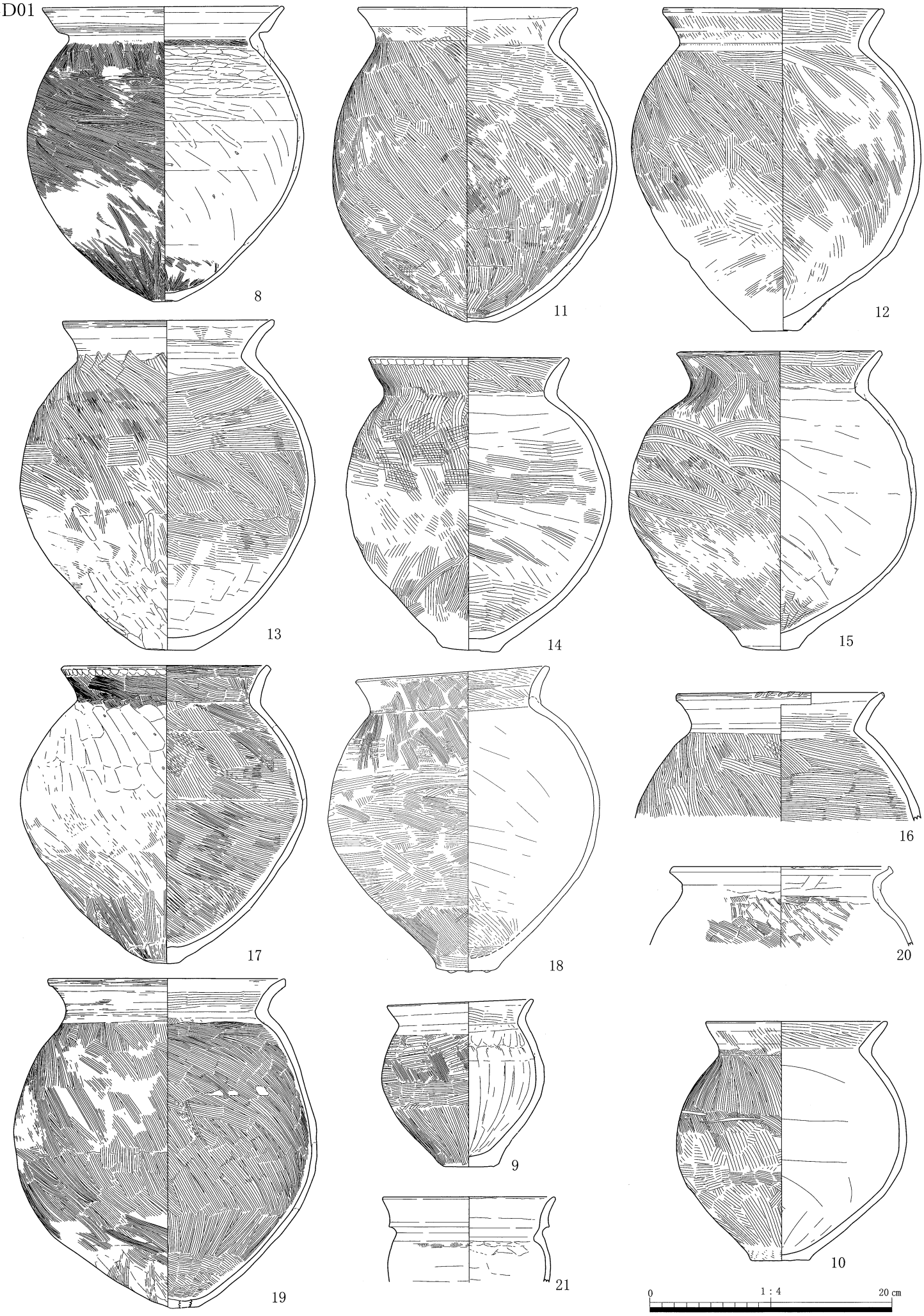




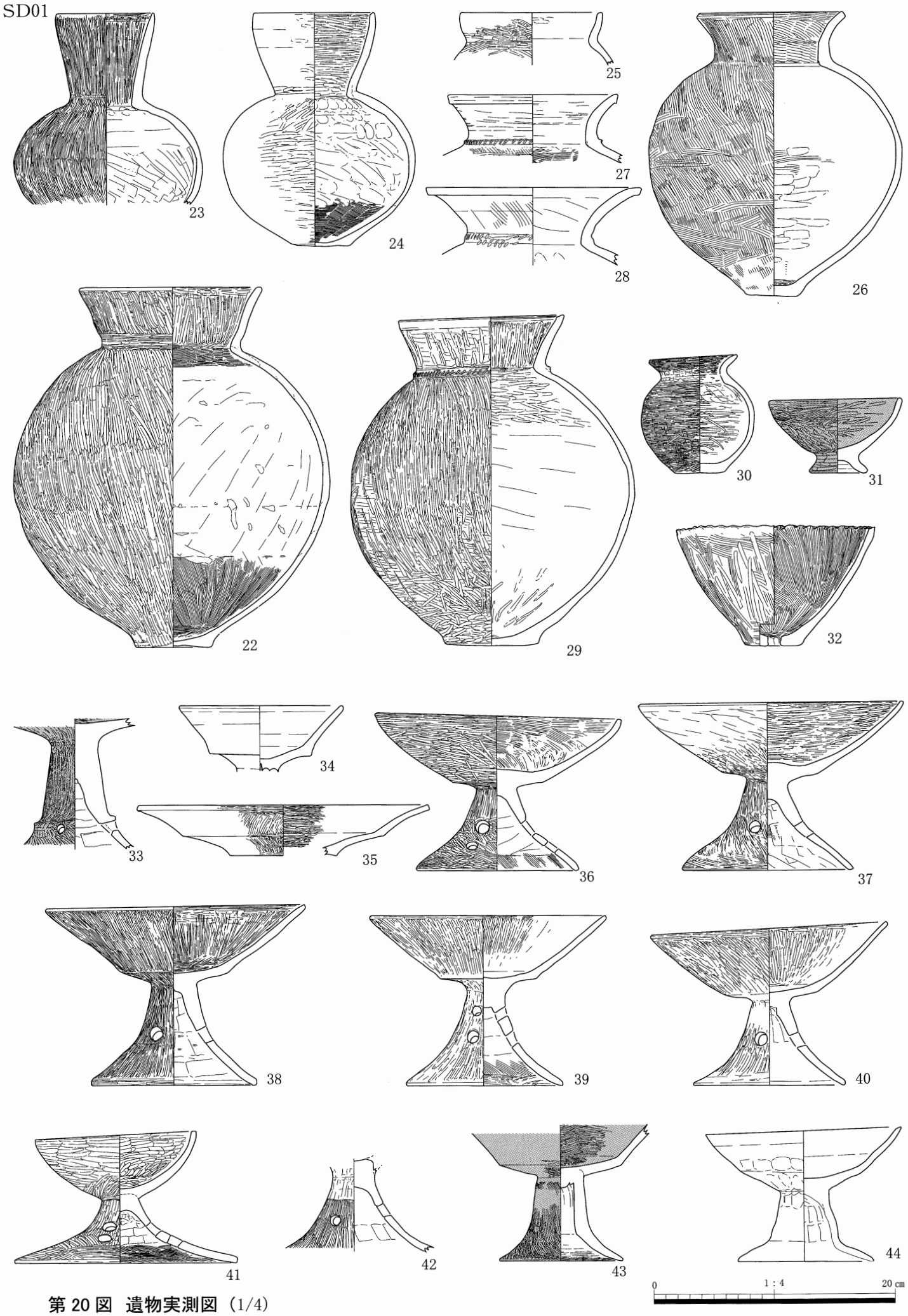


第 18 図　遺物実測図（1/4）
SD01(1～7)

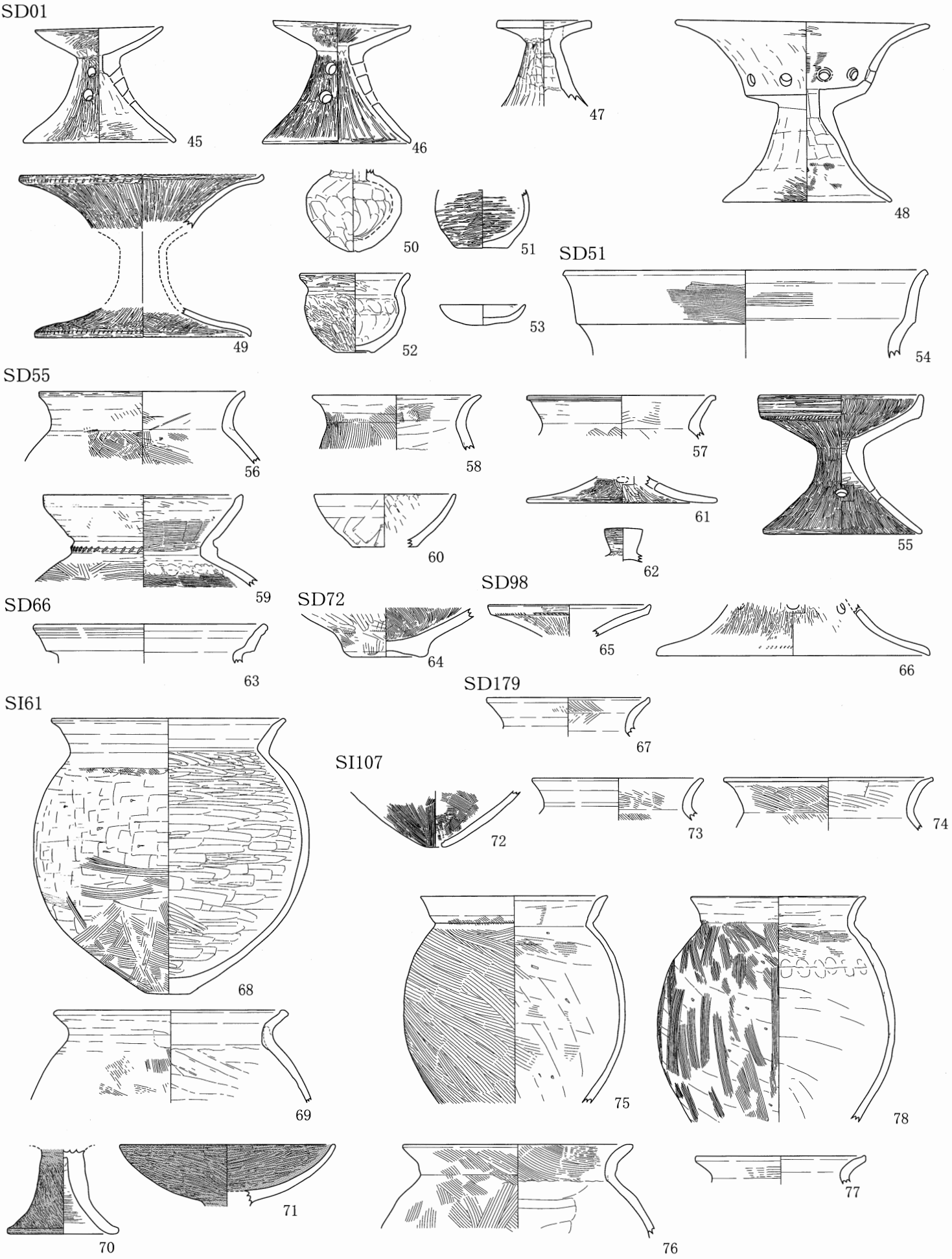
SD01



第 19 図　遺物実測図（1/4）
SD01(8 ～ 21)

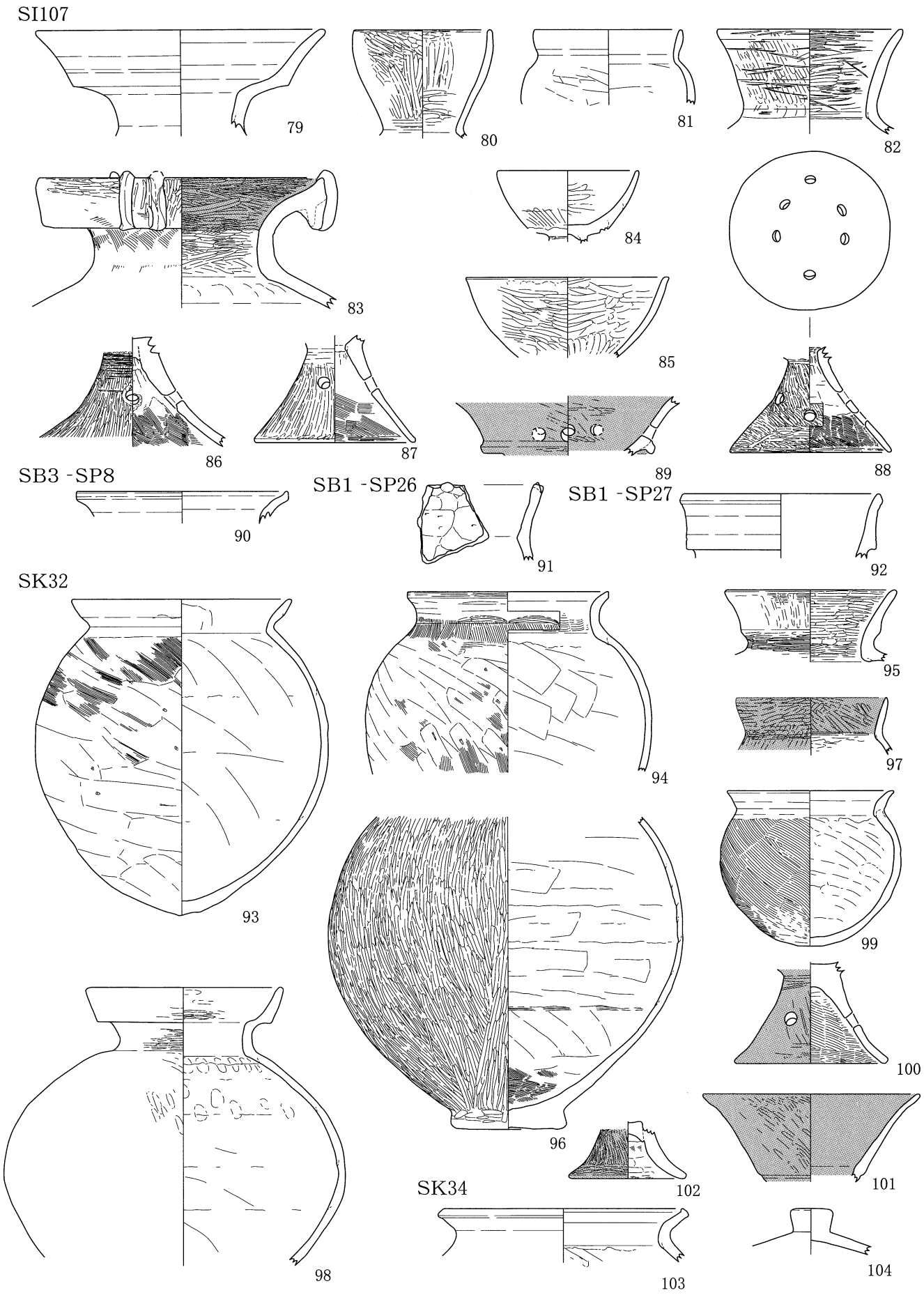


第 20 図　遺物実測図（1/4）
SD01(22 ～ 44)



第 21 図　遺物実測図（1/4）

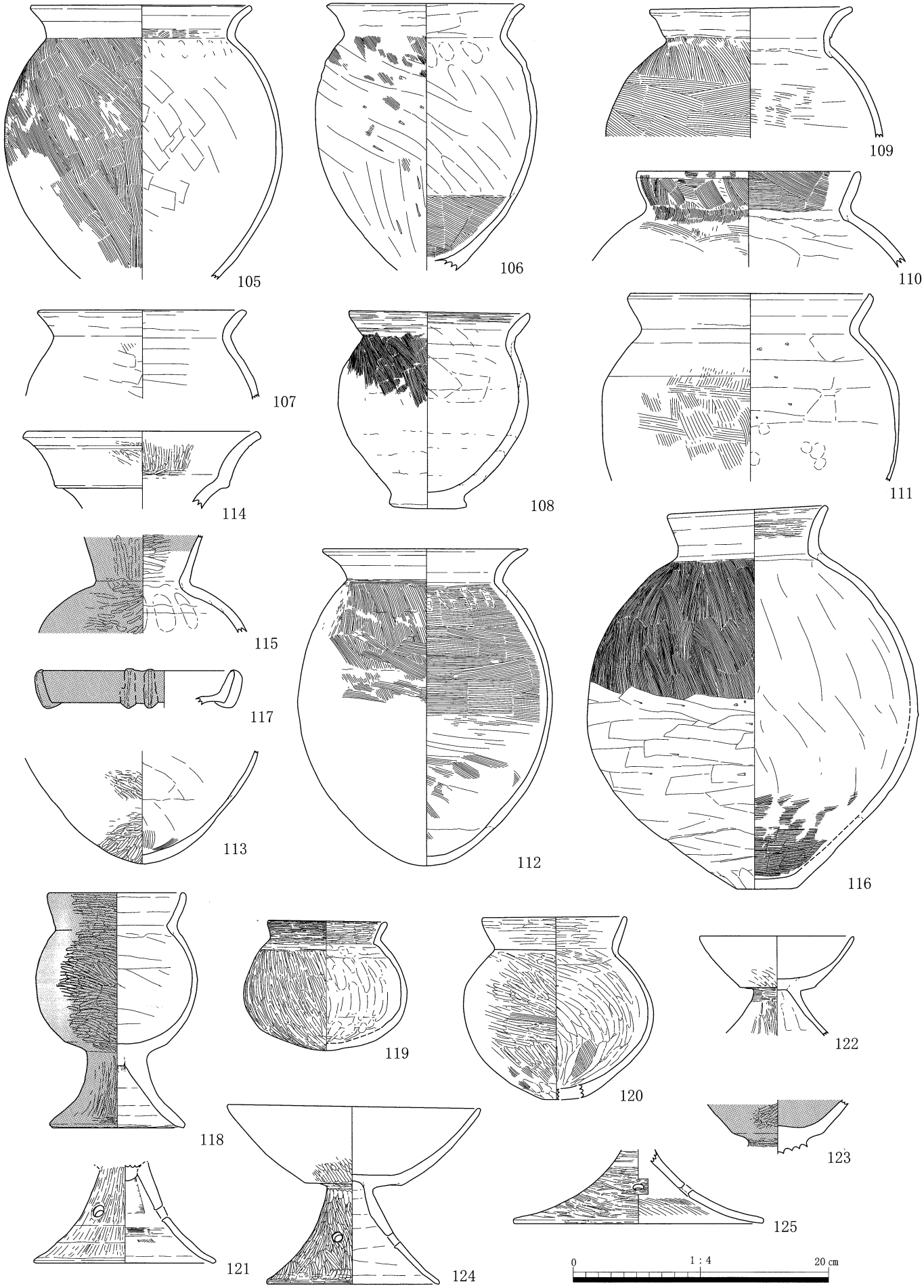
SD01(45 ～ 53)　SD51(54・55)　SD55(56 ～ 62)　SD66(63)　SD72(69)　SD179(67)　SD98(65・66)
SI61(68 ～ 71)　SI107(72 ～ 78)



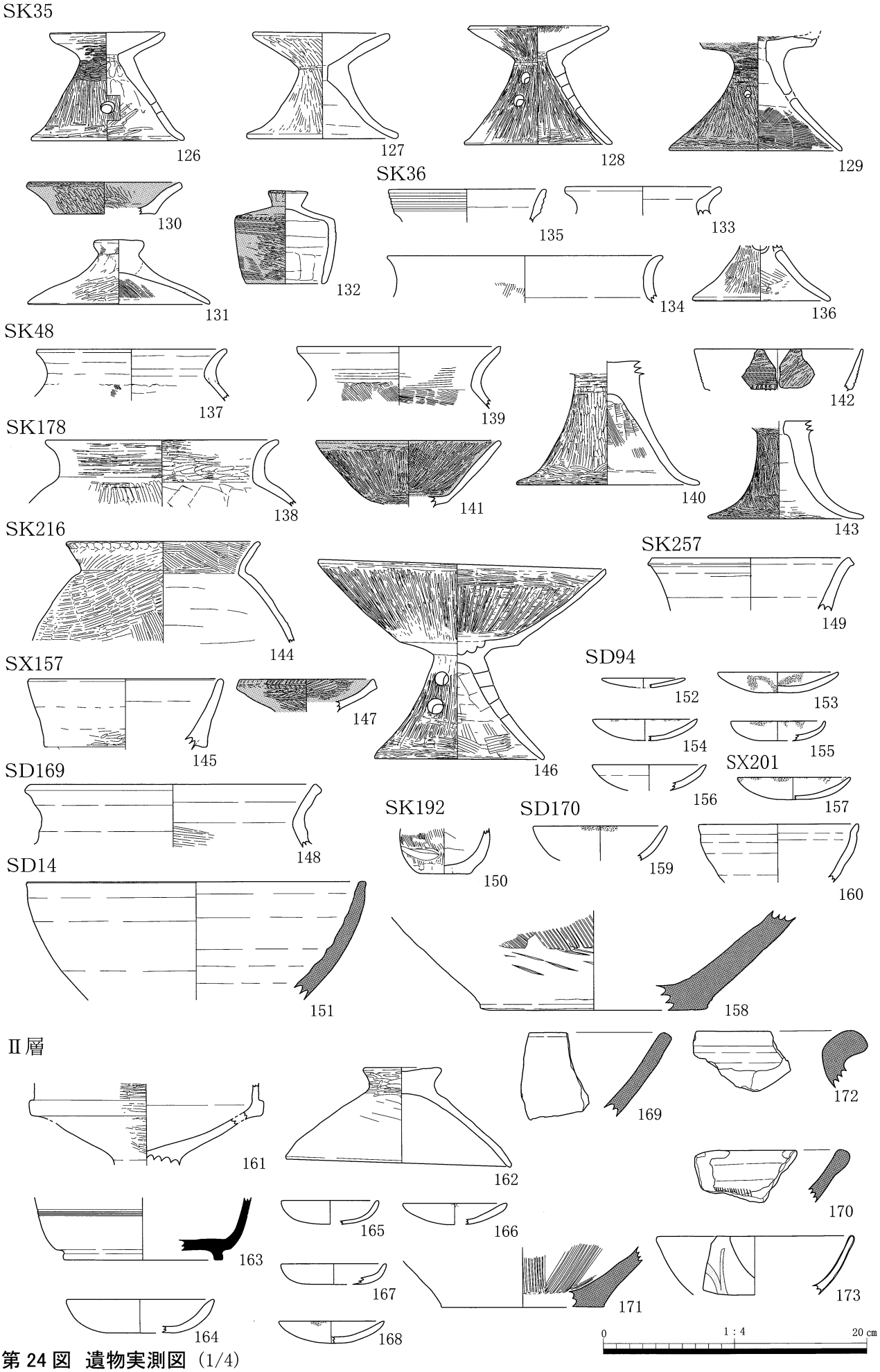
第 22 図　遺物実測図 (1/4)

SI107(79 ～ 89)　SB3 -SP8(90)　SB1 -SP26(91)　SB1 -SP27(92)　SK32 (93 ～ 102)
SK34(103・104)

SK35

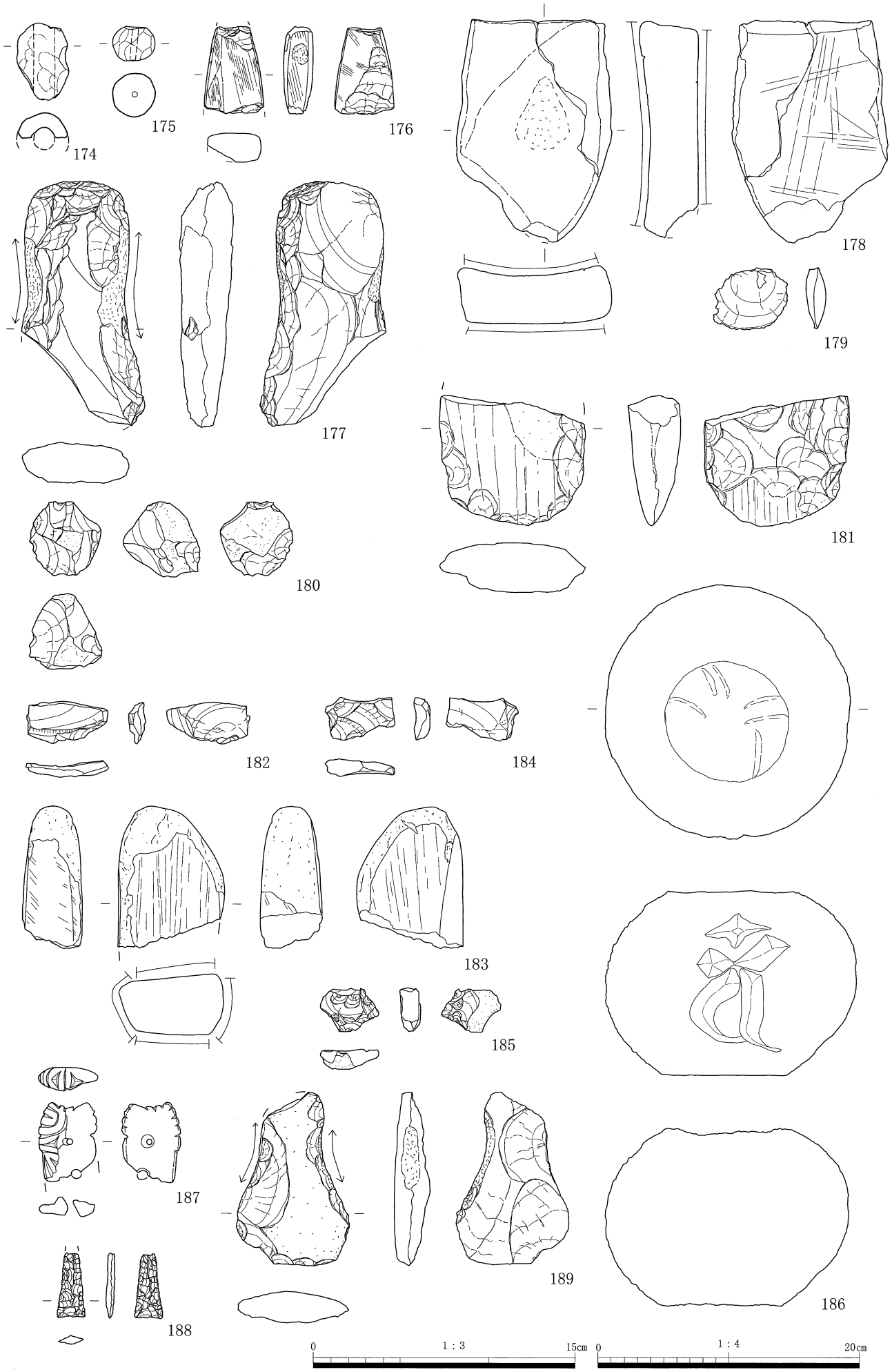


第 23 図　遺物実測図（1/4）
SK35(105 ～ 125)



第 24 図　遺物実測図（1/4）

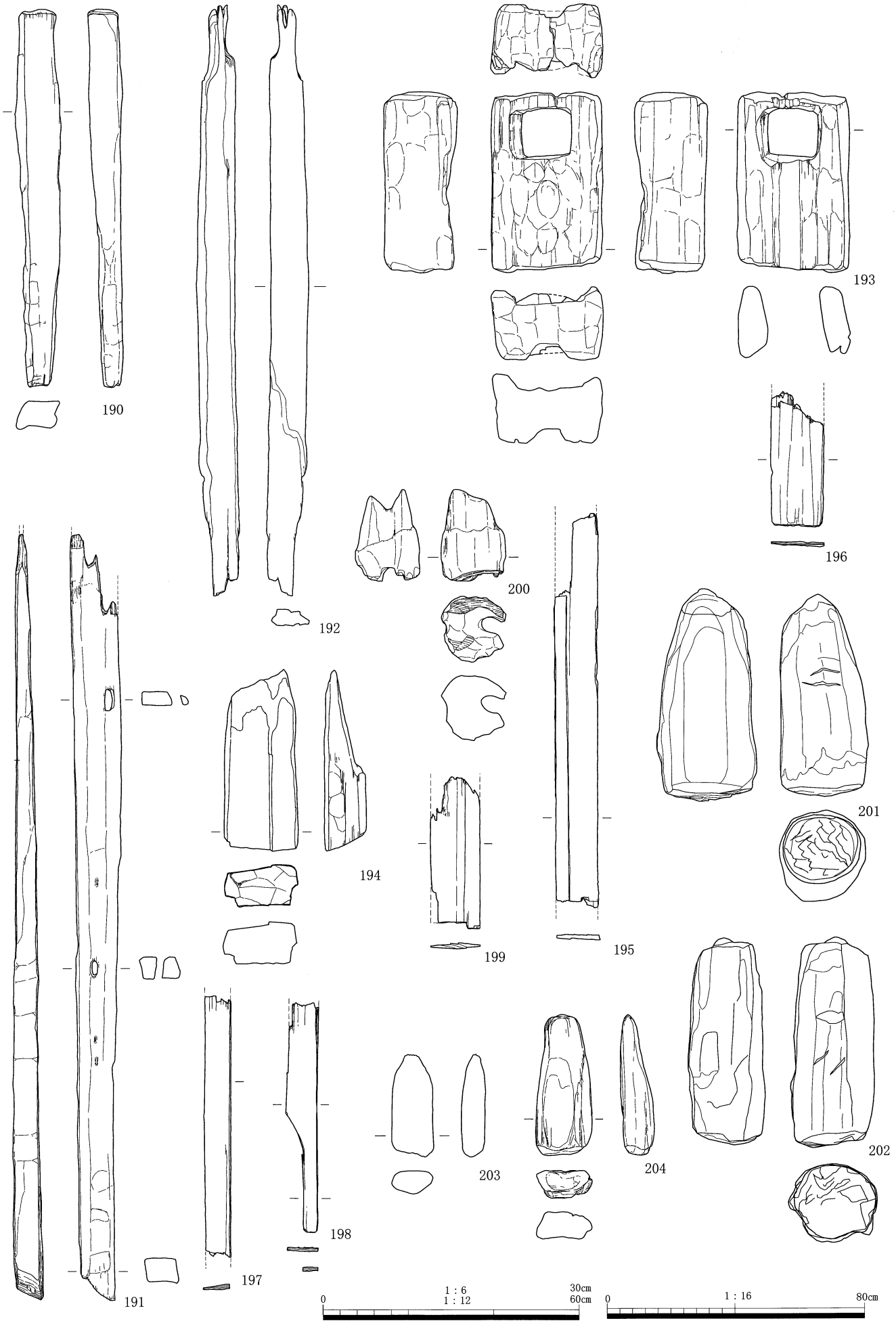
SK35(126 ～ 132)　SK36(133 ～ 136)　SK48(137)　SK178(138 ～ 143)　SK216(144)
SX157(145 ～ 147)　SD169(148)　SD14(151)　SD94(152 ～ 156)　SX201(157)　SD170(159・160)
SK192(150)　Ⅱ層(161 ～ 173)



第 25 図　遺物実測図（179 ～ 185・187 ～ 189：1/3　174 ～ 178・186：1/4）

SD01(176 ～ 178)　SD55(180 ～ 182)　SD94(184)　SD169(183)　SK35(179)　SK178(185)　SX201(186)

Ⅱ層(174・175・187 ～ 189)



第 26 図　遺物実測図（190・191・193 ～ 199：1/6、200・203・204：1/12、192・201・202：1/16）
SD01(190 ～ 199)　SP15(200)　SP26(201)　SP27(202)　SP52(203)　SP53(204)

第Ⅳ章　自然科学分析

第1節　環境考古学分析

株式会社古環境研究所

1．はじめに

沼、大型土坑、竪穴建物の堆積物について、花粉分析、珪藻分析、種実同定、樹種同定の環境考古学分析を行い、植生、環境、生業の推定復原を行った。花粉分析は一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されていることから、遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定を試みた。珪藻分析は、珪藻の各分類群が、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ海水域や淡水域など特定の生育場所を持っていること、珪藻遺骸群集の組成が当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復元の指標として利用した。微細物分析では種実同定を行った。堆積物から種実を検出し、その群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うこととした。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べた。木製品の材料となる木材がセルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であることから、木製品の樹種による利用状況や流通を探った。

2．試　料

花粉分析と珪藻分析の試料は、SD01 沼埋土の試料①～⑤の5点、SK35 大型土坑埋土の試料⑥の1点、SI107 竪穴建物埋土の試料⑦の1点の計7点である。種実同定試料は、SD01 沼埋土第3層（試料⑧）とSI107 竪穴建物埋土（試料⑦）の計2点の堆積物である。試料採取箇所を第9・12・15 図および第 27・28 図に示す。

樹種同定試料は柱2点（203、204）、角材（190）、部材（191）の合計4点である。

3．花粉分析

(1) 方　法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）試料から1㎤ を採量
2）0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
3）水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
4）25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
5）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
6）再び氷酢酸を加えて水洗処理
7）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
8）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

(2) 結　果

出現した分類群は、樹木花粉 22、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉 24、シダ植物胞子2形態の計 53 である。これらの学名と和名および粒数を第3表に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 27 図に示す。なお、200 個未満であっても 100 個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても検鏡した結果、1分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

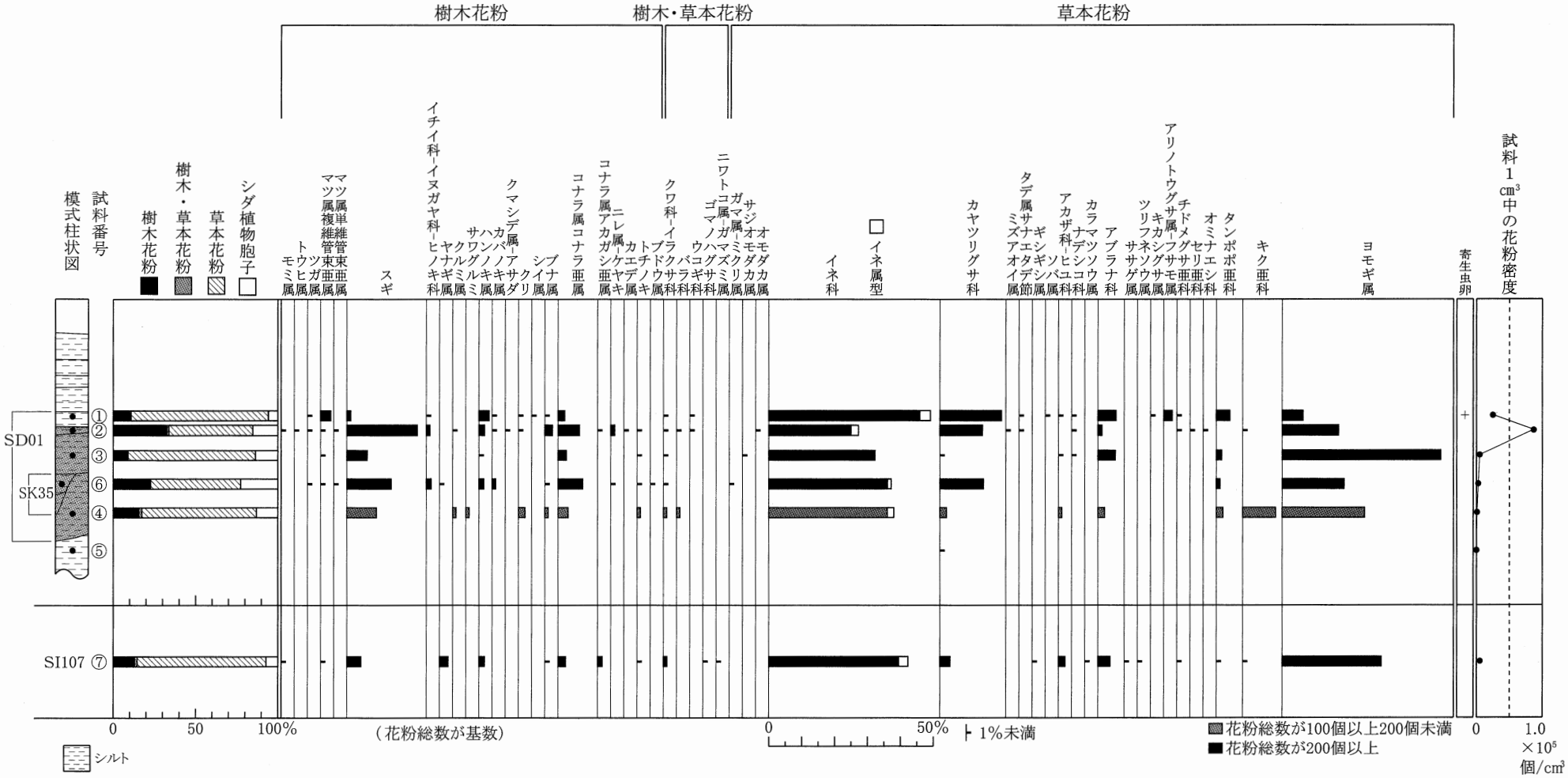
〔樹木花粉〕

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、カエデ属、トチノキ、ブドウ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、ウコギ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕
ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、カラマツソウ属、アブラナ科、ササゲ属、ツリフネソウ属、キカシグサ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属
〔シダ植物胞子〕
単条溝胞子、三条溝胞子
〔寄生虫卵〕
回虫卵
1）SD01 沼埋土およびSK35 大型土坑埋土
試料⑤を除く各試料は樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、およそ 55%から 83%を占める。なお、試料②では樹木花粉もやや多く約 33%を占める。
試料⑤は花粉密度が極めて低く、ほとんど花粉が検出されない。
試料④では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属が高率に出現し、キク亜科、タンポポ亜科、アブラナ科、カヤツリグサ科が伴われる。樹木花粉ではスギ、コナラ属コナラ亜属を主に、クリなどが低率に検出される。ただし花粉密度はやや低い。
試料⑥（SK35）では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属がやや減少し、カヤツリグサ科が増加する。樹木花粉では、スギ、コナラ属コナラ亜属がやや増加し、ハンノキ属、カバノキ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などが出現する。
試料③では、ヨモギ属とイネ科が高率で、アブラナ科がやや増加し、カヤツリグサ科が減少する。スギ、コナラ属コナラ亜属の樹木花粉は減少する。
試料②では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属、アブラナ科が減少し、カヤツリグサ科が増加する。スギ、コナラ属コナラ亜属、ブナ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキなどの樹木花粉がやや増加する。
試料①では、イネ科（イネ属型を含む）、アブラナ科、タンポポ亜科などが増加し、ヨモギ属が減少する。また、ソバ属が検出され、寄生虫卵の回虫卵が検出される。樹木花粉は減少し、スギ、コナラ属コナラ亜属などが減少し、マツ属複維管束亜属、ハンノキ属などがやや増加する。
2）SI107 竪穴建物埋土
樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属が優占し、アブラナ科、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科が伴われる。また、ササゲ属が検出される。樹木花粉では、スギ、コナラ属コナラ亜属、ヤナギ属、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に検出される。
（3）花粉分析から推定される植生と環境
試料⑤の層準では花粉密度が極めて低く、分解の行われる比較的乾燥した環境か堆積速度の速い環境が推定される。
1）SD01 沼埋土およびSK35 大型土坑埋土
下部の試料④の層準では、イネ科、ヨモギ属の草本が周辺に優勢に分布し、キク亜科、タンポポ亜科、アブラナ科、カヤツリグサ科が伴われ、周囲は草本が多かった。イネ属型の検出から水田の分布も推定される。樹木では地域的な森林としてスギを主に、コナラ属コナラ亜属などが分布していた。
試料⑥（SK35 大型土坑）では、下位にあたる試料④の層準と大きく変化のない植生が分布していた。カヤツリグサ科がやや多く、土坑内は低湿な環境が示唆される。
試料③では、ヨモギ属が増加してイネ科とともに分布し、周囲はやや乾燥した環境が示唆される。アブラナ科がやや増加し、畑が拡大した可能性がある。
試料②では、ヨモギ属の乾燥した草本域が減少し、スギ林の拡大が推定される。カヤツリグサ科が増加し低湿化が示唆され、イネ属型も出現し、水田の分布が推定される。スギ林を中心に、コナラ属コナラ亜属の林がやや拡大する。
試料①では、イネ科（イネ属型を含む）およびカヤツリグサ科が増加し、低湿な草本域が拡大し周辺で水田が拡大したと推定される。栽培植物のソバ属ないし栽培植物を含むアブラナ科が検出され、畑の分布も示唆される。寄生虫卵の回虫卵が検出され、近隣の居住域からの汚染ないし人糞施肥の可能性が推定される。樹木ではマツ属複維管束亜属とハンノキ属の増加し、アカマツ二次林が成立し湿地林が拡大する。SD01 沼の時期に分布していた周辺地域のスギ林は大きく減少する。
2）SI107 竪穴建物埋土（試料⑦）
周辺にはイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属の草本が主に分布していた。アブラナ科、アカザ科－ヒユ科の畑作雑草と栽培植物のササゲ属が検出されることから、畑の分布が示唆される。周辺には樹木は少なく、やや遠方にスギ、コナラ属コナラ亜属、ヤナギ属、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属などの樹木が分布していた。



第27図　花粉ダイアグラム

分類群		SD01					SK35	SI107
		最上層	第2層	第3層	第4層	第5層		
学名	和名	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
Arboreal pollen	樹木花粉							
Abies	モミ属		2					1
Picea	トウヒ属		1					
Tsuga	ツガ属	1	1				1	
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	20	6	1			1	1
Pinus subgen. *Haploxylon*	マツ属単維管束亜属		4				1	
Cryptomeria japonica	スギ	8	138	20	9		36	15
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	7				4	
Salix	ヤナギ属						1	9
Juglans	クルミ属		2		1			
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ				1			
Alnus	ハンノキ属	20	11	2			4	6
Betula	カバノキ属	1	1				3	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ		2					
Castanea crenata	クリ	4	4		2			
Castanopsis	シイ属	1						
Fagus	ブナ属	1	15		1		2	2
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	13	42	8	3		20	8
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属		2					5
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ		8				1	
Acer	カエデ属		1					
Aesculus turbinata	トチノキ		1	1	1		1	2
Vitis	ブドウ属						1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉							
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	4	5	1	1		2	4
Rosaceae	バラ科		2		1			
Araliaceae	ウコギ科	1	2					
Scrophulariaceae	ゴマノハグサ科							1
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属							1
Nonarboreal pollen	草本花粉							
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属						1	
Alisma	サジオモダカ属			1				
Sagittaria	オモダカ属		1					
Gramineae	イネ科	299	161	104	36		96	139
Oryza type	イネ属型	21	15	2	2		3	10
Cyperaceae	カヤツリグサ科	122	83	3	2	1	35	11
Monochoria	ミズアオイ属		1					
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	1	2					
Rumex	ギシギシ属							1
Fagopyrum	ソバ属	1						
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1		1	1			7
Caryophyllaceae	ナデシコ科	5	2	1				
Thalictrum	カラマツソウ属							1
Cruciferae	アブラナ科	36	8	17	2			13
Vigna	ササゲ属							1
Impatiens	ツリフネソウ属							2
Rotala	キカシグサ属	2						
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属	17						
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	3	1					1
Apioideae	セリ亜科		1					
Valerianaceae	オミナエシ科		2					
Lactucoideae	タンポポ亜科	27		5	2		3	2
Asteroideae	キク亜科		1		10			3
Artemisia	ヨモギ属	41	110	155	25		50	106
Fern spore	シダ植物胞子							
Monolate type spore	単条溝胞子	35	108	42	13	1	71	16
Trilate type spore	三条溝胞子	5	7	9	2		7	11
Arboreal pollen	樹木花粉	70	248	32	18		76	49
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	5	9	1	2		2	6
Nonarboreal pollen	草本花粉	576	388	289	80	1	188	297
Total pollen	花粉総数	651	645	322	100	1	266	352
Pollen frequencies of $1cm^3$	試料$1cm^3$中の花粉密度	2.5	8.7	4.9	8.4	0.6	2.7	5.1
		$\times10^4$	$\times10^4$	$\times10^3$	$\times10^2$	$\times10$	$\times10^3$	$\times10^3$
Unknown pollen	未同定花粉	11	6	4	5		3	9
Fern spore	シダ植物胞子	40	115	51	15	1	78	27
Helminth eggs	寄生虫卵							
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵	1						
Total	計	1						
Helminth eggs frequencies of $1cm^3$	試料$1cm^3$中の寄生虫卵密度	0.6						
		$\times10$	$\times10$	$\times10$	$\times10$	$\times10$	$\times10$	$\times10$
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+++)	(+++)	(++)	(+)	(++)	(++)

第3表　花粉分析結果

4. 珪藻分析

(1) 方 法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

1) 試料から1cm^{3}を採量
2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）
4) 残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥
5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製
6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

(2) 結 果

試料から出現した珪藻は、真－中塩性種（海－汽水生種）1分類群、中塩性種（汽水生種）1分類群、中－貧塩性種（汽－淡水生種）1分類群、貧塩性種（淡水生種）89分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。表2に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第27図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe(1974)の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉（1988）により、淡水生種は安藤（1990）による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔中－貧塩性種〕

Rhopalodia gibberula

〔貧塩性種〕

Amphora copulata、Aulacoseira ambigua、Caloneis silicula、Cymbella cuspidata、Cymbella gracilis、Cymbella naviculiformis、Cymbella silesiaca、Diploneis elliptica、Eunotia minor、Fragilaria construens v. venter、Frustulia vulgaris、Gomphonema gracile、Gomphonema parvulum、Gomphonema sphaerophorum、Hantzschia amphioxys、Navicula cuspidata、Navicula elginensis、Navicula mutica、Neidium ampliatum、Nitzschia nana、Nitzschia palea、Pinnularia acrosphaeria、Pinnularia borealis、Pinnularia gibba、Pinnularia interrupta、Pinnularia microstauron、Pinnularia subca、、、pitata、Pinnularia viridis、Stauroneis phoenicenteron

1) SD01沼埋土およびSK35大型土坑埋土（試料①から試料⑥）

下位より、試料④、試料⑤では珪藻密度が極めて低い。わずかに検出される珪藻はすべて貧塩性種（淡水生種）で占められる。

試料⑥では、好塩性種のRhopalodia gibberula、陸生珪藻のHantzschia amphioxys、沼沢湿地付着生種群のPinnularia viridisの出現率がやや高い。

試料③では、好塩性種のRhopalodia gibberula、陸生珪藻のNitzschia nanaなど、流水不定性種のNitzschia palea、沼沢湿地付着生種群のPinnularia viridis、好流水性種で沼沢湿地付着生種群のNavicula elginensisの出現率がやや高い。

試料②では、好塩性種のRhopalodia gibberula、流水不定性種のCymbella silesiaca、Amphora copulata、沼沢湿地付着生種群のCymbella naviculiformis、Pinnularia viridis、好流水性種のNavicula elginensisの出現率がやや高い。

試料①では、好塩性種のRhopalodia gibberulaがやや高率に流水不定性種のCymbella silesiaca、沼沢湿地付着生種群のPinnularia viridis、好流水性種のGomphonema parvulumがやや低率に出現する。

2) SI107竪穴建物埋土（試料⑨）

試料⑦では貧塩性種（淡水生種）が検出されるが極めて低密度である。

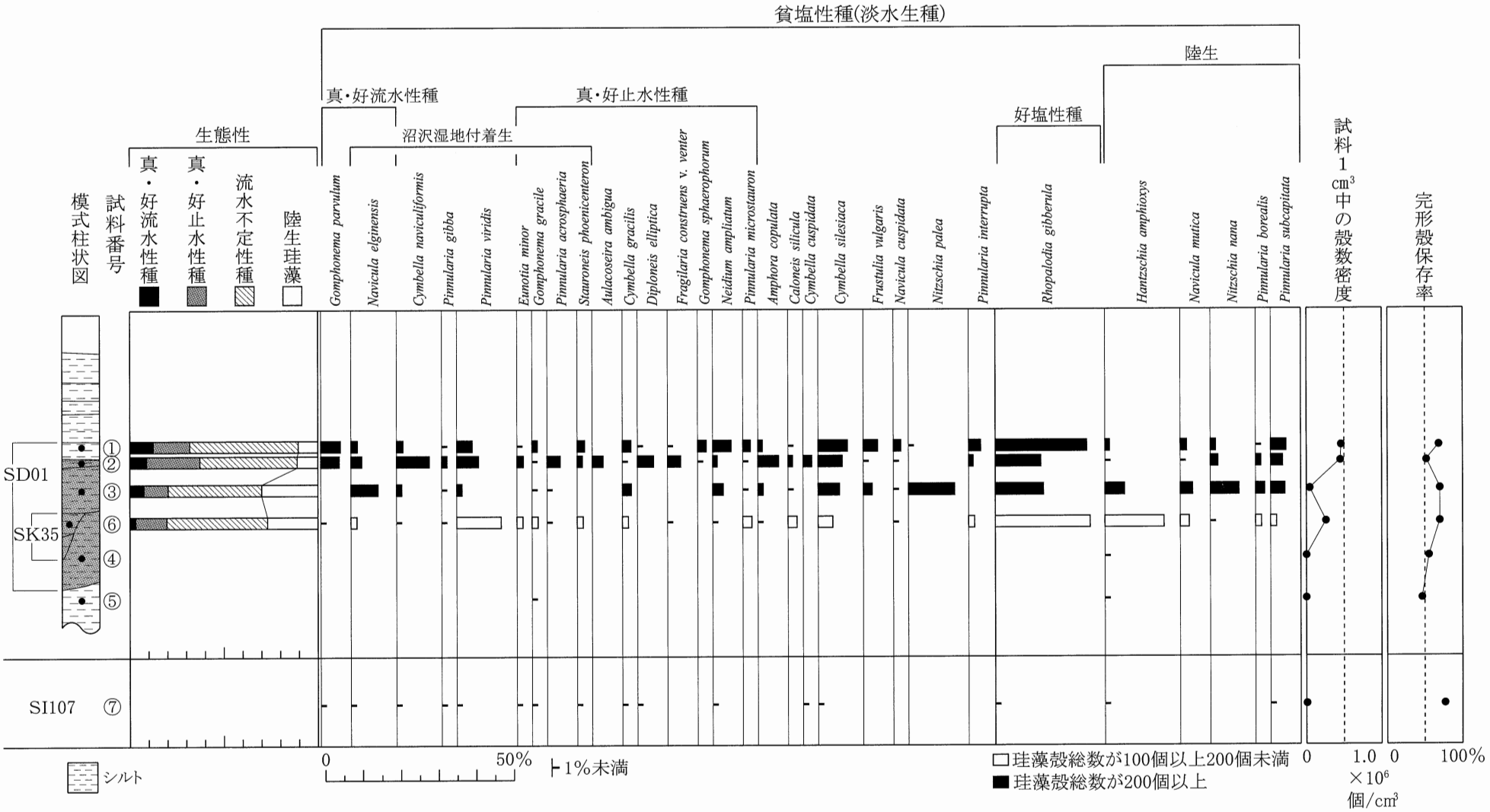
(3) 珪藻分析から推定される堆積環境

1) SD01沼埋土およびSK35大型土坑埋土（試料①から試料⑥）

下位より、試料④、試料⑤は、堆積速度が速いか珪藻の生育できない乾湿を繰り返す不安定な環境が推定される。試料①から試料⑥のSD01沼およびSK35大型土坑の中上部の試料からは、貧塩性種（淡水生種）の水生珪藻が出現し、滞水した状況が示唆される。各層準とも好塩性種または中～貧塩性種（汽～淡水生種）であるRhopalodia gibberulaの出現率がやや高いが、他の中～貧塩性種（汽～淡水生種）が伴って出現しないことから、潮汐の影響は考えられず、また汽水より低い塩分濃度の環境が示唆される。塩分を含む生活排水の流れ込みやよどんだ水域の蒸散によって塩分濃度が低濃度で上昇したと考えられる。試料⑥と試料③は、優占種はなく珪藻種には差異があるが、陸生珪藻、流水不定性種、真・好流水性種、真・好止水性種が出現し、湿った環境からよどみ流れる不安定な水域が示唆される。試料②と試料①にかけては、陸生珪藻が減少し、流水不定性種、真・好止水性種真・好流水性種がやや増加し、また沼沢湿地付着生種群も多くなることから、付着生珪藻の基質となる水草が生育したよどみながら流れる水域が示唆される。

2) SI107竪穴建物埋土（試料⑦）

試料⑦では珪藻密度が極めて低く、珪藻が生育しにくい比較的乾燥した環境や陽当たりの悪い環境が推定される。



第28図　主要珪藻ダイアグラム

分類群	SD01沼埋土					SK35大型土坑埋土	SI107竪穴建物埋土
	最上層	第2層	第3層	第4層	第5層		
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
貧塩性種(淡水生種)							
Achnanthes hungarica		1					
Amphora copulata	4	19	3			1	
Amphora ovalis	1	6				2	
Amphora veneta		2				1	
Aulacoseira ambigua		10					
Aulacoseira canadensis		2					
Caloneis hyalina	1	2	3				
Caloneis silicula	2	4	2			3	
Cocconeis placentula	1			1	2		
Cymbella cuspidata		8					2
Cymbella gracilis	8	3	5			2	3
Cymbella lanceolata		1					
Cymbella minuta	5						
Cymbella naviculiformis	6	30	3			1	1
Cymbella silesiaca	27	22	12			5	3
Cymbella subaequalis	2		2			1	1
Cymbella tumida	3	1					2
Cymbella turgidula		1	1				
Cymbella spp.						1	
Diploneis elliptica	1	15					1
Diploneis parma		1				1	
Diploneis yatukaensis						1	
Epithemia adnata			1				
Eunotia bilunaris	2						
Eunotia minor	2	6				2	1
Eunotia paludosa-rhomboidea		1					
Eunotia pectinalis	1						1
Eunotia praerupta	1						
Eunotia serra		1					
Fragilaria brevistriata		3					
Fragilaria capucina					1		
Fragilaria construens v. *venter*	3	12				1	
Fragilaria exigua	1	4					
Frustulia rhomboides v. *crassinervia*			5				
Frustulia rhomboides v. *saxonica*	1	1	2				
Frustulia vulgaris	13	1	5				
Gomphonema acuminatum	1	2					
Gomphonema angustatum	2						1
Gomphonema augur	2	1					
Gomphonema gracile	5	3	1		1	2	1
Gomphonema minutum	2	1	2		1		
Gomphonema parvulum	18	17				1	1
Gomphonema sphaerophorum	8	2					
Gomphonema spp.		1			1	1	
Hantzschia amphioxys	4	1	11	4	1	20	4
Meridion circulare v. *constrictum*						1	
Navicula capitata	7	2					
Navicula cryptocephala			1				
Navicula cuspidata	7	2	1			1	
Navicula elginensis	6	10	15			2	1
Navicula goeppertiana	1		1				
Navicula kotschyi	2		1				
Navicula laevissima	2	1	1			1	2
Navicula mutica	6	3	7			3	
Navicula placenta v. *obtusa*		5				3	
Navicula pupula	2	2	2				
Navicula veneta	1		1				
Navicula spp.	3	1	1				
Neidium affine			2				1
Neidium alpinum	1	1	1				
Neidium ampliatum	17	4	6			1	2

第4表　珪藻分析結果①

分類群	SD01沼埋土					SK35大型土坑埋土	SI107竪穴建物埋土
	最上層	第2層	第3層	第4層	第5層		
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
Nitzschia amphibia		1	1				
Nitzschia nana	5	7	16			1	
Nitzschia palea	1		26				
Nitzschia umbonata			2				
Pinnularia acrosphaeria		12	1			1	
Pinnularia appendiculata			4				
Pinnularia borealis	3	5	5			2	
Pinnularia braunii			6				
Pinnularia divergens						1	1
Pinnularia gibba	1	5	2			1	1
Pinnularia hemiptera		2				2	1
Pinnularia interrupta	11	4				2	
Pinnularia major		5				1	
Pinnularia microstauron	7	3	1			3	
Pinnularia obscura	2	2					
Pinnularia schoenfelderi			1				
Pinnularia schroederii			6			3	
Pinnularia subcapitata	14	11	8			2	2
Pinnularia viridis	14	20	3			15	3
Pinnularia spp.			2				
Rhopalodia gibba	2						
Stauroneis anceps	6	1	1				1
Stauroneis phoenicenteron	7	5				2	1
Stauroneis smithii	1						
Surirella angusta	3	1					
Surirella tenera	2						
Synedra ulna		1	1				1
Tabellaria fenestrata-flocculosa		2					
中－貧塩性種(汽－淡水生種)							
Rhopalodia gibberula	84	42	27			32	4
中塩性種(汽水生種)							
Nitzschia levidensis v. *levidensis*		1					
真－中塩性種(海－汽水生種)							
Cocconeis scutellum						1	
合 計	163	130	113	0	0	69	15
未同定	8	1	7	0	0	3	1
破片	163	321	93	4	8	56	13
試料1cm^{3}中の殻数密度	4.6 $\times 10^5$	4.5 $\times 10^5$	4.5 $\times 10^4$	1.0 $\times 10^3$	1.4 $\times 10^3$	2.6 $\times 10^5$	8.8 $\times 10^3$
完形殻保存率(%)	51.2	29.0	56.3	0.0	0.0	56.3	55.2

第4表　珪藻分析結果②

分類群	部位	SD01 沼　埋土第4層	SI107 竪穴建物埋土
学名	和名		
Herb	草本		
Oryza sativa L.	イネ　果実(破片)		3.0
Scirpus	果実　ホタルイ属	3.0	
Total	合計	3.0	3.0

第5表　種実同定結果

(500cm3中0.25mm篩)

1 ホタルイ属果実 (SD01沼)　2 ホタルイ属果実 (SD01沼)　3 イネ炭化果実片 (SI107竪穴建物埋土)　4 イネ炭化果実片 (SI107竪穴建物埋土)　5 イネ炭化果実片 (SI107竪穴建物埋土)

0.5mm　1.0mm

写真1　種実

5. 種実同定

(1) 方 法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

1) 試料 500cm^3 に水を加え放置し、泥化

2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別

3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(2) 結 果

草本2点が同定された。学名、和名および粒数を第5表に示す。以下に形態的特徴を示す。

1) イネ Oryza sativa L. 炭化果実（破片）イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。全て破片である。

2) ホタルイ属 Scirpus 果実 カヤツリグサ科 長さ × 幅：1.72 ㎜ ×1.65 ㎜、1.45 ㎜ ×1.42 ㎜

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に 4 ～ 8 本の針状の付属物を持つ。

(3) 出土種実の傾向と環境

1)SD01 沼埋土第3層（第6・9図、試料⑧）

草本種実のホタルイ属果実3点が検出された。ホタルイ属は水田雑草の性格ももつ典型的な水生植物であり、湿地から浅い水域に生育する。

2)SI107 竪穴建物埋土

草本種実のイネ炭化果実（破片）3点が検出された。イネ果実は火を受け炭化しなければ残存せず、火を受けるような利用、あるいは植物体を燃料としたときに穂に残存していたことなどが考えられる。

6. 樹種同定（1）

(1) 方 法

カミソリを用いて試料から新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(2) 結 果

第6表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に解剖学的特徴を記す。

試料	備考	結果(学名／和名)
①SP53柱(204)		*Cryptomeria japonica* D.Don ／ スギ
②SP52柱(203)		*Cryptomeria japonica* D.Don ／ スギ
③SD01出土角材(190)	一部分のみ炭化	*Cryptomeria japonica* D.Don ／ スギ
④SD01角材(191)		*Cryptomeria japonica* D.Don ／ スギ

第6表 樹種同定結果(1)

スギ Cryptomeria japonica D.Don スギ科 写真4

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10 細胞高以下が多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ 40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

(3) 所 見

柱根2点、角f9r材1点、部材1点は、すべてスギであった。スギは、木理通直で肌目は粗く、加工工作が容易で、大きな材がとれる良材である。温帯に広く分布し、肥沃で湿潤な土壌を好む針葉樹である。特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する。当時遺跡周辺か近隣地域に生育しもたらされたと推定される。

7. 樹種同定（2）

株式会社吉田生物研究所

(1) 試 料

試料は柱3点、角材1点、部材2点、板材5点の合計 11 点である。

(2) 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡 Nikon DS-Fi1 で観察して同定した。

(3) 結 果

樹種同定結果（針葉樹 1 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ（Cryptomeria japonica D.Don）

No.	遺構No.(遺物No.)	品名	樹種	No.	遺構No.(遺物No.)	品名	樹種
1	SP27(202)	柱	スギ科スギ属スギ	7	SD01(197)	板材	スギ科スギ属スギ
2	SD01(193)	部材	スギ科スギ属スギ	8	SD01(199)	板材	スギ科スギ属スギ
3	SD01(195)	板材	スギ科スギ属スギ	9	SP15(200)	柱	スギ科スギ属スギ
4	SD01(196)	板材	スギ科スギ属スギ	10	SP26(201)	柱	スギ科スギ属スギ
5	SD01(194)	角材	スギ科スギ属スギ	11	SD01(192)	部材	スギ科スギ属スギ
6	SD01(198)	板材	スギ科スギ属スギ				

第7表 樹種同定結果(2)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で 1 分野に 1 ～ 3 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

8. まとめ

株式会社古環境研究所

下位よりSD01 沼の下層の試料⑤の層準は、花粉と珪藻ともに密度が極めて低く、比較的乾燥した環境か堆積速度の速い環境が推定された。SD01 沼およびSK35 大型土坑では、周囲にイネ科とヨモギ属の草本が分布し比較的乾燥した環境であり、試料①、試料②、試料③からはアブラナ科などの畑の分布が推定され、試料④の層準ではソバ属が加わる。周囲に水田の分布も示唆されるが、特に試料③の時期はヨモギ属が多く周囲は乾燥した環境で水田は衰退した時期であったと推定される。SI107 竪穴建物埋土から示唆される植生もイネ科とヨモギ属の草本が多く、類似した比較的乾燥した環境が示唆され、試料①の層準と類似する。また好塩性種の珪藻が比較的多く低い塩分濃度が示唆され、生活排水の流れ込みやよどんだ水域での蒸散などが考えられた。周辺地域にはスギ林を主にコナラ属コナラ亜属の森林が分布するが、試料③や試料①の時期は衰退する。栽培植物としては、SI107 竪穴建物からイネ（炭化米片）、ササゲ属（花粉）が検出され、各層準からイネ属型（花粉）、SD01 沼上層からアブラナ科（花粉）、試料①からソバ属が検出された。木材は柱根、棒材、部材のいずれもスギであり、スギの利用が多い。

参考文献（株式会社古環境研究所）

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の柱態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-102.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究 ,13,p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

Hustedt,F.(1937—1938)Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Ex pedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15,p.131—506.

Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh—water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae・1－4.

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Sapro-philous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47. 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第1号，植生史研究会，p.29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣 出版，p.131—139.

参考文献（株式会社吉田生物研究所）

林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

第2節　放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

1．試料と方法

測定試料は、木製遺物5点、炭化材1点、土器付着炭化物2点の計8点である。試料は超音波洗浄、酸－アルカリ－酸洗浄（AAA 処理）で調製後、加速器質量分析計を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。試料の詳細、調製データを第9表に示す。

2．結　果

年代測定結果を第 10 表に示す。

(1) 未補正 14C年代値

試料の 14C/12C比から、単純に現在（AD1950 年）から何年前かを計算した値。14Cの半減期は国際的慣例により Libby の 5568 年を使用した（実際の半減期は 5730 年）。

(2) δ 13C測定値

試料の測定 14C/12C比を補正するための炭素安定同位体比（13C/12C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

$$\delta 13C(‰) = \frac{(13C/12C)[試料]-(13C/12C)[標準] \times 1000}{(13C/12C)[標準]}$$

(3) 補正 14C年代値

試料の炭素安定同位体比（13C/12C）を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の δ 13C値を −25(‰) に標準化することによって得られる年代である。

なお、δ 13C値は加速器質量分析計システムによって自動的に測定され、それにともない補正 14C年代値も自動計算される。

(4) 暦年代 Calendar Age

14C年代値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 14C濃度の変動および 14Cの半減期の違いを較正する必要がある。具体的には、年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値、サンゴの U/Th（ウラン / トリウム）年代と 14C年代の比較、湖の縞状堆積物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。14C 年代の暦年較正には、Beta Analytic 社オリジナルプログラムである BETACAL09（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。暦年代の交点とは、補正14C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68％確率）と2σ（95％確率）は、補正 14C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1σ・2σ 値が表記される場合もある。

3．所　見

出土した試料について、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、SP27 出土柱（202）は、2030±30 年 BP（2σ の暦年代で BC 110 ～ AD30 年、AD 40 ～ 50 年）、SP 52 出土柱（203）は、1830±30 年 BP（同 AD 90 ～ 100 年、AD 120 ～ 250 年）、SP15 出土柱（200）は、1700±30 年 BP（同 AD 250 ～ 410 年）、SD01 下層出土部材（193）は、1960±30 年 BP（同 BC 40 ～ 10 年、BC 0 ～ AD 80 年）、SD01 出土角材（190）は、1890±30 年 BP（同 AD 60 ～ 180 年、AD 190 ～ 210 年）、SD01 上層出土板材（199）は、980±30 年 BP（同 AD 1020 ～ 1050 年、AD 1080 ～ 1130 年、AD 1130 ～ 1150 年）、SD01 下層出土土器付着炭化物（第 6 図試料№.7）は、2380±30 年 BP（同 BC 520 ～ 390 年）、SI107 竪穴建物出土土器付着炭化物（№.28）は、1760±30 年 BP（同 AD 220 ～ 350 年、AD 370 ～ 380 年）の年代値が得られた。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2),425-430.
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
Heaton TJ, Blackwell PG, Buck CE.(2009) A Bayesian approach to the estimation of radiocarbon calibration curves: the IntCal09 methodology. Radiocarbon, 51(4), 1151-1164.
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14C 年代 , 3-20.
Reimer PJ, Baillie MGL, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Burr GS, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Hajdas I, Heaton TJ, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, McCormac FG, Manning SW, Reimer RW, Richards DA, Southon JR, Talamo S, Turney CSM, van der Plicht J, Weyhenmeyer CE. (2009) IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 51(4):1111-50.
Stuiver M, Braziunas TF.(1993)IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon, 35(1),137-189.

試料名	出土地点・層位	種類	前処理・調整	測定法
№1	SP27出土柱(202)	木材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
№2	SP52出土柱(203)	木材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
№3	SP15出土柱(200)	木材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
№4	SD01下層出土部材(193)	木材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
№5	SD01出土角材(190)	炭化材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
№6	SD01上層出土板材(199)	木材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
№7	SD01下層出土縄文土器付着炭化物	炭化物	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
№8	SI107竪穴建物出土古墳土師器付着炭化物	炭化物	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS

第9表　放射性炭素年代測定試料及び処理　※AMS(Accelerator Mass Spectrometry)は加速器質量分析法

試料名	測定№ (Beta-)	未補正^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代(西暦)	
№1	342307	2000±30	-23.3	2030±30	交点:cal	BC 40
					1σ:cal	BC 50～AD 0
					2σ:cal	BC 110～AD 30,
					:cal	AD 40～50
№2	342308	1800±30	-23.2	1830±30	交点:cal	AD 180,AD 190,AD 210
					1σ:cal	AD 130～240
					2σ:cal	AD 90～100,
					:cal	AD 120～250
№3	342309	1710±30	-25.7	1700±30	交点:cal	AD 350,AD 370,AD 380
					1σ:cal	AD 260～280,
					:cal	AD 330～390
					2σ:cal	AD 250～410
№4	342310	1940±30	-23.7	1960±30	交点:cal	AD 30,AD 40,AD 50
					1σ:cal	AD 10～10,
					:cal	AD 20～70
					2σ:cal	BC 40～10,
					:cal	BC 0～AD 80
№5	342311	1860±30	-23.2	1890±30	交点:cal	AD 90,AD 100,AD 120
					1σ:cal	AD 80～130
					2σ:cal	AD 60～180,
					:cal	AD 190～210
№6	342312	960±30	-23.9	980±30	交点:cal	AD 1030
					1σ:cal	AD 1020～1040,
					:cal	AD 1110～1120
					2σ:cal	AD 1020～1050,
					:cal	AD 1080～1130,
					:cal	AD 1130～1150
№7	342313	2380±30	-24.7	2380±30	交点:cal	BC 400
					1σ:cal	BC 410～400
					2σ:cal	BC 520～390
№8	343770	1760±30	-24.7	1760±30	交点:cal	AD 250
					1σ:cal	AD 240～260,
					:cal	AD 280～330
					2σ:cal	AD 220～350,
					:cal	AD 370～380

第10表　放射性炭素年代測定結果　BP:Before Physics(Present)，AD:紀元，BC:紀元前

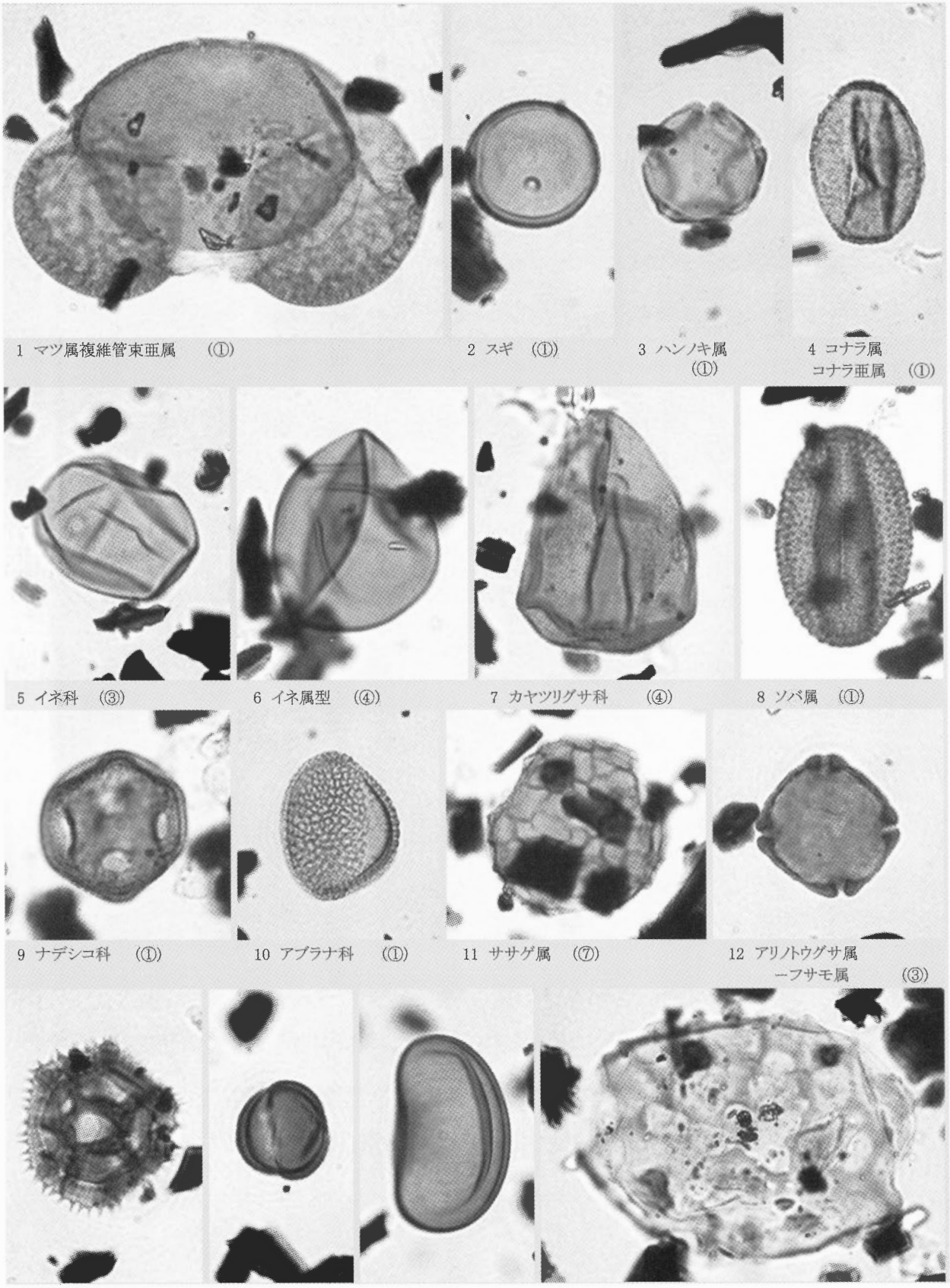


写真2 花粉・胞子・寄生虫卵

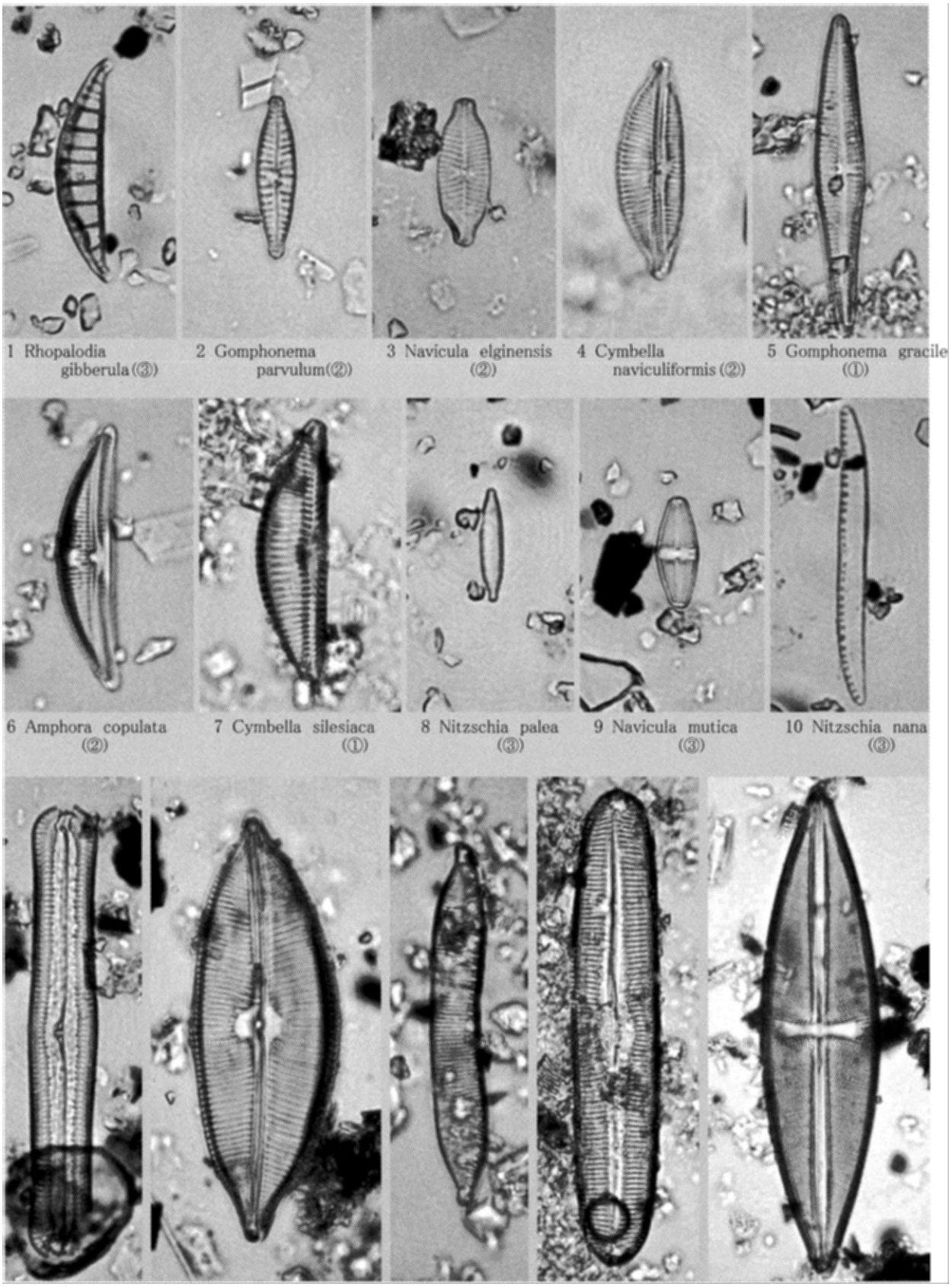
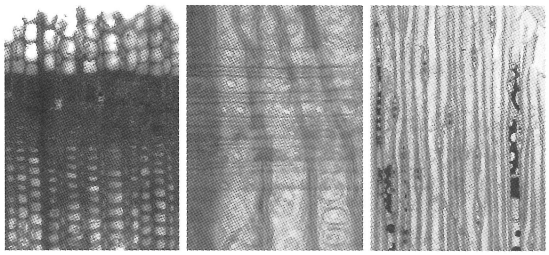


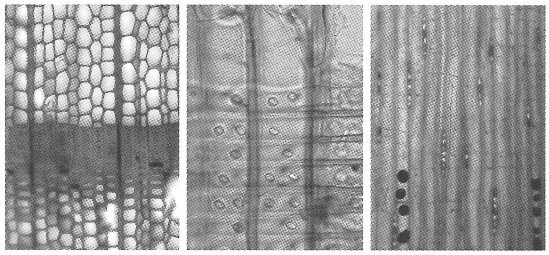
写真3 珪藻

1-13 ―― 10μm 14、15 ―― 10μm



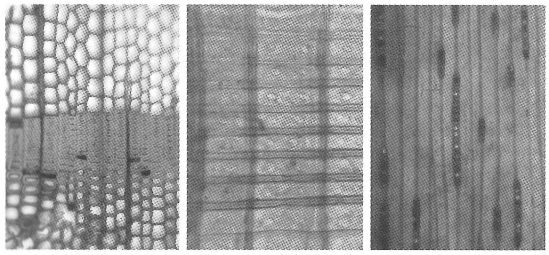
横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.2mm

1. SP53柱(204)　スギ



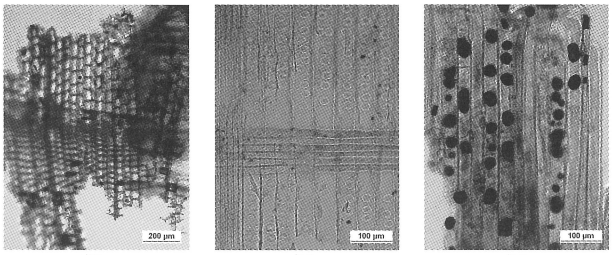
横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.2mm

2. SD01棒材(190)一部分のみ炭化　スギ



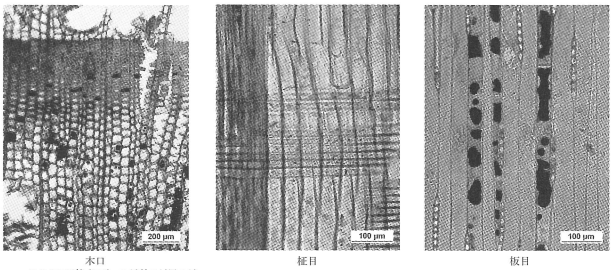
横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.2mm

3. SD01部材(191)　スギ



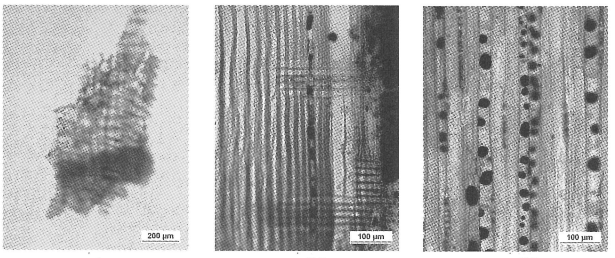
木口　柾目　板目

№1 SP27柱(202)　スギ科スギ属スギ



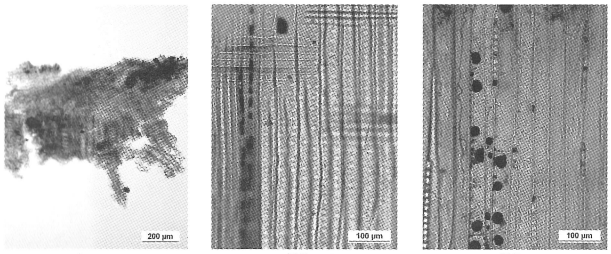
木口　柾目　板目

№2 SP52柱(203)　スギ科スギ属スギ



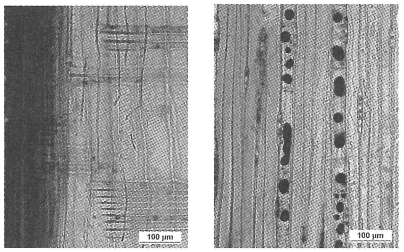
木口　柾目　板目

№3 SP15柱(200)　スギ科スギ属スギ



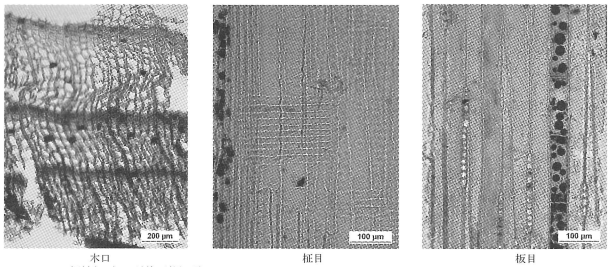
木口　柾目　板目

№4 SD01板材(196)　スギ科スギ属スギ



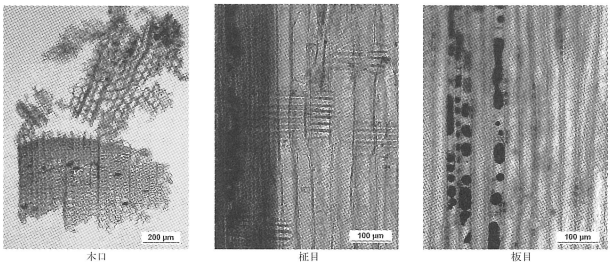
柾目　板目

№7 SD01板材(197)　スギ科スギ属スギ



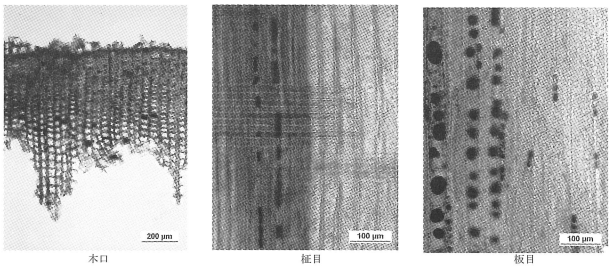
木口　柾目　板目

№5 SD01板材(194)　スギ科スギ属スギ



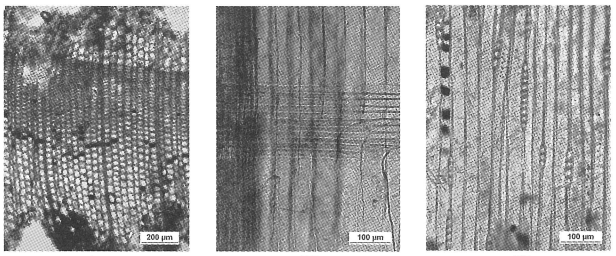
木口　柾目　板目

№8 SD01板材(198)　スギ科スギ属スギ



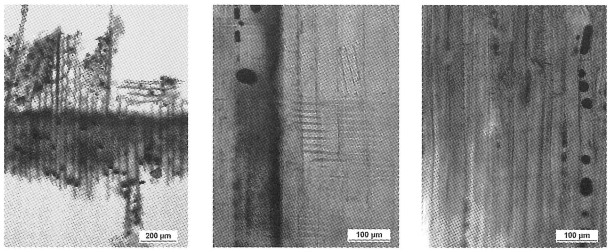
木口　柾目　板目

№3 SD01板材(198)　スギ科スギ属スギ



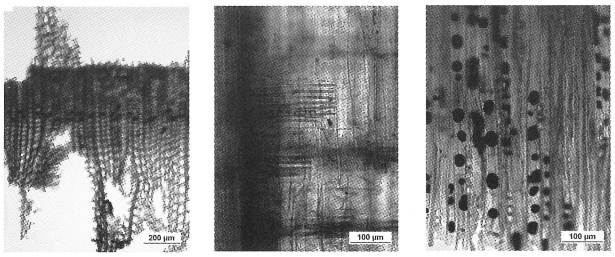
木口　柾目　板目

№9 SP15柱(200)　スギ科スギ属スギ



木口　柾目　板目

№10 SP26柱(201)　スギ科スギ属スギ



木口　柾目　板目

№11 SD01部材(192)　スギ科スギ属スギ

写真4　木材

〈正誤表〉

P63 27行目

“約150m”→“約400m”

第Ⅴ章 総括

豊田大塚・中吉原遺跡では、竪穴建物や掘立柱建物等がある古墳時代前期の集落、その集落形成の主要な要素であると同時に生活の基盤であったと考えられる沼、古代道路の側溝である可能性が高い道路状遺構、中世の掘立柱建物・貯水池状遺構及びそれと連結し用水的な機能を持つ溝、鋤溝群（畠）や区画溝などを検出した。遺物は古墳時代初頭～前期前半の土師器が大半を占め、次いで縄文時代晩期の土器が多い。沼からは古墳時代前期・古代後半の年代測定結果を示す部材加工木なども出土したが、今回の調査では前回調査区と異なり、さらし場や木道など具体的な構築物の存在を示唆するものは検出しなかった。古代以降の遺物はきわめて少なく、時期の詳細を特定しうるものはほとんどない。以下、“第1節 豊田大塚・中吉原遺跡と周辺の様相”で、各時代における遺構・遺物の変遷と周辺地域との関係を考察する。“第2節 古墳時代前期土師器の組成及び編年的位置付け”では、主要遺構からまとまって出土した古墳時代前期の土師器の組成・出土比率とその特徴について考察する。また“第3節 折衷土器について”では、特殊な古墳時代前期の折衷型土器を紹介する。

第1節 豊田大塚・中吉原遺跡と周辺遺跡の様相

1. 縄文時代晩期

縄文時代晩期の土器の大半は沼から出土しており、当該期の遺物を伴う明確な遺構が存在しないため、その具体的な活動は明らかではない。当時蛇行して流れていた神通川・常願寺川の氾濫原であった下流域に縄文晩期以降に人々の活動が及んだ際に、周辺に比べ相対的に標高が高い当地域は比較的利用が容易であったと考えられ、土地利用が活発に行われてきたと推察できる。当該期の遺跡として、周辺に約400m南西に豊田遺跡、約400m西に豊丘町遺跡などがあり、これらの遺跡群と関連して活動が及んだ可能性が高い。また1995年度調査区の旧沼地からは、意図的に破壊された御物石器などが出土しており、祭祀場の可能性を指摘している（堀沢1998）。

2. 弥生時代中期～古墳時代前期前半

今年度調査区では、弥生時代を通じて活動を証する遺構・遺物はほとんど確認できず、遺構・遺物の時期は古墳時代初頭から前期前半にかけてである。SP27出土の柱の放射性炭素年代測定結果で弥生時代中期の年代が出ており、調査区域外に隣接して当該期の遺構が展開している可能性はあるが、ここではむしろ古木効果や材の転用などによって生じる遺構の時期の誤差であると考える。材の転用が行われた場合、その供給元としては、約150m南西に位置する弥生中期の遺跡である豊田遺跡の可能性が高い。

古墳時代初頭（白江式期）～前期前半（古府クルビ式期）の時期の遺構・遺物は他の時代に比して特に充実しており、当遺跡で最も活発な活動が行われた時期である。沼および柱穴から出土した部材加工木の放射性炭素年代測定の結果は、年代幅が前後するものの古墳時代初頭を中心とする年代が出ており、出土遺物と放射性炭素年代測定の整合性が高い白江式期～古府クルビ式期を中心に遺構が展開していたと考えられる。当遺跡から約220m西には古墳時代前期の方墳「ちょうちょう塚」があり、当遺跡はそれを中心とする地域の拠点的集落であると推定される。1995年度の調査では集落の存在は確認できなかったが、今回の調査により同時期の集落が検出され、その蓋然性が高くなった。

以下では、周辺地域との関係を地理的条件を中心にみてみる。当遺跡は、現在の神通川・常願寺川の間に立地する。河道が時代により大きく移動するという課題はあるものの、丘陵や河川等の地理的要因は、生産活動のみならず交通路や地域圏の境界としても重要な位置を占めていたと考えられる。このことから、推定される旧河道を含めた上で、現在の河道をひとつの境界として考察する。

まず近隣の平野部に展開する同時期の集落を大きく呉羽山丘陵の以西・以東で分け、呉羽山

丘陵以東を現在の①神通川左岸、②神通川以東～常願寺川以西、③常願寺川右岸白岩川流域という範囲で集落の時代と構造をみてみる（第 29 図）。①には、打出遺跡（法仏式期～高畠式期）、江代割遺跡（古府クルビ式期）、八町Ⅱ遺跡（高畠式期）があり、掘立柱建物や竪穴建物などが確認されたほか、布留系甕が出土している。また墓域として「百塚古墳群」（月影式期～古府クルビ式期）がある。②には当遺跡のほか飯野新屋遺跡（月影式期・古府クルビ式期）があり、この地域は「ちょうちょう塚」を中心とする半径2㎞の同心円内におさまる。布留傾向・布留系甕は出土していない。③には古墳時代前期の前方後方墳「竹内天神堂古墳」があり、それを中心とした半径2㎞の同心円圏内に、新堀西遺跡（月影式期～古府クルビ式期）、仏生寺跡（白江式期）、竹内東芦原遺跡（月影式期～白江式期）、浦田遺跡（古府クルビ式期）などがあり、竪穴建物や平地式建物などが確認されたほか、布留系甕が出土した遺跡も含まれる。また、やや半径2kmの圏外となるが、焼失住居を含む竪穴住居群が検出された利田横枕遺跡（古府クルビ～高畠式期）もある。

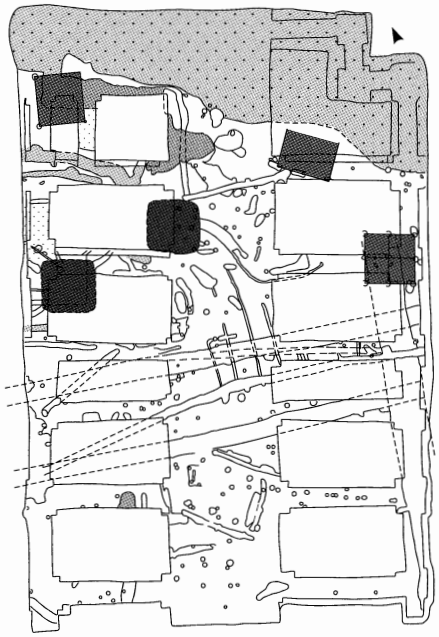
弥生時代終末期から古墳時代前期の富山東部の集落は、月影Ⅰ式期から月影Ⅱ式期と、白江式期から古府クルビ式期の2つの段階に断絶する集落が多いとされる。月影式期の集落の断絶は、江上A遺跡のような防禦的集落を中心とする各地域の集落群が解体・消滅し、より広域で階層化された集落として造営・再編された結果と考えられている。一方、白江式期 - 古府クルビ式期の集落の断絶は、前方後円墳や布留系統甕の波及にみられる畿内の強い影響の下で生じた全国的な規模での地域王権の格付けに伴う地域内における階層化の整備とその完成の結果と考えられている（高橋 1995）。このふたつの時期で断絶せず長期間存続する集落は、その後の調査により増加し、これらの集落は地域的な拠点的集落である可能性が高い。①では、神通川河口付近に位置する地理的重要性や鉄器の保有状況から打出遺跡が拠点的集落と位置付けられ（小黒 2006）、③では布掘建物の存在や装飾器台・布留系甕の出土という非在地的な要素がみられることから、対外的な交流が活発に行われたとして、新堀西遺跡が拠点的集落であると位置づけられている（青山 2013）。

本年度調査区単独でみてみると、白江式期新相を中心とした白江式古相から古府クルビ式期にかけてのほぼ単一期の集落と考える。一方、1995 年度調査区では月影式～白江式期の遺物が多量に出土しており、当調査区が集落内における中心の移動または集落の拡大の結果であると捉えられ、豊田大塚・中吉原遺跡が月影式期から古府クルビ式期まで継続して存続した集落であると考えられる。このことから、当遺跡が②の地域における拠点的集落であり、当集落を中心とする集団の首長の墓として古墳時代前期の方墳「ちょうちょう塚」を築造した可能性が高い。

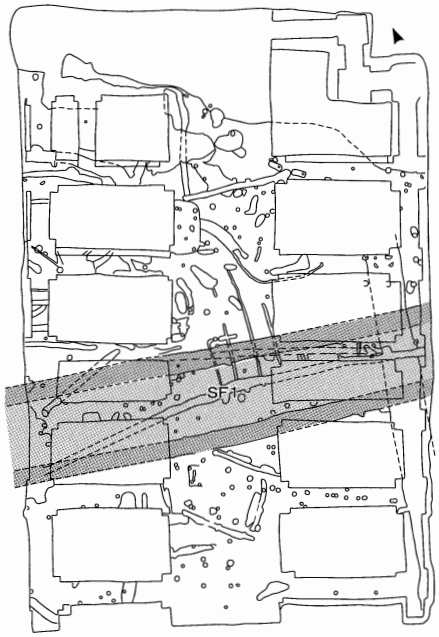
3. 古 代（第 30・31 図）

古代の遺構で特筆すべきは、調査区中央を東西方向に横断する2本の溝SD94 およびSD169 である。SD94 を北側側溝、SD169 を南側の側溝とする。調査では、礫敷や路面の整地、硬化面、波板状の痕跡などは認められなかったが、道路状遺構（SF1）とした。いずれも溝の幅は約 1.7mであり、側溝中心間の幅は 7.2m（以下、幅と表記）、遺構検出面での路面は幅約 5.5mを測る。軸方向はN-77° -Eである。当該期の主要な古代の遺構は道路状遺構が存在するのみであり、遺構出土遺物がほとんどないことから、包含層出土遺物を含めて遺構の時期を考察すると9世紀となる。1995 年度調査区の遺物は概ね9世紀後半としたことから、古代律令祭祀具が出土した 1995 年度調査区の溝とほぼ同じ時期に機能していた道路状遺構と推定できる。

以下、当遺跡周辺地域の古代道路に関する考察と、近年の発掘調査における古代北陸道に関する成果を確認し、当遺跡で確認した道路状遺構を位置づける。



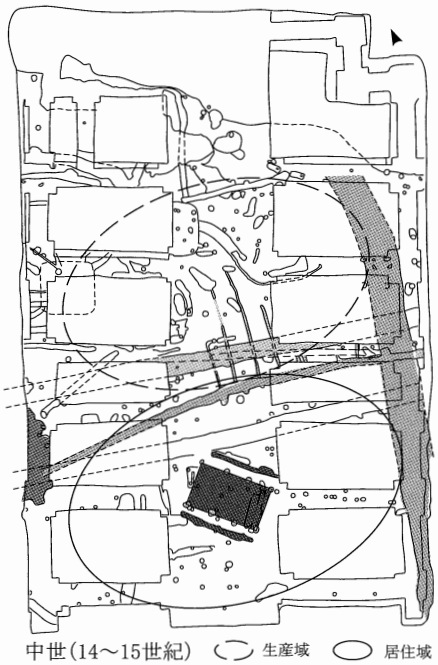
古墳時代初頭～前期前半



古代(9世紀)

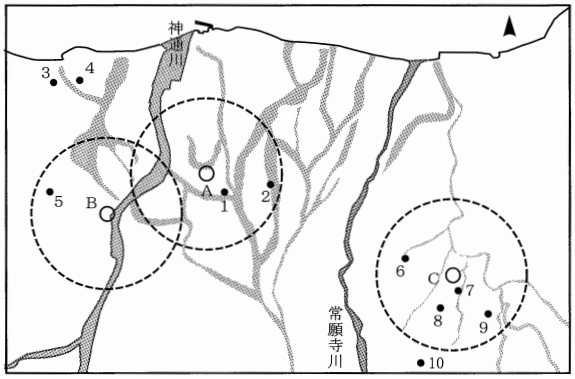
推定道路側溝

路面部分



中世(14～15世紀)　生産域　居住域

第28図　主要遺構の変遷と周辺の遺跡

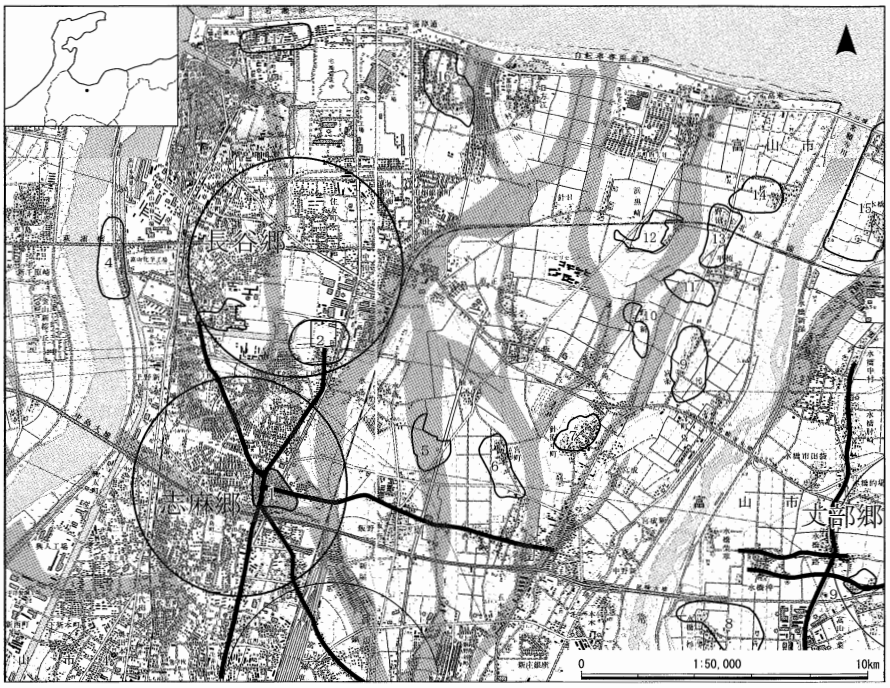


A　ちょうちょう塚（古墳時代前期）
B　百塚古墳群（弥生時代終末～古墳時代前期）
C　竹内天神堂古墳（古墳時代前期）
1.　豊田大塚・中吉原（月影～古府クルビ式期）
2.　飯野新屋（月影式期・古府クルビ式期）
3.　打出（法仏～高畠式期）
4.　江代割（古府クルビ式期）
5.　八町Ⅱ（高畠式期）
6.　新堀西遺跡（月影～古府クルビ式期）
7.　仏生寺跡（白江式期）
8.　竹内東芦原（月影～白江式期）
9.　浦田（古府クルビ式期）
10. 利田横枕（古府クルビ～高畠式期）

古墳・墓域及び半径２km圏

旧河道

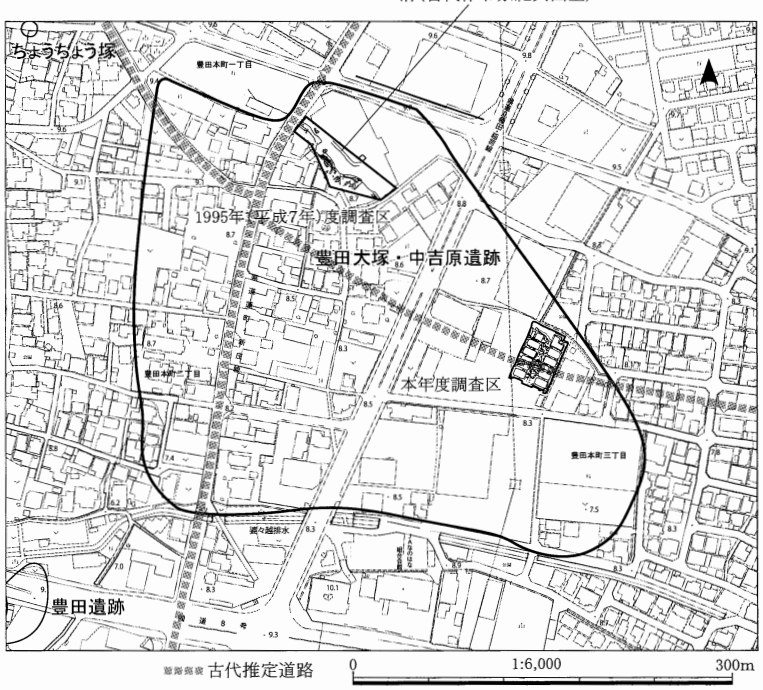
第29図　古墳時代の周辺遺跡の様相



第30図　古代の推定道路と集落遺跡・荘園比(擬)定地　旧河道

(藤田2004、青山2013を参考に作成)

1. 豊田大塚・中吉原遺跡　2　米田大覚遺跡(「新川郡衙」比定地)　3　蓮町遺跡(「磐瀬駅」比定地)　4.千原崎遺跡
5. 飯野新屋遺跡　6.宮町遺跡　7.針原中町Ⅱ遺跡　8.水橋二杉遺跡　9.宮条南遺跡
10.高島島浦遺跡　11.野中新長幅遺跡　12.浜黒崎悪地遺跡　13.浜黒崎野田・平榎遺跡　14.横越遺跡
15.水橋荒町・辻ケ堂遺跡(「水橋駅」比定地)　16.大村遺跡　17.岩瀬天神遺跡



第31図　古代推定道路図

当遺跡周辺地域の古代道路に関する考察には、古くは久々忠義氏、藤田富士夫氏によるものがあり、近年では両者の成果をもとにした水橋金広・中馬場遺跡（「丈部荘／郷」比定地）における青山晃氏のものがある(第30図)。当遺跡が関連する考察をみてみると、当地は古代における交通の要衝であり、北は米田大覚遺跡（「磐瀬駅」比定地／久々 2004・新川郡衙比定地）や蓮町遺跡周辺（「磐瀬駅」比定地）と結ばれる南北ルートの中継点であるとともに、東は水橋金広・中馬場遺跡を結ぶ東西ルートの西端に位置付けられる。また同時に当遺跡は新川郡の西端に位置し、「志麻郷」の比定地であるとともに、縄文時代から断続的に続く「伝統的祭祀場」とも考えられている（藤田 2004)。

富山県内における近年の古代道路に関する発掘調査の成果としては、水橋金広・中馬場遺跡（富山市)、赤井南遺跡（射水市）などがある。

水橋金広・中馬場遺跡は、当遺跡から真東から約7°南へ振れた東東南約7kmに位置する遺跡で、幅 8.2 ～ 9.0mと幅 5.2 ～ 6.2mを測る古代の新旧道路が検出されており、その軸方向はN- 50° -Wである。当調査区で検出したSF1は「丈部郷」比定地に向いて伸びていることから、水橋金広・中馬場遺跡で検出された古代道路と連結し、藤田・青山両氏が指摘する「志麻郷」と「丈部郷」を結ぶ東西ルートの可能性がある。

赤井南遺跡では、東西方向（路面幅約 7 ～ 8m、幅約 11m ）と、それに直交する形で南北方向に延びる古代道路（路面幅約 3.5m、幅約 4.5m）が検出された。両者の交差点の北西から人面墨書土器等の古代律令祭祀具が出土しており、『延喜式』にみられる「道饗祭」のような祭祀が行われる場があった可能性が越前慎子氏により指摘されている（越前 2012)。当遺跡でも同様に、今回の調査区から北西へ 150m離れた 1995 年度調査区において、新川郡衙に比定される米田大覚遺跡への南北道と、「志麻郷」・「丈部郷」等を結ぶ東西道の推定道路交差点の北西に位置する溝から、人面墨書土器や斎串など律令祭祀具が出土している（第 31 図)。このことは赤井南遺跡と同様に、交差点付近で祭祀を行っていた可能性を示唆している。

4. 中 世

中世の遺構には掘立柱建物SB4、調査区東端を南北方向に縦断する区画溝SD14、貯水池状遺構SX201 及びそれと連結する灌漑用水路SD170 等がある。調査区中央には、SD170 とほぼ直交し北側に延びる鋤溝群（SN1）があることから、SD170 北側に中世の生産域が、SB4を検出した南側に居住域が展開していたと考えられる。また古代道路状遺構の北側側溝であるSD94 からは中世の遺物が出土しているが、生産域となった時期の混入と考えられる。

中世の遺構出土遺物も非常に少なく、遺物包含層を含めた全ての出土遺物の様相から時期を判断した。出土した中世の遺物の年代は、ほとんどの中世土師器の皿が越前編年NDⅡ類で13～14 世紀、珠洲は吉岡編年Ⅱ～Ⅲ期のものが中心で 13 世紀後半、中国製青磁が 13 世紀初頭から前半までの標識土器であることから、13 世紀後半を中心に存続した集落であると推察できる。ただ、SD170 からは 15 世紀の瀬戸碗が出土しており、灌漑用水路はその頃まで利用された可能性がある。一方、近世以降については、遺構及び遺構の時期を判断できる遺物が出土しておらず、近代に至るまで土地利用は低調であった可能性が高い。

第2節 古墳時代初頭～前期土師器の組成及び編年的位置付け

今回の調査において、当該期の竪穴建物SI107 や大型土坑SK35、沼SD01 等からまとまった量の古墳時代初頭～前期の土師器が出土した。ここでは上記の遺構から出土した残存率の高い遺物の組成及び編年的位置づけを中心にみていくことで、それぞれの遺構及び遺跡全体の位置付けを確認する。なお土器組成については、図化していない残存率の高い破片資料も含めて検討する。

北陸では弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、多くの旧集落の断絶と新集落の誕生が進んだとされる。月影式期（ほぼ在地系の土器一色）から、白江式期（「近江・東海系」を中心とする外来系の波及による土器様式の大きな変化）を経て古府クルビ式期（布留系など「畿内系」の波及と月影式の消滅）・高畠式期（「畿内系」への集約）に下るにつれ、在地系から外来系土器へ、外来系のなかでも組成が大きく転換していくとされる。その過程で地域・集落により一定の選択性が働き、受容の差として現れたことが分かっている。たとえば、県内の器種別の組成は、月影式期から白江式期、古府クルビ式期と時期が下るに従い甕の比率が増加し、壺が減少する傾向があり、甕の口縁形態をみてみると、県中央部では白江式期においても擬凹線・有段甕が主体である一方、県東部では「く」の字口縁に転換する傾向があるとされる（河合 1997）。

以下では、遺構毎に土師器の出土状況と器種種別の傾向をもとに検討を行う（第 10・11 表）。土器組成については本文中で使用した古墳時代土師器の器種分類（第5図）をそのまま使用した。

1. SD01

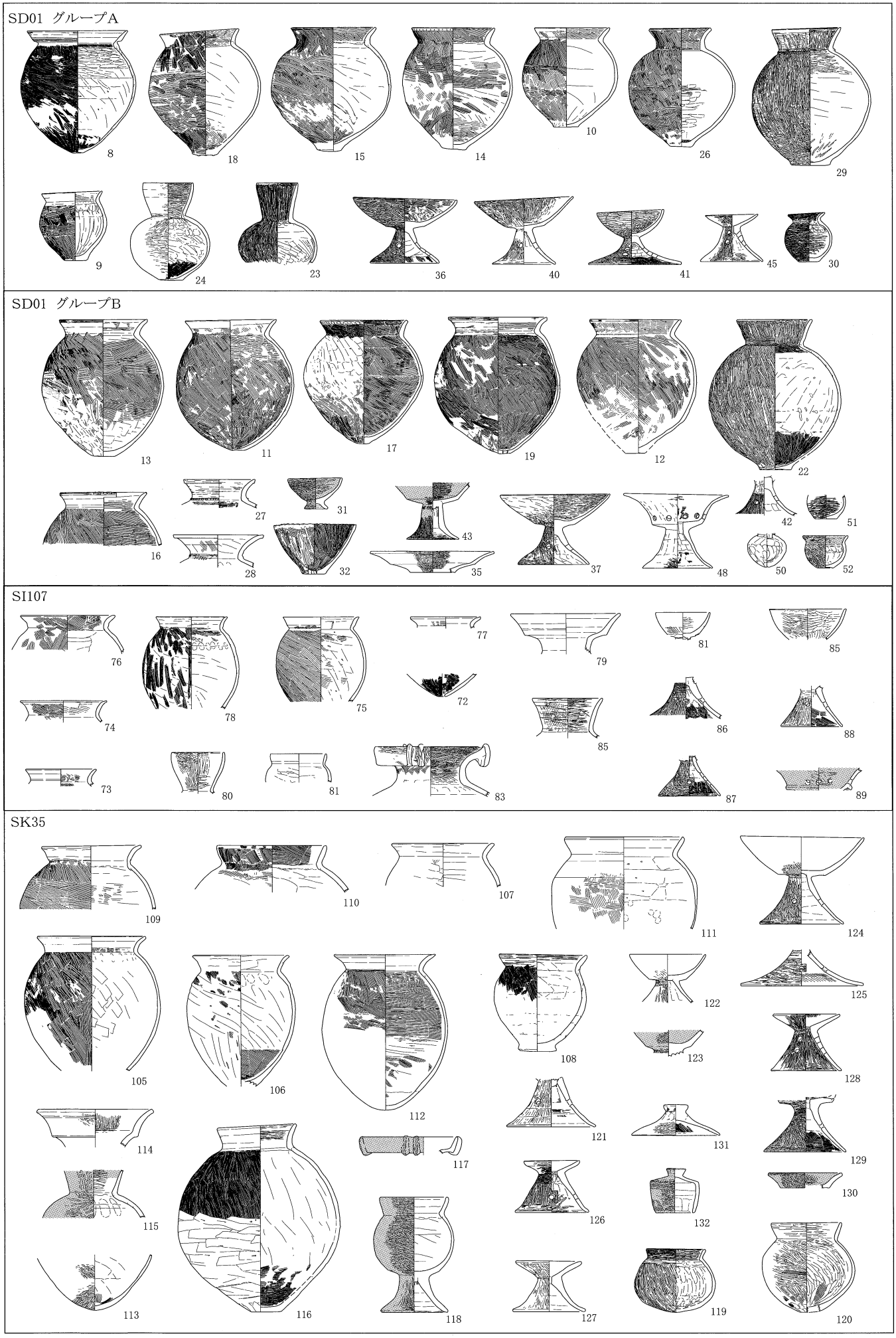
SD01 は調査区北端、調査対象全面積の1 /5以上を占める沼であり、まとまった量の土器廃棄や水辺での祭祀と考えられる痕跡が確認された。残存率の高い土器は、南側肩部分中央の4カ所（第4図①～④）及び調査区北東（第4図⑤⑥）から集中して出土した。これを出土地点と埋土の層位等の共通項でグループ分けすると、以下のようになる。

グループA（第7図①～③）：出土地点が海抜約 7.0mで埋土第2層最下部で第3層または地山の直上、直径3mの円内の狭い範囲に集中している点、遺物種類が土器のみで構成され木製品が混在しない点、据え置かれたような状態で遺物が出土した点が一致する。出土遺物の比率は、甕・壺・高坏がほぼ同数で 96%を占める。①については中央に石を配置し、その周りに甕が意識的に破砕した様相を呈して出土しており、水辺で行われる祭祀を行った可能性が高い。帰属時期は、月影式期に盛行する装飾器台や台付装飾細頸壺など「最も格式の高い」祭式土器は伴わない点、畿内系の高坏（41）や小型器台（45）とともに布留式甕の技法を受容した折衷型壺（29）などが出土した点などから、白江式期の新相と考えられる。

グループB（第7図④～⑥）：出土地点が海抜約 6.5mで埋土第3層中ほどであること、直径で5m以上離れた広範囲に分散している点、遺物種類が土器と部材加工木・自然木が混在して出土した点が共通する。出土土器の比率は、甕・壺・高坏の他、鉢や器台、ミニチュア・小型土器など多様な器種が一定量出土しており、偏りがないことが特色である。その一方、畿内系の土器は含まない。このうち⑤付近では調査区外東側を中心とした広範囲に土器が広がることが確認した。④から出土した部材加工木や自然木に関しては、水辺に何らかの施設を構築した痕跡はみられず、南側の岸辺から土器と共に廃棄した可能性が高い。帰属時期は、弥生土器の系譜を持つ底部穿孔鉢（32）や拡張口縁高坏（35）、退化形態の有段口縁壺（22）や器台（48）が伴うこと等からグループ A よりやや古く、白江式新相の古い時期と考える。

2. SI107

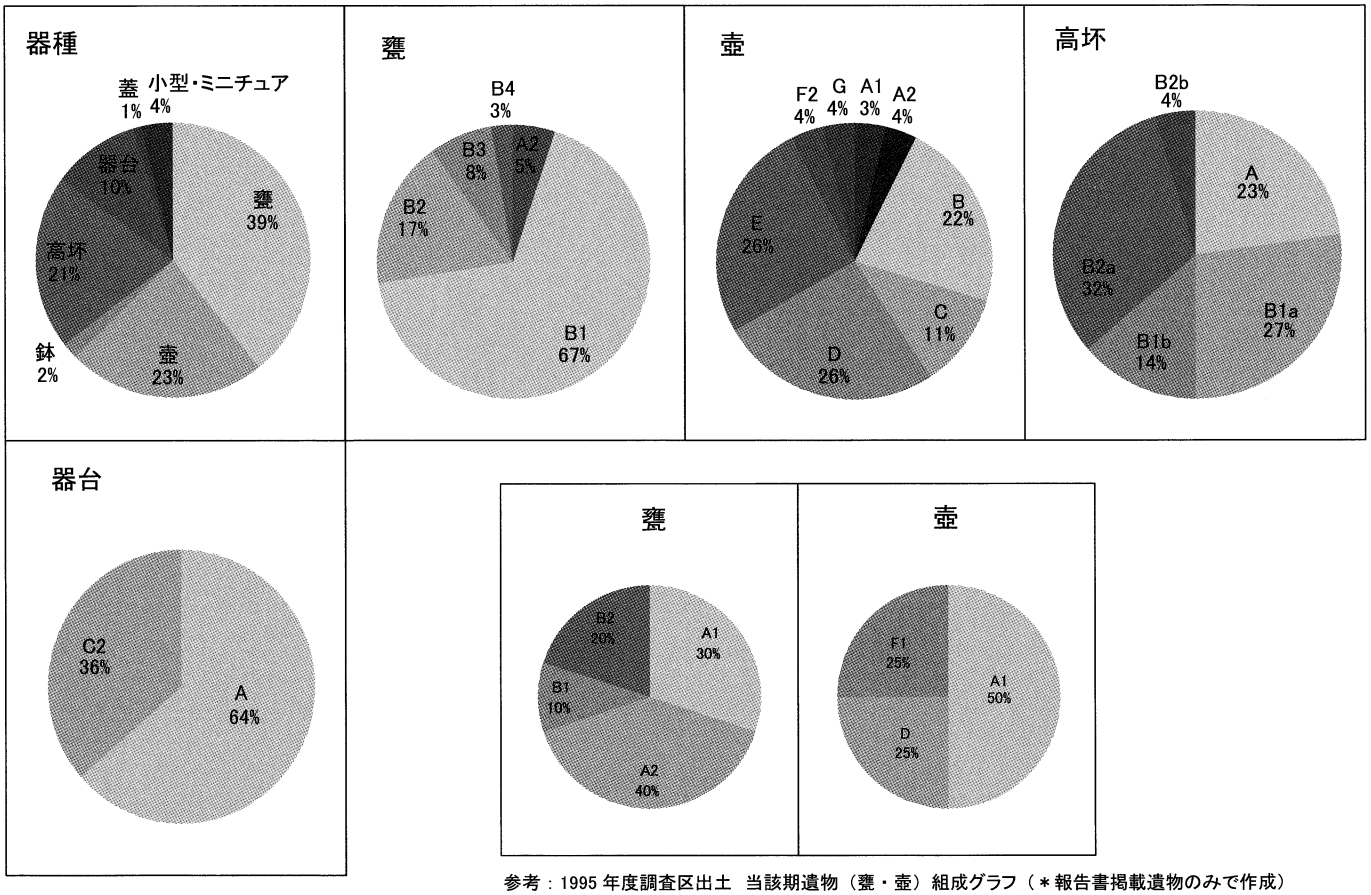
調査区北西に位置する竪穴建物である。調査対象外区域に拡がるため、実際に調査した範囲は遺構全体の一部である。遺物は遺構全面から出土し、調査対象外区域にも拡がると推察できる。残存率の高い土器の比率は、甕・壺・器台で 90%以上を占める。出土遺物をみてみると、在地系の甕A、畿内系の土器が含まれない。SD01 グループBとほぼ同時期、白江式期の新相のやや古い時期と考える。出土した遺物の中で、大型壺 E は、赤彩や棒状浮文を施した口縁部のほかにも、体部片が2個体分、まとめて廃棄されたと考えられる状態で出土した。また、赤彩を施し受部に円孔を穿つ退化形態の装飾器台（89）も出土したことから、能登および能登を通した近江・東海の影響がうかがえる。



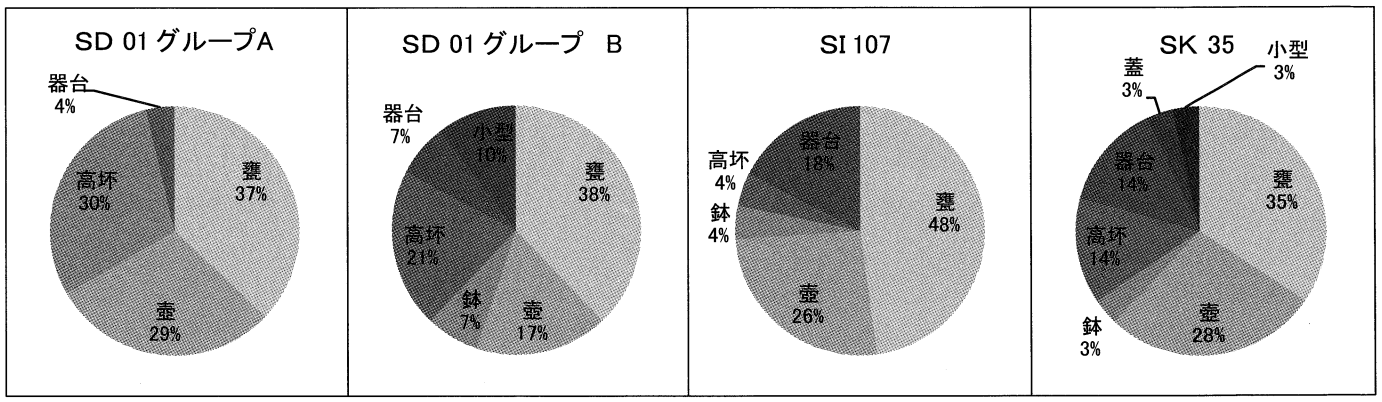
第32図　古墳時代主要遺構出土遺物

			甕								壺									鉢		高杯					器台			蓋		小型		計
			A1	A2	B1	B2	B3	B4	C	D	A1	A2	B	C	D	E	F1	F2	G	A	B	A	B1a	B1b	B2a	B2b	A	B	C2	A	B	A	B	
SD01	グループA	①			1								1						1								1							4
		②		1	4	1							1		1	1						1	1	1	1									13
		③		1	1	1							1		1	1						1	1	1	1									10
	グループB	④													1							1			1		1		1			1	2	8
		⑤			9	2								1							1	1	1			1								16
		⑥											1		2					1		1												5
SK35					7	2	1				1		1	2	1	2		1					2	1	1		2		2		1		1	28
SI107				2	5	1	2	1				1	1		1	3							1		3		3		1					25
分類別 小計				4	27	7	3	1			1	1	6	3	7	7		1	1	1	1	5	6	3	7	1	7		4		1	1	3	109
器種別 合計			42								25									2		22					11			1		4		109

第10表　主要遺構古墳時代土器出土点数



参考：1995 年度調査区出土　当該期遺物（甕・壺）組成グラフ（＊報告書掲載遺物のみで作成）



第11表　主要遺構出土古墳時代土師器　器種・組成グラフ

3. SK35

調査区北側、沼SD01 湖畔的立地に位置し、祭祀場または作業場ののち土器廃棄場として転用された可能性のある大型土坑である。残存率の高い土器は南側を中心に出土しており、甕が 35%、壺が 28%、高坏・器台がそれぞれ 14%が出土したほか、ほぼ完形の蓋・小型精製土器も一定量数出土した。遺物の帰属時期は主に白江式期新相の様相を呈し、SD01 グループAとほぼ同時期の遺構であると考える。そのなかでやや古い時期のものと考える赤彩を施した壺（115）や台付壺（118）等は、二次被熱した痕跡が残ることから、祭祀に使用した可能性がある。また、これら祭祀で使用された土器が、SD01 グループBにみられるように、最終的に沼SD01 に廃棄したと推察する。台付壺（甕）は江上A遺跡（上市町）、二口油免遺跡・HS－04 遺跡（射水市）、蔵野町東遺跡（高岡市）等で有段口縁を持つものが出土しており、その形状は弥生台付甕の系譜のものである。このほか細頸壺とセット関係にあると推察される有鈕筒状蓋（132）が出土した。これは県内での出土事例が少なく、蔵野町東遺跡の自然流路における祭祀場、利田横枕遺跡の焼失住居（旧立山町）のみで出土事例が確認できた。

以上、当調査区の主要遺構で出土した遺物を概観した。次に主要な土師器の種別・器形毎にみられる特徴から、当調査区の傾向を述べる。

甕：口縁端部に面を取る「能登形」甕を含めた「く」の字口縁を持つ甕Bが全体の 95%以上を占める。出土比率は、B1が約 45%、B2が約 30%を占めるほか、口縁端部の仕上げを省略するものも約 15%確認できる。口縁端部外面にキザミを施すものや指頭圧痕を巡らすもの、口縁部外面のヨコナデを省略するもの、体部外面上半にタタキ痕を残すなど、様々な調整方法がみられる。在地系の有段口縁甕Aはほとんど出土しておらず、大部分が淘汰・消滅している。残存するものは退化形態のみである。富山県東部では甕Aの比率は白江式期までは高く、古府クルビ式期でほぼ淘汰される傾向がみられ、当集落では白江式期には甕Bへの移行が急速に進んだと考えられる。口縁端部を肥厚させないが、端部内面に面を取る布留甕の様式を一部受容した布留傾向・布留系口縁の折衷型の壺は出土するものの、布留甕や山陰系は皆無で、近江・東海系のS字甕や台付甕も出土せず、外来系甕の受容がみられない。

壺：月影式期から継続する在地系の壺Aは皆無である。出土量は少ないものの、壺B・D・Eがそれぞれ小型・中型・大型壺の領域で絶対的な割合を占める。壺Bは直口口縁壺で小型の精製品である。口縁部が膨らみ立ち上がり、端部に向かって内湾するものと、直線的に立ち上がるものがある。比率は 22%を占める。壺Cは短頸壺で口縁が端部に向かって内湾気味に立ち上がる。外面に赤彩を施すものもみられる。壺Dは広義の広口口縁壺で、口縁端部に面を取るものや、月影式の大型壺に系譜を持つとされる、頸部に刻入突帯を巡らすものが一定量出土した。中型壺の主体をなすと考えられるが、出土比率は 26%である。なかでも壺 D3 は口縁端部外面とともに内面にも上方に向かって面をとり、布留甕の口縁形態を受容した折衷型であり、畿内の影響の地域的特色が現れたものととらえられる。壺Eは棒状浮文を口縁端部に施した有段口縁と球胴型体部を持つ東海系の壺で、大型のものが多い。口縁部が確認できるものは3個体のみであり、そのほかに体部のみ出土したものが3個体ある。

高坏：月影式期に系譜を持つ在地系の高坏が4分の1、残りを外来系が占める。残存率の高いものは全て外来系であり、出土比率以上に外来系の高坏が占める割合は高い。高坏B1 は、ほぼ水平な杯底部から内湾気味に立ち上がる杯と「ハ」の字状の脚部を持つ。坏部が小型で椀状のものをB1a、大きく拡がるものをB1bとした。出土比率はB1aが 27%、B1bが 14%出土している。B1bの坏部の最終的なミガキが縦方向のものは白江式期、横方向のものは古府クルビ式期に増加するとされており、出土

した高坏 B1 の約 80%が縦方向である。 高坏B2：坏部が丸椀状で開脚高坏のものをB2a，脚底部が下部で強く屈曲し広がるものをB2bとした。 出土量はB2aが 5 点前後、B2bが 2 ～ 3 点である。

器台:外来系の小型器台Aへの移行が進み、3分の2を占める。器高10㎝前後の外来系小型器台で、ミガキ調整を丁寧に施した精製品が多い。 口縁端部に面を取り、端面に綾杉文を施したものもみられる。受部底部から脚部への穿孔を施さない小型器台Bが 1 点出土した。 県内での出土事例は少ない。 器台Bは月影式期以前に導入された器台の系譜を持つもので、 有段口縁器台C1が 1 点、 装飾器台の系譜で受部に円孔を穿つ退化形態の器台C2が完形に近い状態で 1 点出土した。

以上、古墳時代初頭前後の土器について概観した。 全体をみると、「く」の字口縁甕、外来系の高坏・小型器台が高い割合を占める。 壺は容量により盛行する器形は異なるが、 いずれも白江式期以降に盛行するものである。 有段口縁を持つものは退化形態のものがみられる程度で、 ほぼ払拭されている。

古府クルビ式期に現れる布留傾向甕はないが、 その口縁部形態の特徴が壺D3に折衷様式として受容されたことが確認できた。

このことから当調査区の出土遺物の特徴は第一に、 白江式期新相から古府クルビ式期の土器群にもかかわらず、 甕Aがほとんど出土していないこと、 第二に県内で出土事例が少ない壺F（台付壺） や蓋B（有鈕筒状蓋） などが含まれている一方、 残存率の高い台付装飾壺や装飾器台などはみられないことである。

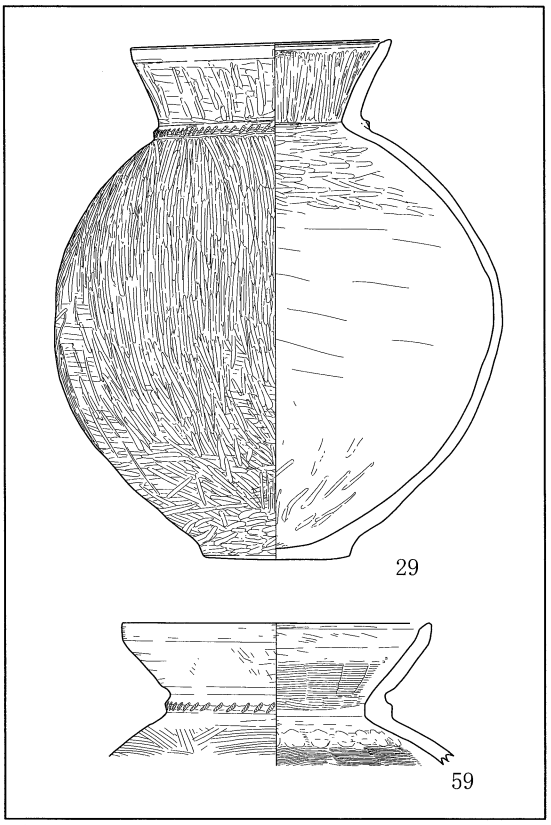
第一の点をみると、 富山東部地域に位置する新堀西遺跡など月影式期からの長期継続集落では、古府クルビ式期以降も高い割合で有段口縁の土器が残存する傾向がある。 白江式期～古府クルビ式期の集落にもかかわらず甕 A が淘汰されている点からは、 外来系の集団の入植の可能性が考えられ、この場合、 出土遺物の特徴から、 能登方面の可能性が高い。 一方、 1995 年度調査区から出土した土器は第 11 表のグラフにみられるように甕Aや壺Aの比率が高く、 月影式期の色合いが濃いことから、方墳「ちょうちょう塚」を築造した地域の拠点的集落が弥生終末期から白江式期にかけて発展を つづけ中心部が沼に沿って集落が東へ移動または拡張した可能性が推察できる。

第二の点をみると、 当調査区で出土した器種の土器と同様のものが出土している遺跡として、 蔵野町東遺跡がある。 蔵野町東遺跡は弥生時代後期後半の法仏式期から古墳時代初頭の白江式期までの期間を通じて自然流路における祭祀が行われたとされる遺跡で、 細頸台付壺や装飾器台が多量に出土している。 水辺の祭祀場という同様の性質を持つ遺跡にもかかわらず、 当遺跡では残存率の高い装飾器台、 それと併行する時期に富山県北東部で導入される台付装飾壺のいずれも出土していない。 また、これら「格式の高い」 祭式土器は 1995 年度調査区でも出土していない。 あわせて周辺の当該期の遺跡をみてみると、 大規模な調査が行われていないためという可能性はあるものの、 いずれの器種も残存率の高いものは出土していない。 その一方で、 水系の異なる新堀西遺跡では装飾器台が3個体以上、台付装飾壺が5個体以上出土している。 以上のことから、 富山県東西の地域差に加え、 より狭い範囲での受容の違いが存在したと推察出来る。

第3節　折衷型土器について

当調査区SD01 及びSD55 から、 古墳時代遺構出土土師器器種分類（第5図） 壺D3に分類した折衷型土器が出土した。 特徴は①口縁部内面に面を取る技法と、②頸部に刻入突帯文を巡らす技法を併用する点である。SD01 から出土した 29 はやや外傾気味に口縁が立ち上がり、 端部外側に細く面を取る。 中型壺で体部は球胴状を呈し、 底部は平底で安定性を志向した器形である。SD55 から出土した 59 は、 29 に比べ口縁の傾きが急で、 端部外面にしっかりとした面を取る。 体部は出土しておらず形態

は不明である。①は畿内系の布留甕の特徴であり、口縁部を肥厚させないことから布留0式の影響もしくは意識的に受容していない可能性が指摘できる。前述したように、布留傾向甕、布留系甕は八町Ⅱ遺跡や利田横枕遺跡、新堀西遺跡等で出土しており、古府クルビ式期には富山県東部で受容されることが確認できる。当調査区では布留系甕は出土しないにもかかわらず、口縁部の技法のみ受容している点が特徴であり、同様の技法を用いた折衷型壺の出土事例は周辺の遺跡では確認できなかった。②の頸部突帯文は東海系の大型壺に系譜を持つもので、同様の器種器形で口縁部内面に面を取らないものは北陸西部地域で確認されており、富山東部には能登からもらたされた可能性が指摘されている（田中・中谷 2001）。また刻入突帯文は壺（27・28）などにもみられるほか、器台（49・55・142・147）や蓋（132）など精製土器に多用されており、当調査区の集落で好んで使用した技法であると考えられる。



第33図　折衷型土器

こうした折衷型の存在は、在来系から外来系、特に畿内系への移行期である白江式期・古府クルビ式期にみられるものであり、他の集落で確認できない器種（折衷型土器）の存在は、当集落が能登を中心とした他地域との交流が盛んであることとともに、集落や地域の規制やまとまりが緩やかで、外来系の影響の受容を主体的に選択できる状況にあったことを証明するものと考える。（朝田）

参考・引用文献

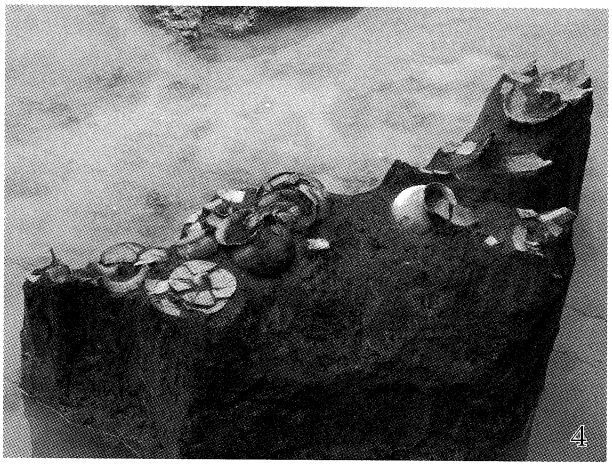
池野正男 2012「越中の古墳時代土器様相」『大境』第31号　富山考古学会
越前慎子 1996「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告』財団法人　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
河合忍 1997「Ⅳ考察　4考察　e甕形土器の口縁部形態類別構成比」『翠尾Ⅰ遺跡』八尾町教育委員会
高橋浩二 1995「越中における古墳出現期の様相」『大境』第17号　富山考古学会
田嶋明人 1986「Ⅳ考察　漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
田中幸生・中谷正和 2001「越中における古墳出現前後の地域別土器編年－甕形土器を中心に－」『蜃気楼』
藤田富士夫 2004「古代越中新川郡の「道」と「郷」に関する若干の考察」『人文社会学研究所年報』№2　敬和学園大学
藤田富士夫・駒見和夫 1981「ちょうちょう塚の概要と若干の考察」『大境』第7号　富山考古学会
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
財団法人　大阪府文化財センター 2003『古墳出現期の土師器と実年代　シンポジウム資料集』
小杉町教育委員会 1999『HS－04遺跡発掘調査報告』
庄内式土器研究会 2003『庄内式土器研究ＸＸⅥ－庄内式併行期の土器生産とその動き－』
立山町教育委員会 2001『利田横枕遺跡－主要地方道富山立山魚津線地方特定道路事業に伴う調査報告書－』
富山市教育委員会 1998『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 2006『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2006『富山市打出遺跡発掘調査報告書－一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告－』
（財）富山県文化振興財団 2012『水上遺跡　赤井南遺跡　安吉遺跡　棚田遺跡　本江大坪Ⅰ遺跡発掘調査報告』
（公財）富山県文化振興財団 2013『上梅沢遺跡　水橋金広・中馬場遺跡　新堀西遺跡発掘調査報告』
（公財）富山県文化振興財団 2013『下黒田遺跡　下佐野遺跡　諏訪遺跡　蔵野町東遺跡　蔵野町遺跡　駒方南遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会 2003『富山県婦中町　鍛冶町遺跡発掘調査報告』
八尾町教育委員会 1997『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書1』

図版1

上：遺跡周辺の航空写真（昭和22年7月撮影）　下：第1工区全景（北から）

図版2

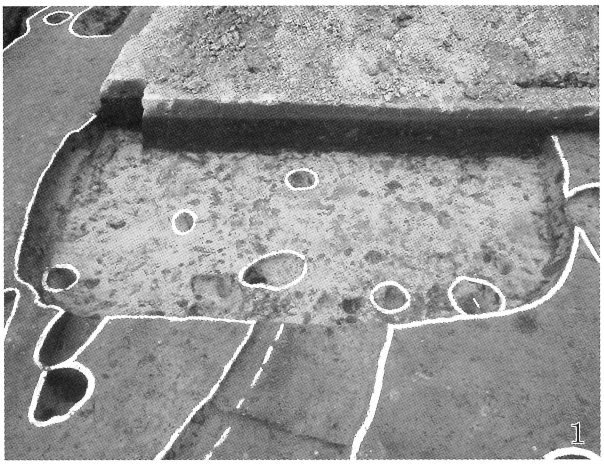
調査区全景（第1・第2工区合成／真上から）

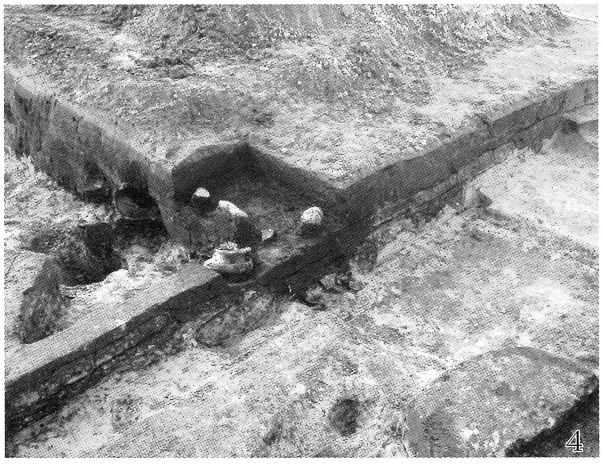


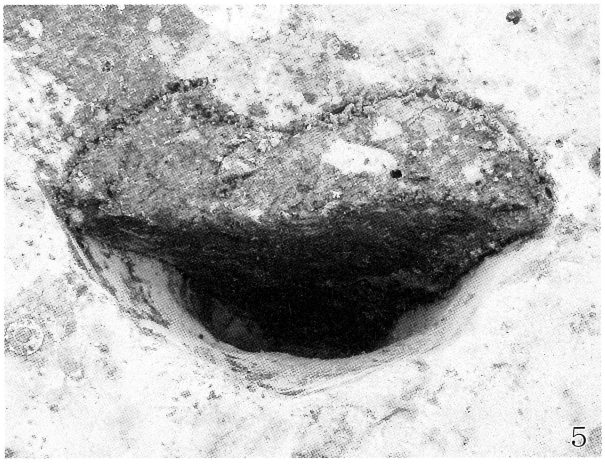
1～5. SD01遺物出土状況(1～3. 南から 4. 北東から 5. 北西から)

図版4

1. SD01遺物出土状況（北西から）　2. 第1工区検出状況（北西から）　3. SD01中央東壁（西から）
4. 第1工区西壁（南東から）　5～7. SD55（2・3. 東から　4. 北から）　8. SK32遺物出土状況（北から）

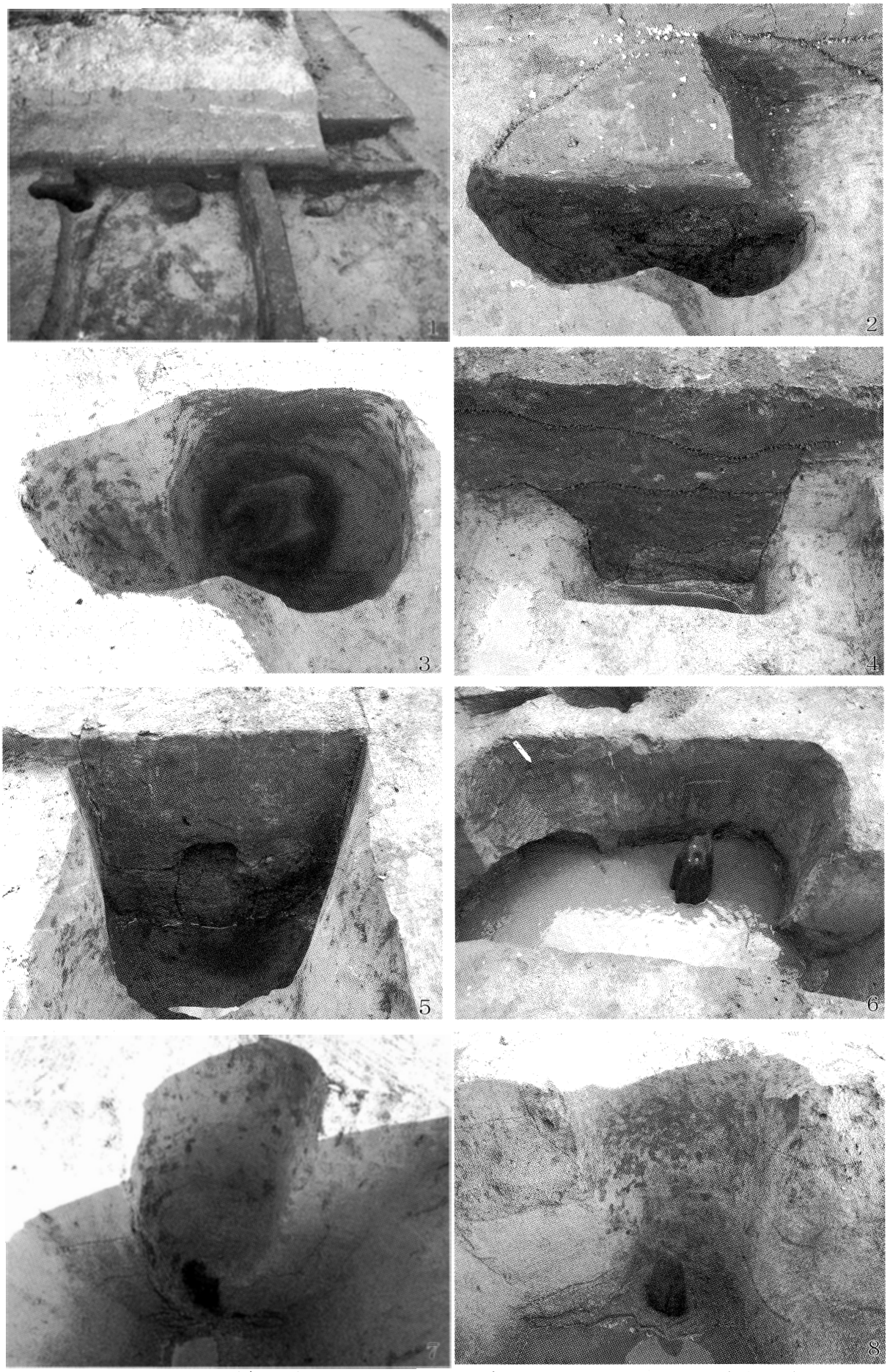




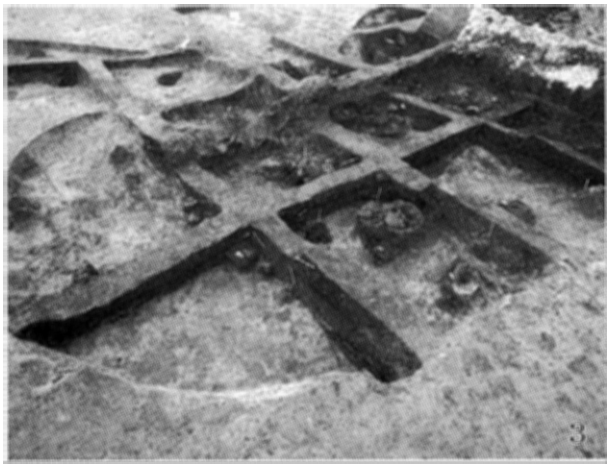


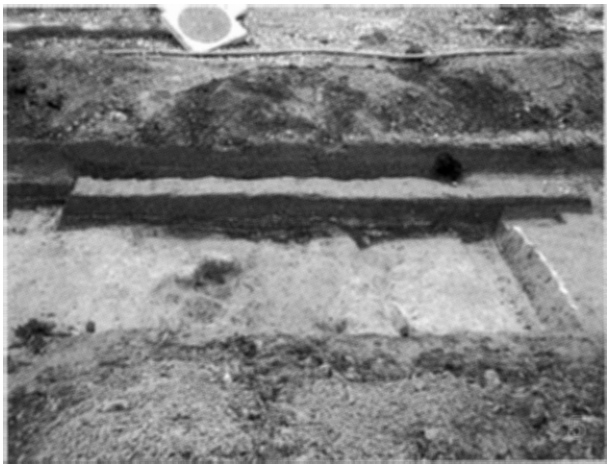
1. SI61完掘（東から） 2. SI61遺物出土状況（南東から） 3. SI107遺物出土状況（北東から）
4. SI107（北から） 5. SK166（北東から）

図版6

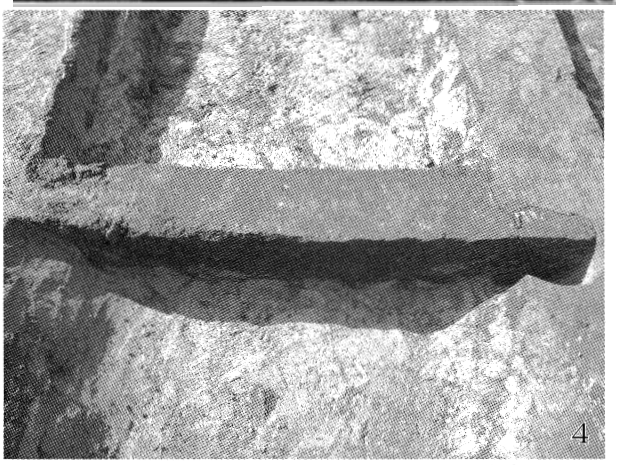


1. SB3 -SP15・SD14（南から）2. SB3 -SP15（南から）3. SB3 -SP15（真上から）
4. SB1 -SP25（北から）5. SB1 -SP26（西から）6. SB1 -SP27（南から）
7. SB2 -SP52（西から）8. SB2 -SP53（西から）

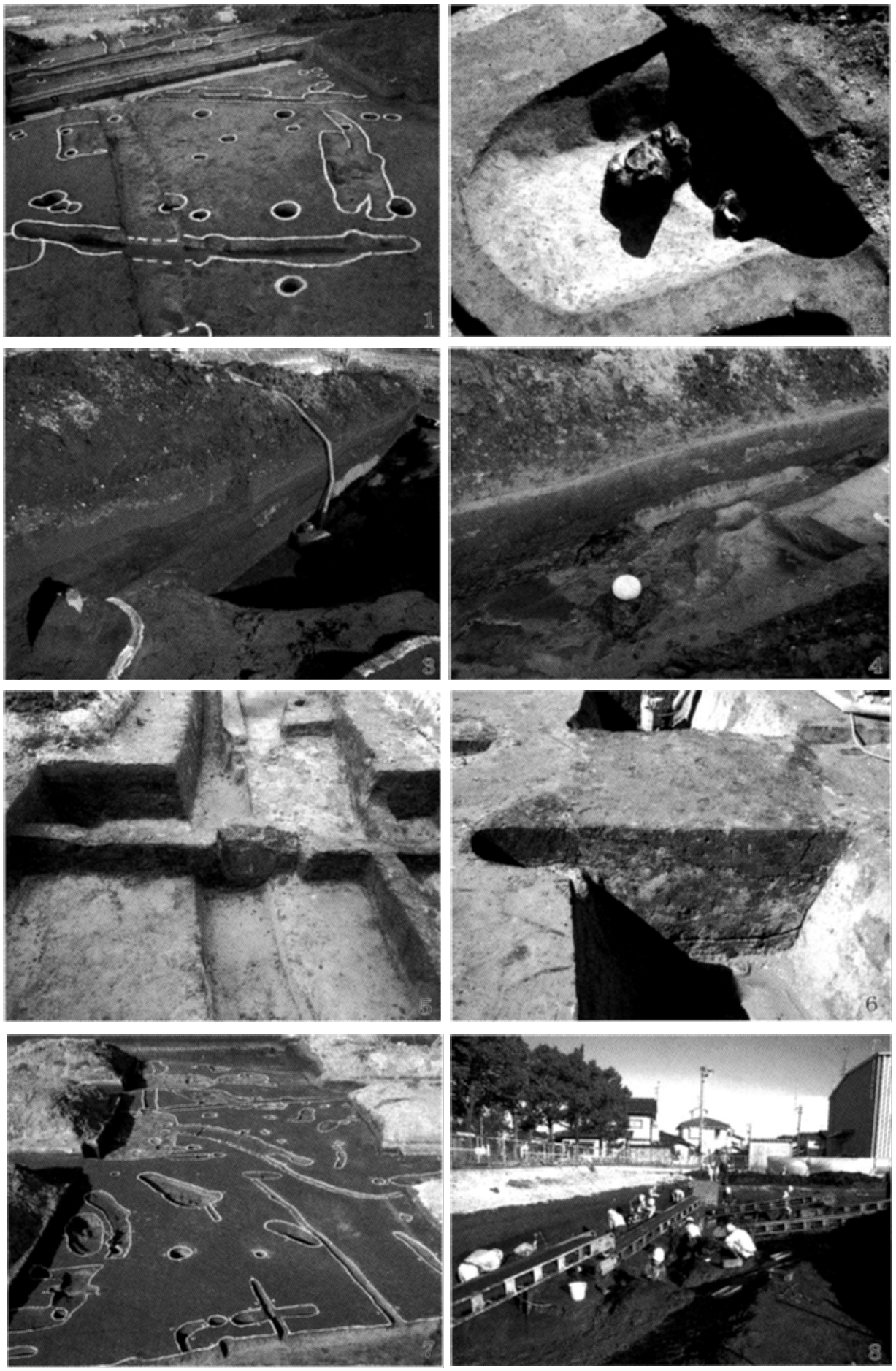




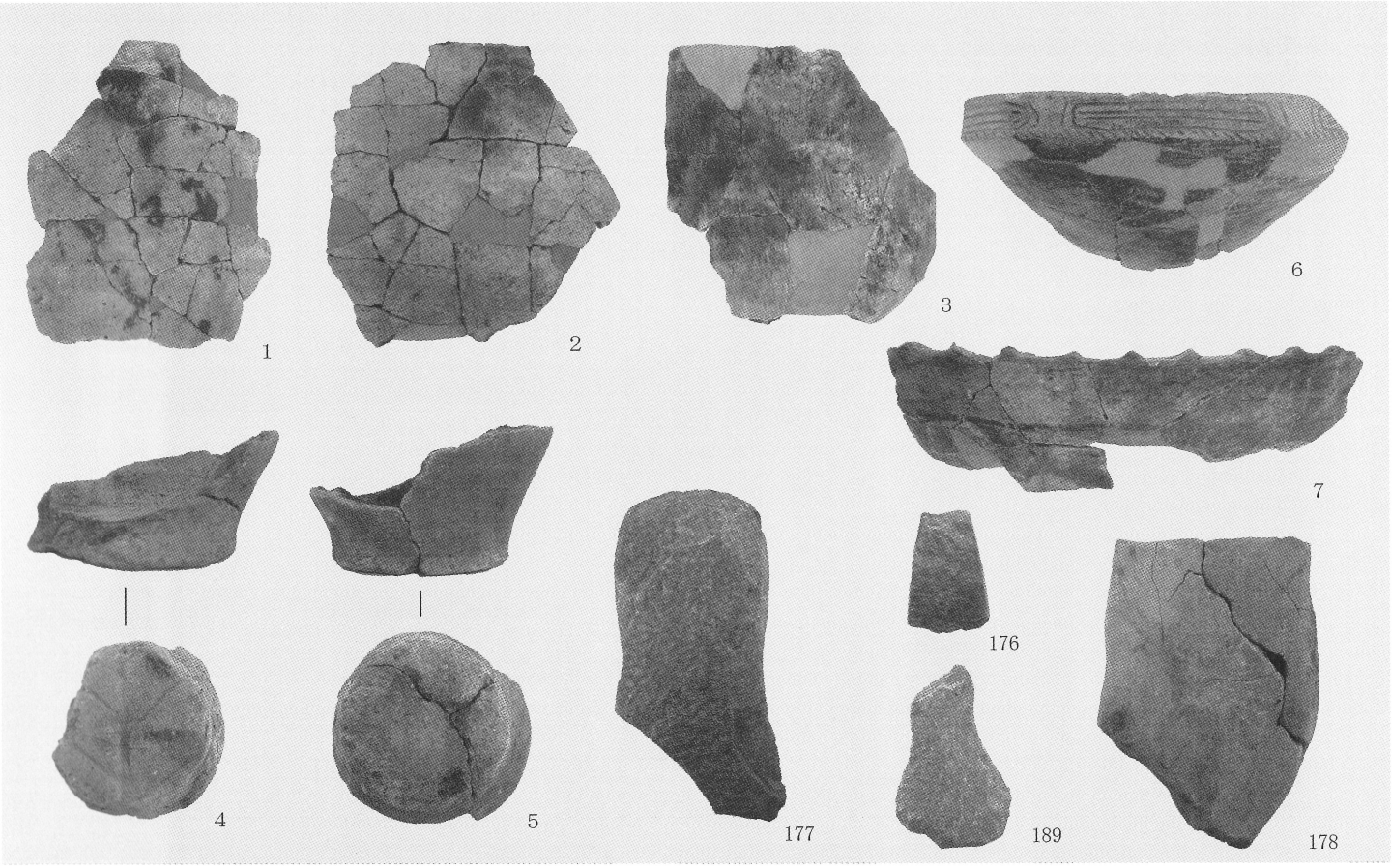
1．SK35遺物出土状況（東から）　2．SK35完掘（東から）　3．SK35（北東から）
4．SX95西壁（南東から）　5．SX157西壁（東から）



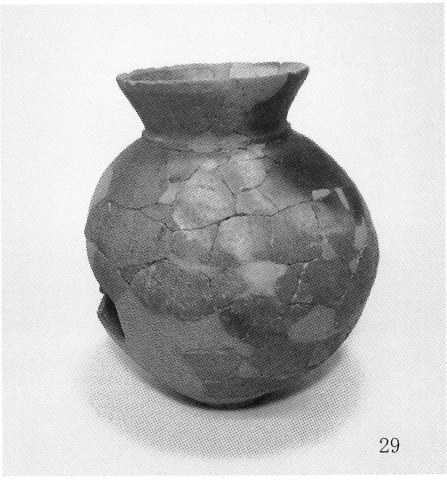
1. 第2工区全景(西から)　2:第2工区完掘(西から)　3. SD188・SD170(東から)
4. SD169・SK218(東から)　5.SD94(西から)



1. SB4（南西から） 2. SK178遺物出土状況（北西から） 3. SX201（南から）
4. SX201遺物出土状況（南東から） 5. SD170・SD14（東から） 6. SD170・SK265（西から）
7. 調査区中央完掘（南から） 8. 作業風景（西から）



土器・石器　SD01



土器　SD01

8

11

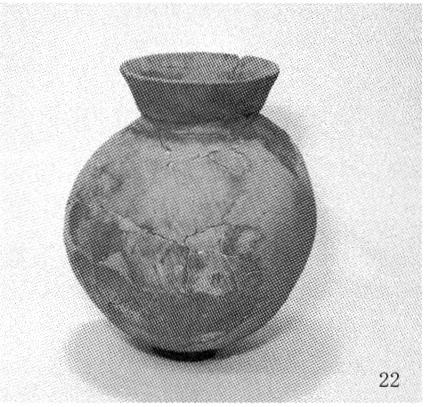
12

13

14

15

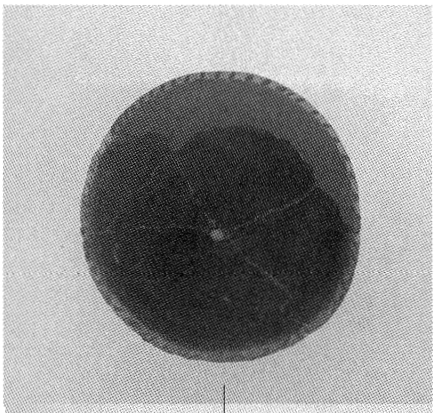
19

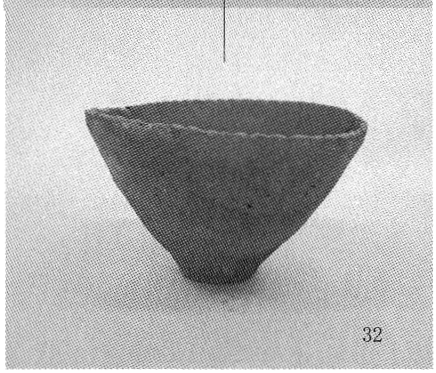

22

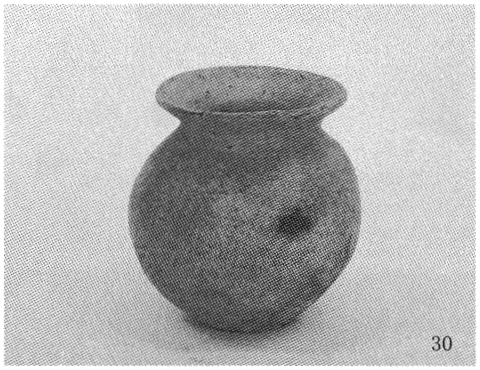
23

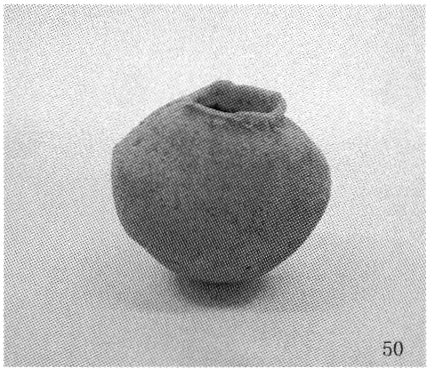
24

31




32


30


50

土器　SD01

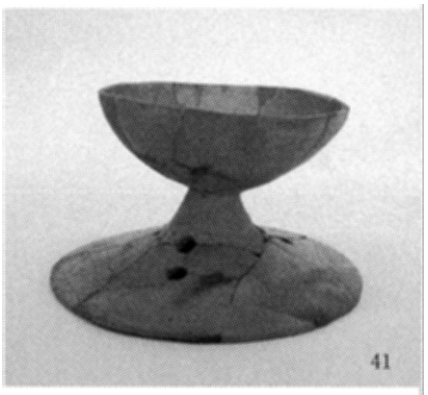
36

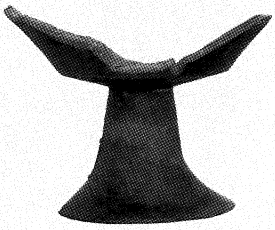
37

38

39

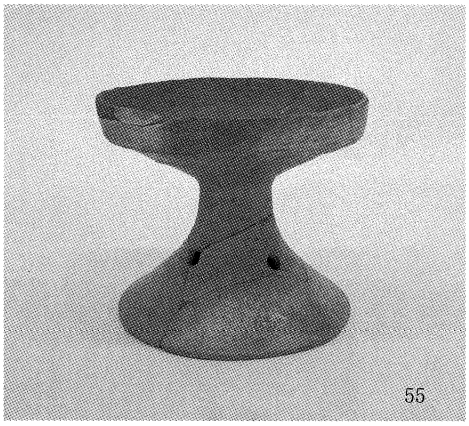
40

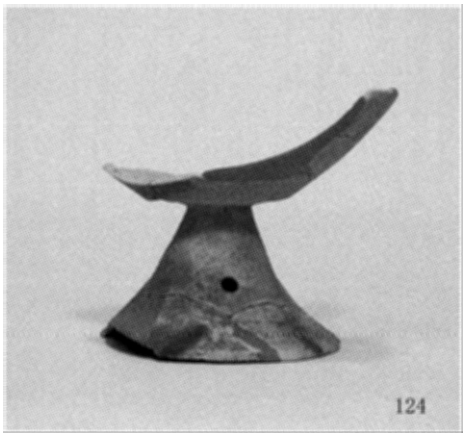

41

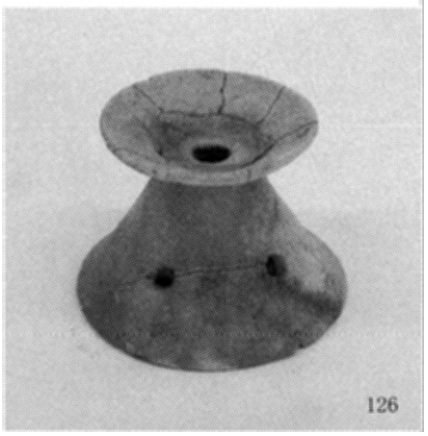

43

48

119

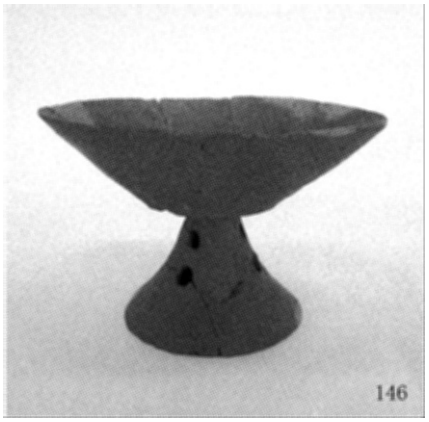

55


124


126

118

132


146

土器　SD01　SD51　SK35　SX157

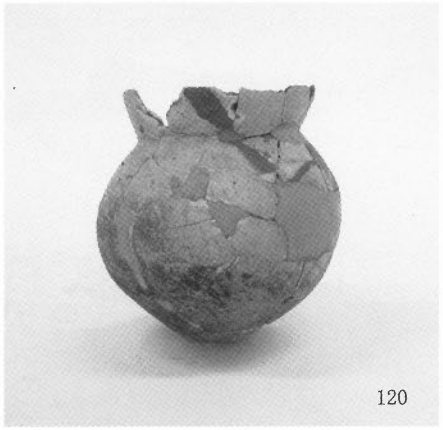
図版14

96

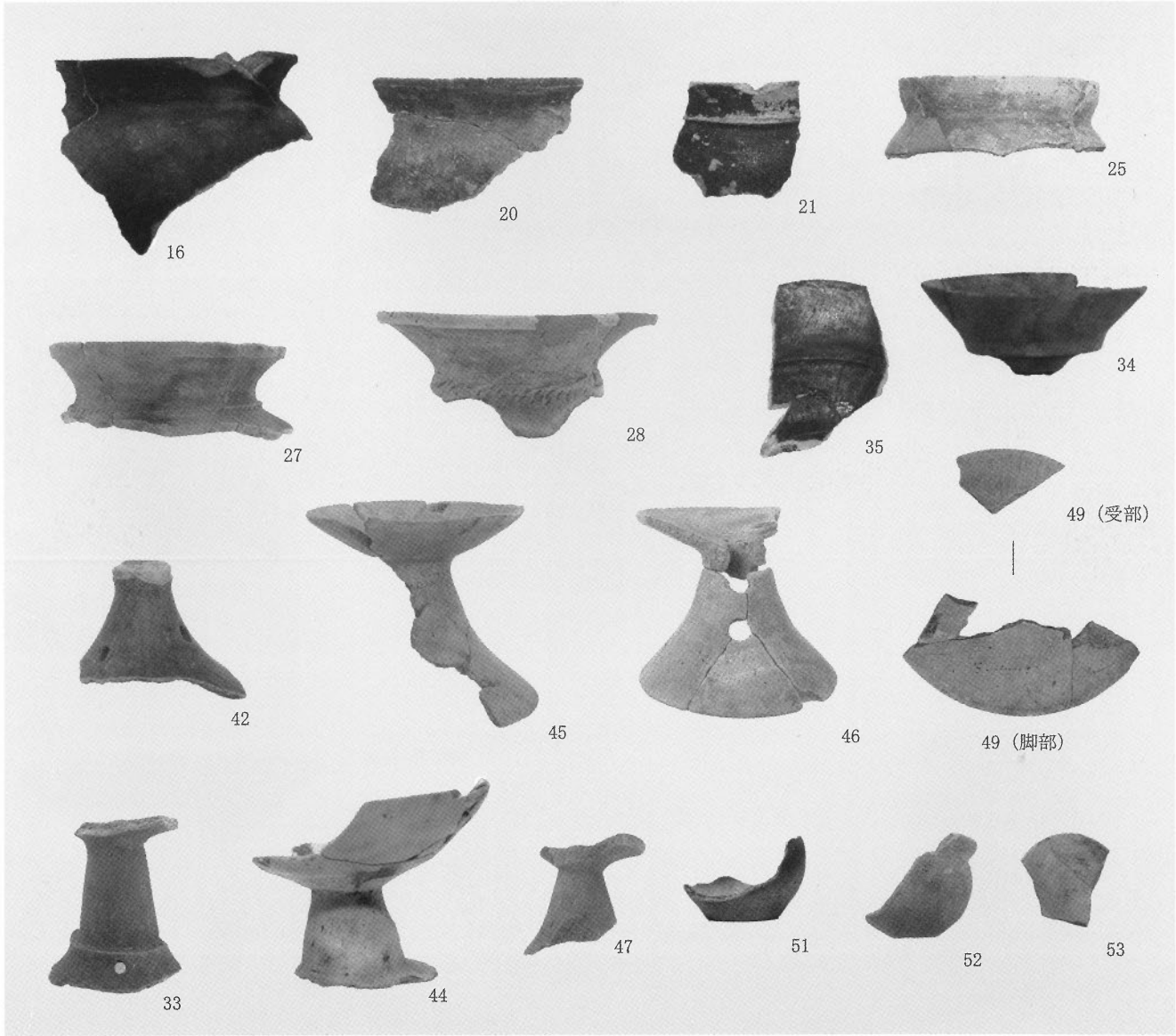
98

99

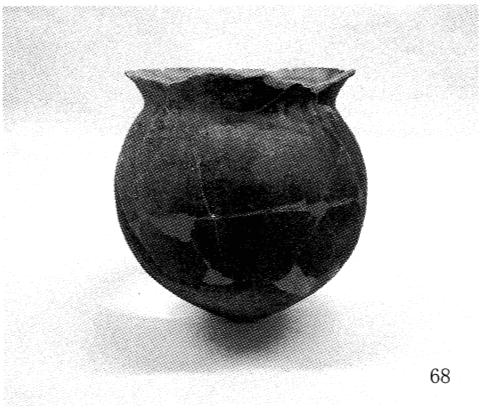
116


120

127

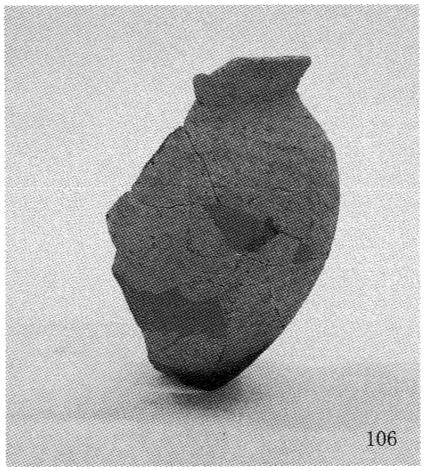


土器 SK32 SK35 SD01

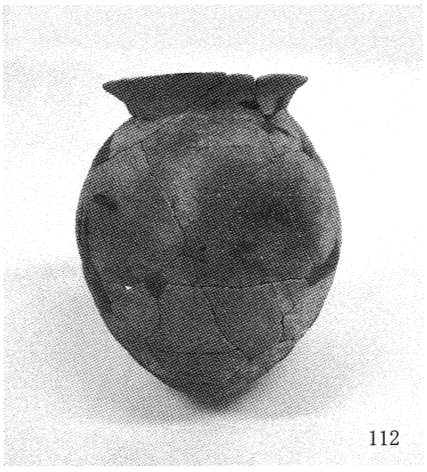

68

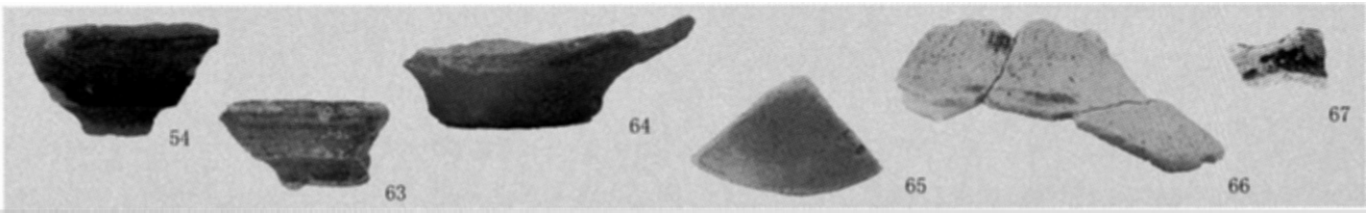
93

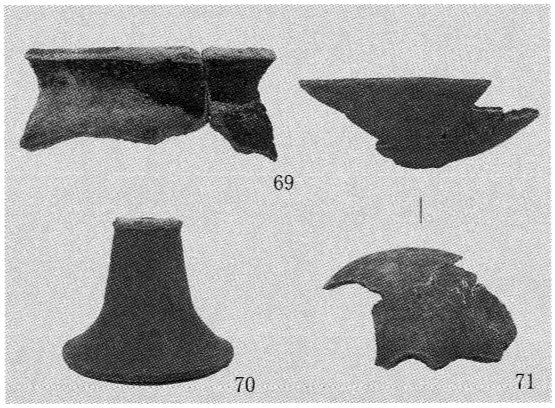
105

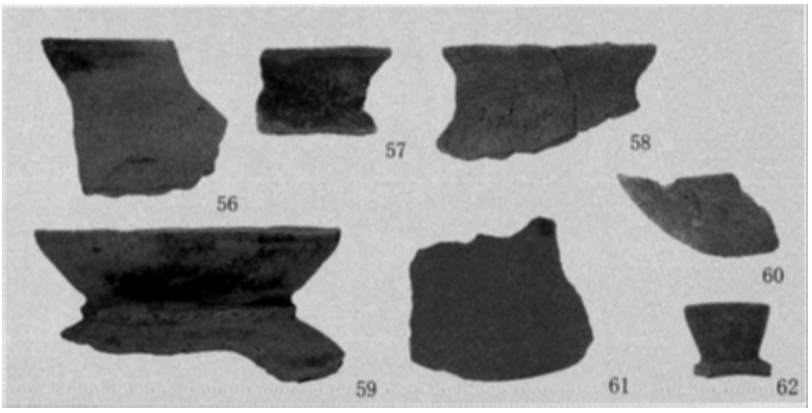

106

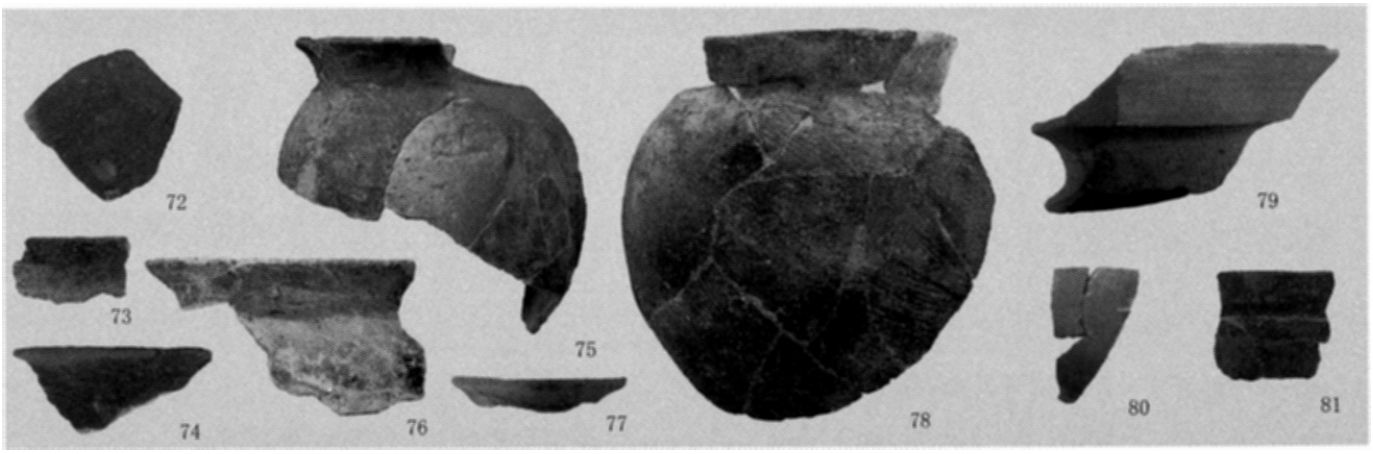
108


112

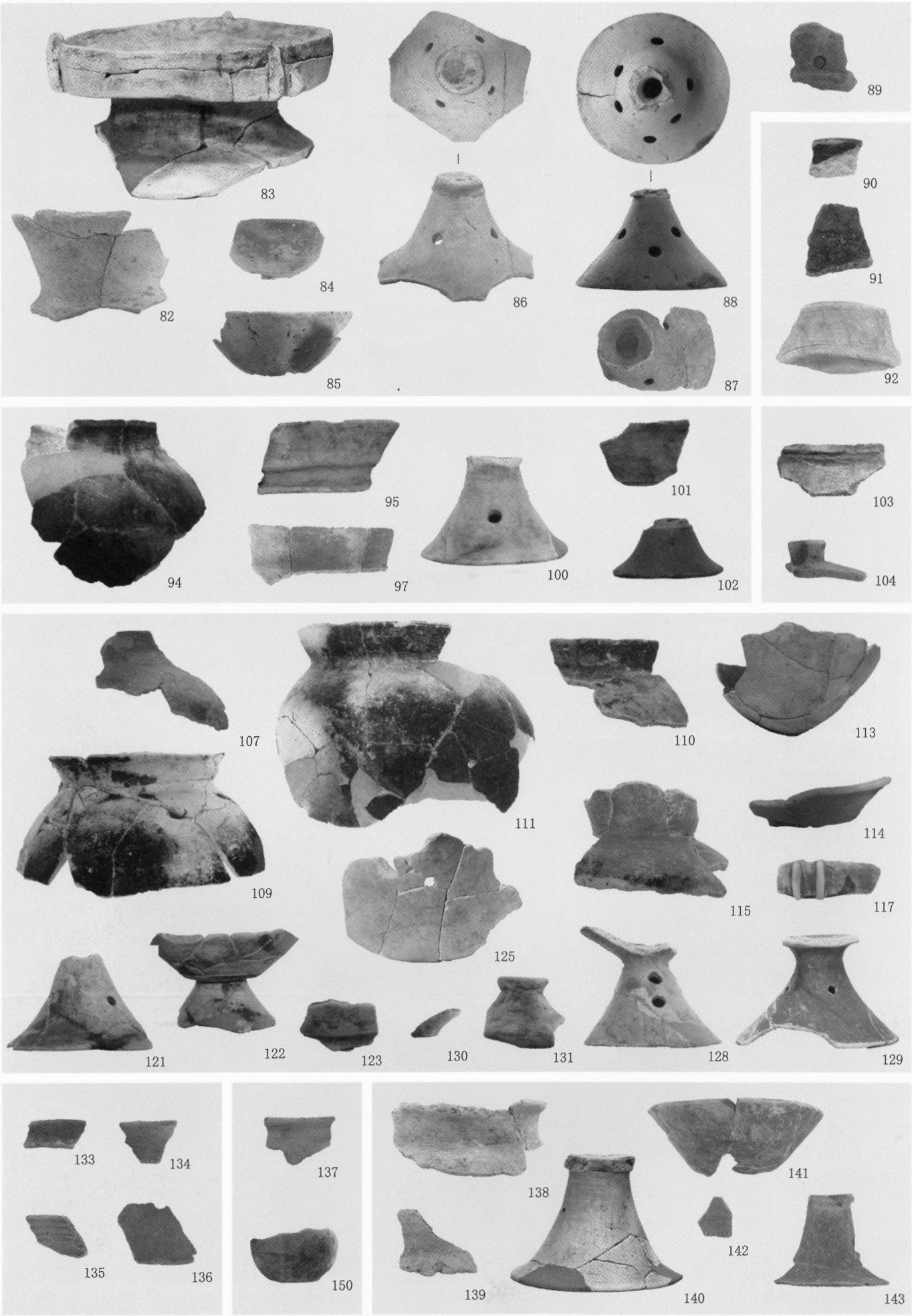




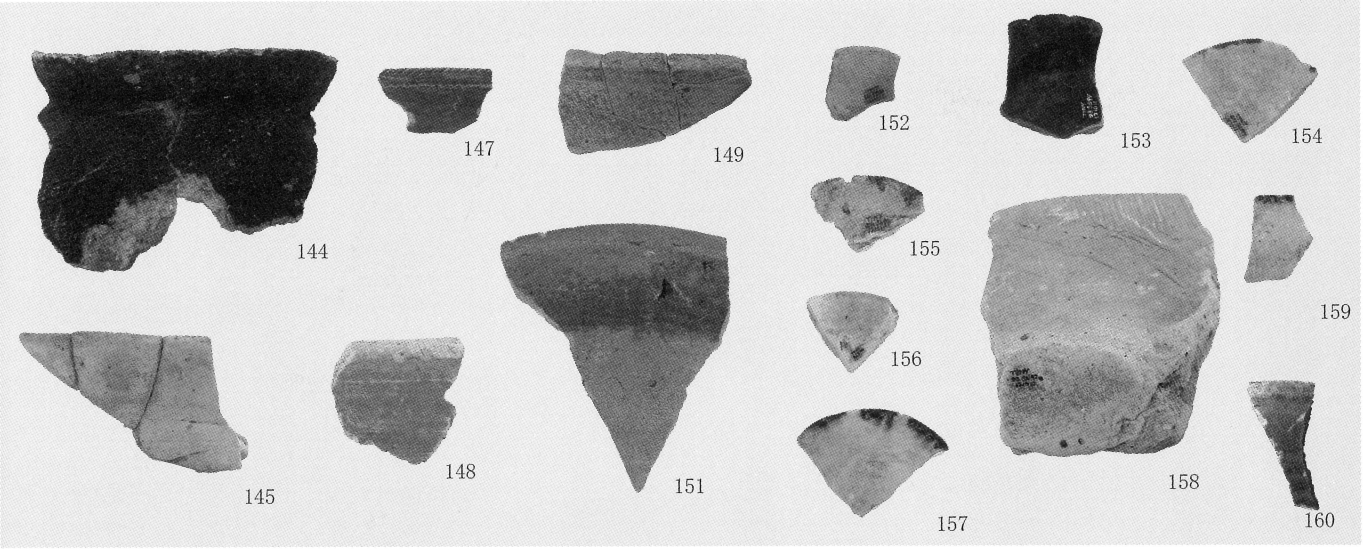


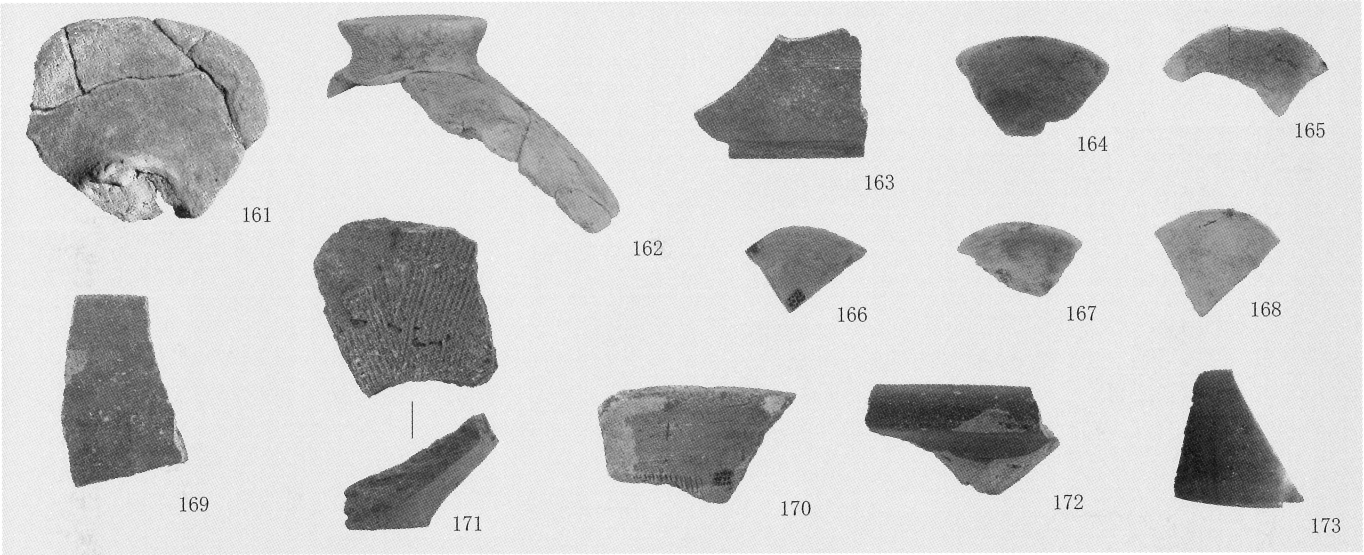


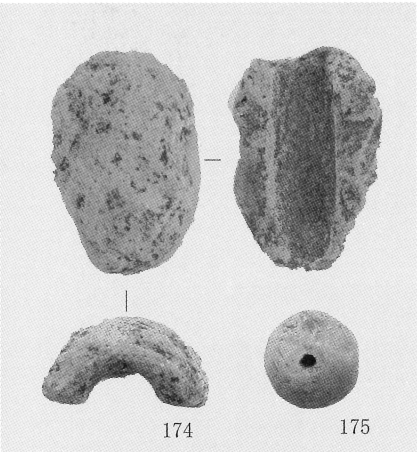
土器 SD01 SD51 SD55 SD66 SD72 SD98 SI61 SI107 SK32 SK35

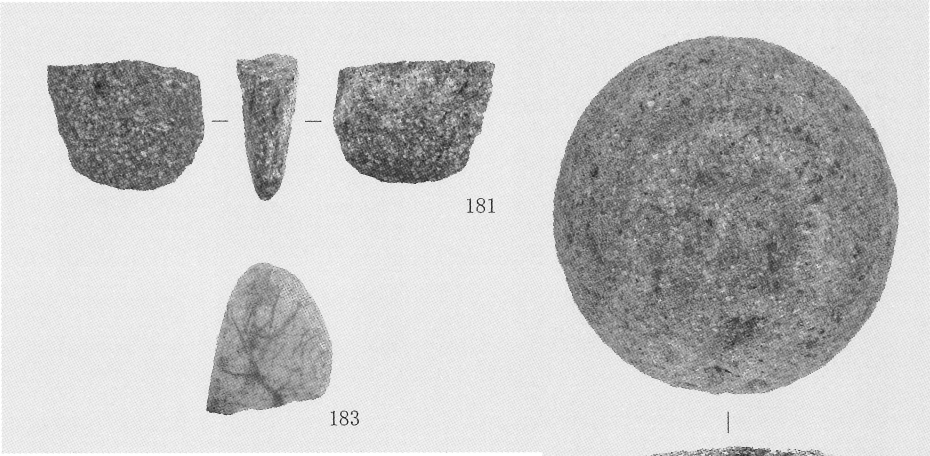


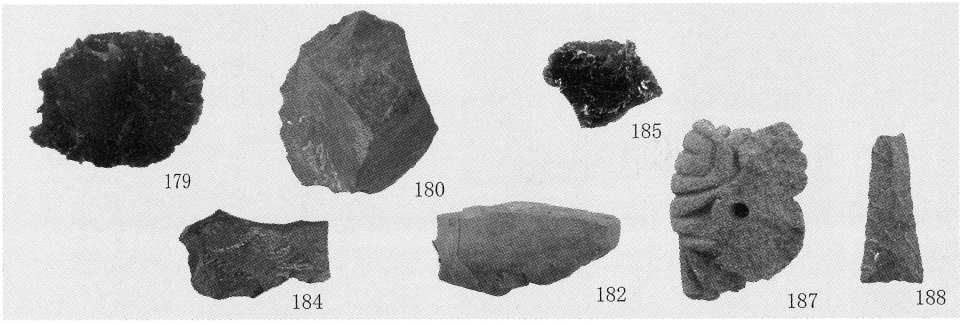
土器 SI107 SB3 -SP8 SB1 -SP26・SP27 SK32 SK34 SK35 SK36 SK48 SK178 SX157

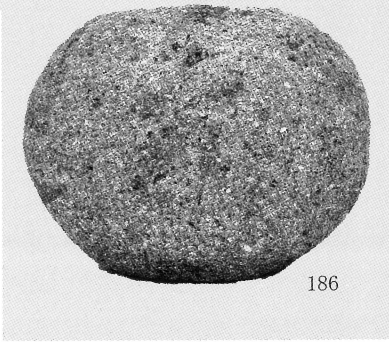




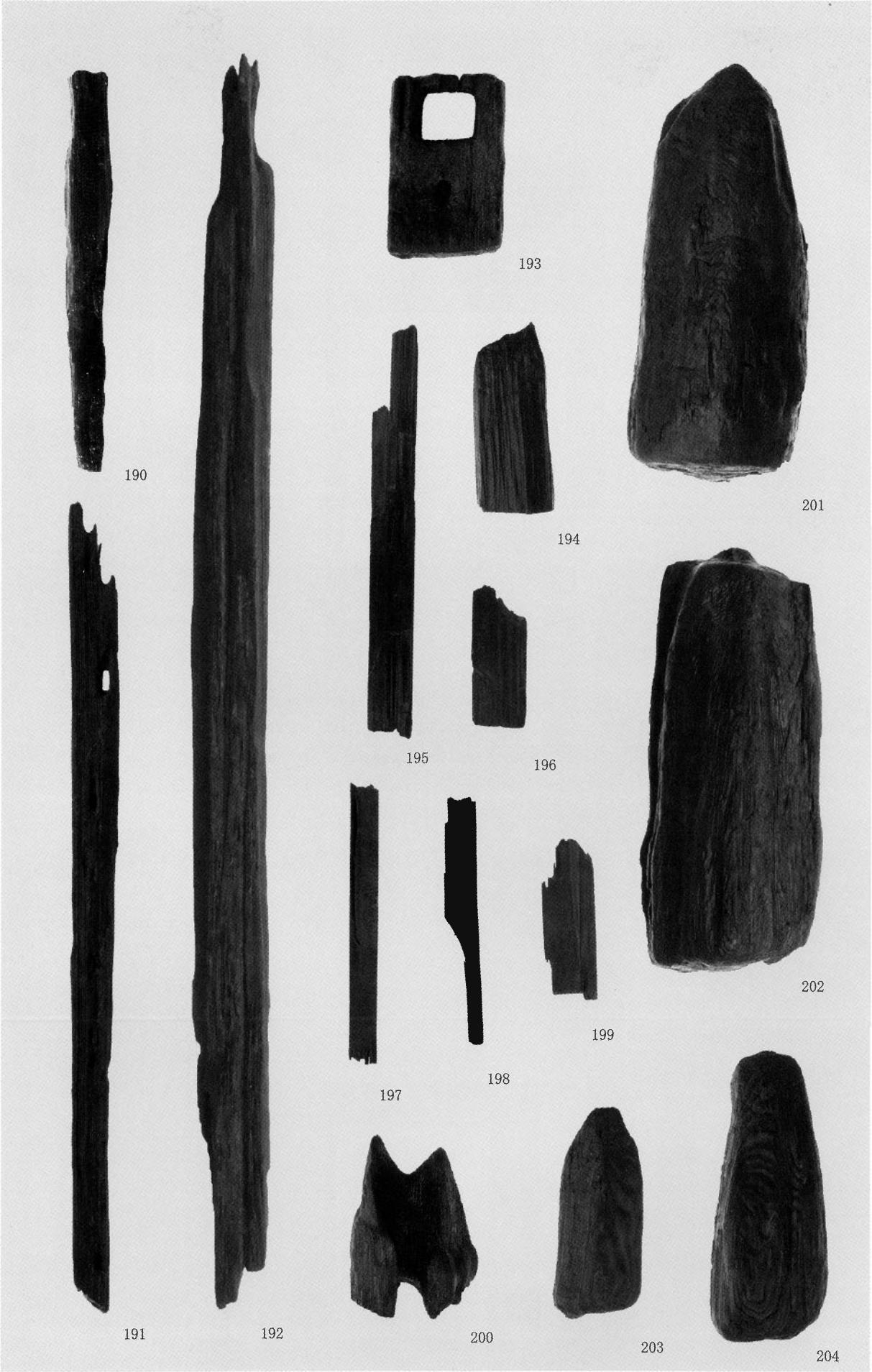








土器・陶磁器・土製品・石製品　上：古代以降遺構・Ⅱ層出土土器・陶磁器　下：土製品・石製品



木製品 SD01 SB3-SP15 SB1-SP26 SB1-SP27 SB2-SP52 SB2-SP53

報告書抄録

ふりがな	とやましとよたおおつか・なかよしわらいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市豊田大塚・中吉原遺跡発掘調査報告書
副書名	DSG WORLD 豊田店駐車場棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	58
編著者名	堀内大介・朝田　要・橋　日奈子
編集機関	富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
編集機関住所	〒930-0091　富山市愛宕町1丁目2-24　TEL.076-442-4246
発行年月日	西暦2013年（平成25年）7月25日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
とよたおおつか 豊田大塚・ なかよしわらいせき 中吉原遺跡	とやましとよたほんまち 富山市豊田本町 3ちょうめちない 3丁目地内	16201	0246	36° 43′ 35″	137° 14′ 12″	20120921 ～ 20121031	1,031㎡	駐車場 棟新築

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
豊田大塚・中吉原遺跡	散布地	縄文時代晩期	沼	縄文土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石皿、砥石	
	集落	古墳時代前期	掘立柱建物、竪穴建物、溝、沼、土坑	土師器、部材等加工木、柱根	
		平安時代	溝、土坑、柱穴、道路状遺構	土師器、須恵器、板材	
		鎌倉時代	掘立柱建物、貯水池状遺構、溝、畠、土坑、柱穴	珠洲、中世土師器、中国製陶磁器、水輪（五輪塔）	

要　約

縄文時代晩期の遺構は、調査区北端に位置し、約150m離れた1995年度調査区で検出した沼地の延長の可能性が高い沼SD01のみである。沼からは縄文時代晩期の土器がまとまって出土しており、当該期における近隣地域での活発な活動がうかがえる。

古墳時代前期の遺構として、沼SD01およびその湖畔的立地に成立した集落の遺構である竪穴建物・竪穴状遺構や掘立柱建物、大型土坑等がある。掘立柱建物の柱の放射性炭素年代測定結果が、弥生時代中期のものがあるが、遺物が出土していないことから古木効果や材の転用の可能性が高く、集落の中心となる時期は古墳時代初頭～前期であると推定できる。前回調査区では沼の肩部で木組遺構や木道、井戸等を検出するとともに、弥生時代終末期～古墳時代初頭（月影式～白江式期）の土器が多量に出土した。今回調査区の沼の肩部では古墳時代初頭～前期（白江式～古府クルビ式期）の土器集中廃棄が確認でき、南側に立地する同時期の土器が多量に廃棄された大型土坑とほぼ同時期に水辺の祭祀が行われたと可能性が高い。このようなまとまった量の遺物の出土および遺物の時期差は、集落の拡大または中心の移動の結果であり、当集落が長期間存続したと推定できる。これにより、約450m北東に立地する古墳時代前期の方墳「ちょうちょう塚」を当集落の長の墓とする地域の拠点的集落と考える。

平安時代の遺構として、道路状遺構があり、幅5.5mの間隔で東西方向に平行に伸びる。近隣の同時期の遺跡の調査結果から、当遺跡内を横断し、郡衙や駅家、荘園などを結ぶ主要な道路であると推察でき、1995年度調査区で検出した溝から出土した律令祭祀具は、交差点付近で行われた祭祀の関連遺物である可能性がある。

鎌倉時代の遺構として、貯水池状遺構とそれに連結し用水的な役割を果たしたと推察した溝、そこから北側に拡がる鋤溝群（畠）、南側には雨落ち溝を伴う1×3間の側柱建物がある。そのため、溝の北側に生産域、南側に居住域が拡がっていた可能性が高い。

富山市埋蔵文化財調査報告 58

富山市豊田大塚・中吉原遺跡発掘調査報告書

- DSG WORLD 豊田店駐車場棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務 -

発 行 日　2013（平成 25）年 7 月 31 日
発行機関　富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
〒930-0091
富山市愛宕町 1 丁目 2-24
TEL　076－442－4246
Fax　076－442－5810
E-mail：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　　刷　中央印刷株式会社